黄昏に香る音色2 紡ぐ思い

dig

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄昏に香る音色２　紡ぐ思い

【Ｎコード】
Ｎ９４２８Ｉ

【作者名】
ｄｉｇ

【あらすじ】
受け継ぐやさしさ。

星屑のよう…。

あなたをなくしたから…。

でも、まだ輝いてる。

それは…

そばに、あなたと残した太陽が輝きを…

増していくから。

世代をこえて、響く音の物語。

プロローグ

「ったく！いやになるぅ！」

カウンターに肘をついて、毒づいてしまう。

まだ学生服のままの、少女は、出されたオレンジジュースのストローをくわえた。

「仕方がないわよ。いつまでも、上には、いられないからね」

カウンターの中で、グラスを洗いながら、女は、上を見た。

「あたしだけ、ずっと上に、住んだら、だめかな？おばさんから、ママに言ってよ」

洗い終わったグラスを、棚に並べながら、女は、溜息をつく。

「無理だと、思うわよ。折角、日本に帰ってきて…やっと、親子３人で、暮らせるんだから…」

不満げな様子に、女は肩をすくめ、

「それに…あたしが、そんなこと言ったら…なんて言われるか、わからないわ」

女は、身を震わせた。

少女の母親と妹は、２年前からずっと、アメリカへ、仕事の都合で、渡米していた。

1人、日本に残ることを主張し、母親の友達と、
おばあちゃんの店であった、この場所に、2人で住んでいた。
少女の名前は、速水香里奈。
高校2年生。
店の名は、KK（ダブルケイ）。

「じゃあ！ここに、住んだら、いいじゃない！3人で」
香里奈は名案と、自ら納得した。
「3人では、狭いわよ。それに、あたしは、どうなるのよ」
香里奈は、ぎくっとし、
「さ、さ、里美おばさんも、勿論、ご、ご一緒に」
狼狽える香里奈を、冗談で睨み、
里美は、深く溜息をつく。
「どうせ、あたしは、いくとこもない…独り者ですよ」

「き、きっといい人が…すぐに、できるって！」

里美の言葉に、香里奈はさらに狼狽える。

里美は、一度結婚して、

すぐに離婚していた。

香里奈の母親の仕事が、忙しくなり、店を回せなくなった為、

母親の友達であった里美が、店を住み込みで、任されることになったのだ。

もともとドラマーで、女の子バンド―ペパーミントのリーダー。

少しは、売れたみたいだけど、結婚とともに解散し、

現在は、ダブルケイで、音楽を教えていた。

ダブルケイから、有名になった歌手は多い。

香里奈の母親に、

現在活躍中のシンガー、

天城志乃。

志乃のことは、記憶に残っていた。

もう東京へ移り、安定したヒット曲を量産する彼女が、ここに来る

ことは、

なくなっていた。

音楽が、大嫌いな香里奈も、志乃の歌うバラードだけは、好きだった。

「まだ…帰ってくるといっても…はっきりとした日は、決まってないから…。しばらくは、あたしと2人よ」

里美は、香里奈にウィンクをした。

「あたし…。この店の雰囲気は、好きなの」

香里奈の言葉に、里美は店内を見回した。

「昔に比べたら、変わったわね」

入口の前の長いカウンターに、右奥のステージ。

もう…

ダブルケイといわれたバンドは、存在しない。

里美が、初めてここに来たときに感じた暖かい空気…。

時は過ぎる。

里美が、音楽を教えているのも、昔の雰囲気を、取り戻したいだけなのかもしれない。

しかし、

志乃達の伝説が、多くの人を呼び、純粋に、音楽を習いに来る者は、少なくなっていた。

里美は今…

音楽を教えることを、休止していた。

休止していても、来る者は来る。

だけど、

誰も来なかった。

ここに来れば、志乃達みたいに、なれる。

誰もが。

そんなはずは、なかった。

いつしか、幻想とともに、人は減っていった。

里美は、2人のママみたいには、なれなかった。

香里奈の祖母が、香里奈の母を、

香里奈の母が、

志乃を育てたようには…。

太陽と日射し

「行って来まーす」

香里奈は、飛び降りる如く、二階から、階段を駆け下りた。

「忘れ物はないの？」

里美の声が、後ろから聞こえた。

「たぶん、大丈夫！」

忘れ物なんて、気付いたら、忘れない。

香里奈は、ダブルケイの扉を開けると、勢いよく、駅までの坂道を駆け抜ける。

ダブルケイは、山の麓にあった。

でも、店から山道を登ると、新興住宅地になっており、意外と通勤時は、人通りは多い。

地下へ降りる駅の入り口を、無視して、まっすぐ走ると、

やがて住宅街に入る。

それを抜けたら、学校は近い。

「おはよう」

「速水さん、おはよう」

行き交う生徒たちが、声をかけてくる。

香里奈も、挨拶をしながら、ひたすら走る。

校門が見えた。

トップスピードのまま、走り抜ける。

右に曲がると、第一校舎と、体育館をつなぐ廊下がある。

それを突っ切って、さらに右に曲がると、

第2校舎。

そこが、香里奈たち、高二の教室がある。

三階の二年二組。

教室のドアを開けると、香里奈はため息をついた。

「一番乗り…」

朝の当番は、辛く、虚しい。

黒板をふき、花瓶の水をやりかえていると、

ドアが開いた。

「おはよう…早いわね」

少し茶色ぽい栗色の髪が、サラサラと流れるように綺麗な女の子…。

よくハーフと間違えられる、目鼻立ちがはっきりとした美人…

里緒菜が、教室に入ってきた。

香里奈は、里緒菜を軽く睨む。

「おはよー。仕方ないでしょ！当番なんだからー」

里緒菜は、クスッと笑う。

「そうよね…。いつも遅刻寸前に、飛び込んでくるもの」

「朝の1分1秒が、どれだけ大切か」

香里奈は、当番の仕事を適当にすますと、自分の席に着いた。

そして、思い切り椅子にもたれながら、里緒菜の方を向いた。

「あんたこそ、早いじゃない」

里緒菜は、1限目の用意をしていた。

「あたしは、演劇部の朝練」

「演劇部にも、朝練なんかあるんだ」

「発表会が近いからね」

里緒菜の言葉に、香里奈は感心したように、へえ～と頷いた。

用意を終え、里緒菜は香里奈の方を向いた。

「香里奈」

「何？」

里緒菜の視線が痛い。

「あんたも、何かやったら？もう2年だし…来年は、できないよ」

里緒菜の言葉に、香里奈は手を振り、

「興味なし！」

里緒菜は、少し呆れながら、

「小学校の時は、やってたのに…音楽とか…」

「音楽なんて、興味ない！」

香里奈は、きっぱりと言った。

「才能あるのに…」

残念そうに、呟く里緒菜。

「才能か…」

香里奈は、里緒菜から視線を外し、

窓から見える、グラウンドを見た。

才能…。

音楽の才能なんて…。

「そう言えば…香里奈のお母さん。もうすぐ帰ってくるんでしょ」

「まだ…いつかは、決まってないけど」

香里奈の母の名は、

速水明日香。

トランペッターにして、

歌手だ。

母親の事は、よく頭に浮かぶが…

香里奈は、父親のことをあまり覚えていない…。

彼もまた、世界中を飛び回り、あまり家にいなかった。

日本にいる時も、いろんなスタジオを、つねに渡り歩いていた。

そして、香里奈が小学校低学年の時に、

事故で亡くなっていた。

妹の和恵が、生まれて、すぐのことだった。

父親の名は…

速水啓介。

世界的なサックス奏者だったらしい…。

詳しくは知らない。

音は、残っているらしいけど…ダブルケイには、おいてなかった。

母が、持っていたのかもしれない。

今は、聴きたいとは思わない…。

昔は…聴きたいと思ったことはあったけど…

いつしか忘れていた。

母のことさえ、忘れそうになる。

（あたし、一人日本…）

もし、里美がそばにいなかったら…

香里奈は、ぞっとした。

回り始めた歯車

広い店内で、営業の為の、仕込みをしていた里美は、いきなり、
扉を叩く音に、驚いた。
まだ４時だから、お客が来るはずがない。
恐る恐る扉に、近づき、
「はい…どちらさまで…」
用心深く、少しだけ、扉を開けると、
そこには、初老の男が立っていた。
きちんとしたスーツ姿で。
老人は、微笑みながら、
「こちらに、香月明日香さんは、ご在宅かな?」
（香月…）
里美は、眉をひそめた。
それは、明日香の旧姓だった。
余程の知り合いでないと、香月と呼ぶものはいない…。

里美は、訝しげに老人を見、

「生憎、留守にしておりますが…」

その言葉に、老人はさらに微笑み、

「まだアメリカから、戻っていませんか…」

（アメリカ!?）

里美は、心の中で驚いた。

「もう帰ってきてると、思ったのですが…いやはや…早すぎましたな…」

里美は、まじまじと老人を観察した。

老人も、里美を見る。

里美は、老人の瞳の奥に、鋭いものを感じた。

それでも、老人から笑みは消えない。

「それでしたら…」

しかし、老人の瞳の奥の鋭さは、増していく。

「香月香里奈さんは、いらっしゃらないかな?」

「香月…香里奈…」

里美は、名前を呟き、

その言葉の響きと、老人に危険なものを感じた。

「そ、そんな人はいません！」

里美は、頭を下げると、急いで扉を閉めた。

しばらく、扉を押さえていたけど、外から反応は、なかった。

何の反応もないのを、確認しても、一応、里美は、店の鍵を閉めた。

ほっとして、カウンターに座り込む。

だけど、

ガチャガチャと音がして、

なんと、扉が開いていく。

里美ははっとして、身構える。

扉が、ゆっくりと、開いていく。

建て付けが悪いのか…ギギィと音をたてながら。

里美は、息を飲んだ。

閉めたはずなのに…

扉が開く。

まだ明るい光が、外から入ってくる。

「ただいま…」

店に入ってきたのは…

香里奈だった。

「おばさん！いたんだあ！」

香里奈は、里美を見つけ、

「鍵閉まってるから…どこか出かけたと、思った」

里美は、安堵の息をつくと、カウンターに腰を下ろした。

「脅かさないでよ…」

香里奈は、首を傾げる。

「どおかしたの？」

里美は、ズボンの後ろポケットから、タバコを取り出すと、火をつけた。

「ちょっと…変なおっさんがいたから…」

「おっさん?」

「いや…大丈夫よ…」

里美は、つけたばかりのタバコを灰皿に置くと、

少し落ち着いたようで、席を立った。

「おかえり…コーヒー飲む?」

「うん!」

香里奈が頷くと、

里美は、カウンターに入り、コーヒーの用意を始めた。

(だけど…誰だったのかしら…)

里美は、コーヒーをいれながら、考えたけど…

(明日香の知り合い…?)

里美は首を捻り、

（あんなおじさんが…）

ファンではなさそうだった…。

（親戚の方かしら…）

いや…

明日香には、お母さんしかいなかった…。

親戚がいると、聞いたことはない…。

母子家庭だったはずだ…。

里美は、カップから、コーヒーが溢れそうになるのに気づき、慌ててポットを上げた。

新たな声

7時がまわり、ダブルケイの営業が始まる。

里美と2人で、夕食を済まし、彼女が下へ降りていくと、

香里奈は、1人の時間を過ごすこととなる。

あまり防音が、いいわけじゃないから、床から、演奏が漏れてくる。

気持ち悪くなるから、

香里奈は、テレビのボリュームを上げて、かき消す。

お笑い番組を、ぼおっと見てると、

次は、

音楽番組と告げた。

慌てて、チャンネルをかえようとした。

手が、リモコンを持ったまま…止まった。

ゲストの中に、

あの人がいた。

天城志乃。

画面の向こうから…歩いてくる。

できるか、できないかは、歩き方で分かる。

と…有名な音楽家が、言っていたけど…。

香里奈には、その意味が理解できた。

志乃の歩くリズムを、感じていると。

テレビからは、聞こえないけど…見ただけで分かる。

まだ十代でありながら、気品があった。

司会者と話す時は、気さくで、冗談も言う。

けど、

ステージに上がり、曲が始まると…すべてが変わる。

激しいビートと、

周りのダンサー…に囲まれ、

イントロが終わった瞬間、

志乃の肢体が、ナイフのように、空気を切り裂いた。

躍動する肉体が、

注目を彼女に、集中させる。

そして、

歌う。

それは、ダンサーの歌では、なかった。

天は彼女に、

パーカッションのように、弾ける肉体と、

すべてを、駆り立てる歌声を与えていた。

もう彼女しか見れない…。

スタジオは、凄まじい興奮状態になり、

観客は、まるで狂ったかのように、叫びまくる。

そんな様子に微笑むと、

一転して、曲調が変わる。

いつのまにか、持ったギターを弾き始める。

ステージ上で、1人になり、

志乃は、歌い始めた。

声質は変わらないけど…
トーンがちがう。

会場は静まり返り、

今度は、

志乃の歌に、泣きだす。

媚薬の歌姫。

志乃は、そう呼ばれていた。

まるで薬のようだと…。

常用性が、強い麻薬のような…歌手。

それが、志乃という歌手だ。

香里奈は、チャンネルをかえた。

志乃の歌が終わると、あまり興味が、あるものがない…。

結局、見たいものがないから、テレビを消す。

畳に寝転び…

天井を、ぼおっと眺める。

（志乃ちゃん…）

もう長いこと、会っていない。

（最後に会ったのは、いつ…）

香里奈は、物思いに更ける…。

数年前…。

心が雨の日

いつのように、ダブルケイは、営業をしていた。

満席の店の熱気を、下から感じながら…

2階で、香里奈は口笛を吹き、ドラマーである里美の叩きだすリズムに、身を任せていた。

唐突に、玄関のチャイムが鳴った。

普段は、あまり使わない裏口。

一応そこが、家としては…玄関になるけど、駅から遠くなるから、店の扉から、出入りしていた。

どうしても、営業中に、外に出なければならない時だけ、そこを使った。

香里奈は、階段を降り、店のステージとは、逆の方向…右に曲がった。

すぐに玄関がある。

用心深く、

「誰ですか?」

声をかける。

少し間をあけて…

返事があった。

「香里奈ちゃん…あたし…」

声ですぐに、わかった。

香里奈は、急いでドアを開けた。

「志乃ちゃん！」

玄関の前に、志乃が立っていた。

いつのまにか…

外は、雨が降っていた。

傘もささずに…

雨に打たれながら、

志乃は立っていた。

「志乃ちゃん…びしょ濡れだよ…」

香里奈は、志乃の手を掴み、家に入れようとする。

が、

志乃は、その手を、振りほどいた。

その行動に驚いて、戸惑う香里奈に、

志乃は、視線を外し、呟いた。

「こんな…家に入りたくない…」

志乃は、唇を噛み締めた。

雨が…志乃の髪から、頬を伝い、滴り落ちる。

香里奈には、何が何なのかわからない。

「どおしたの…」

志乃は、香里奈に視線を戻す。

「あたしは…」

言葉が出ない。

躊躇いが表情から、わかる。

「香里奈ちゃん…」

志乃は、香里奈を見据えた。

「あたし…あんたは、好きよ…妹みたいに思ってる。本当の妹みたいに…。例え…あいつらの子供だとしても…」

志乃は、拳を握り締め、

「あたしは…許さないから…」

香里奈は、志乃の言葉がさっきから、理解できない。

「あんたに、罪はない…。だけど…あいつらの娘なんだ…」

志乃は、香里奈の胸ぐらを掴む。

「あたしは、歌手になる！そして、あいつらに復讐する」

「志乃ちゃん…」

まだ小学生である香里奈には、

理解できない言葉より、

志乃の怒りが怖くって、震え、身を縮めた。

その様子に気づき、志乃は、香里奈を離した。

涙を溜め、震える香里奈。

志乃は少し、香里奈から離れる。

「香里奈を憎みたくないから…あんたには、やってほしくない…」

志乃は、さらに後ずさる。

そして、叫んだ。

「音楽を！」

そして、香里奈を見据えた。

「あんたは…才能がある…。だから…あたしの敵になる…」

香里奈は、震えが止まらない。

「あたしの妹なら…音楽をやめて…」

香里奈には、意味がわからない。

「あんたのお父さん達が…」

志乃は泣いていた。

ずっと…

雨の中でも、わかるくらい。

「あたしのお姉ちゃんを、殺したの！」

志乃は、泣き叫ぶ。

「あたしは！絶対に、許さないから！」

香里奈は、パニックになる。

「いい…香里奈！絶対に、音楽をやらないで！」

雨が、激しさを増していく。

「あたしの敵に、ならないで！」

志乃はそう叫びと、

土砂降りの中、

走り去っていった。

玄関で、泣いている香里奈を見つけたのは…

ライブが終わった直後の、里美だった。

汗を拭こうと、ステージ裏に、他のメンバーと、扉を開けると、

香里奈の泣き声に、気づいた。

急いでそばに、駆け寄ると、香里奈は、泣き叫びながら、里美に、すがりついてた。

「志乃ちゃんが…志乃ちゃんが…パパ達が…殺したって…」

その言葉を聞き、里美は慌てて、香里奈と2人だけで、2階に上がった。

2階に上がった2人。

「志乃ちゃんの、お姉ちゃんを、殺したって…」

里美は、香里奈の涙を、拭いながら…

「志乃ちゃんが、来たのね…」

天城百合子…。

志乃の姉…。

そう百合子は…。

「あれは…事故だったのよ」

里美は、香里奈を抱き締め、

「香里奈のパパやママが、そんなこと…する訳ないでしょ…すると

思う？」

香里奈は、首を横に振った。

「そうよ！明日香達が、そんなことするはずないわ」

里美は、香里奈の頭を撫で、

「志乃ちゃんのお姉ちゃんは、事故で、亡くなったの…かわいそうに…」

里美は、香里奈の頬に手を添えた。

「誰かに、殺されたわけじゃないから…心配しないで…」

里美の言葉と、やさしさに、香里奈はやっと、泣き止んだ。

里美は、微笑みかけ、またぎゅっと抱き締めた。

「大丈夫だからね」

香里奈は、深く頷いて、里美を、抱き締め返した。

告白

あれは、事故だった。

香里奈は、そうきかされていた。

香里奈の父…

啓介のライブを、ニューヨークまで見に行く途中、

天城百合子は…

事故に巻き込まれ、帰らぬ人となっていた。

百合子が、乗っていたタクシーに、脇見運転のトラックが、ぶつかったのだ。

即死だったらしい。

初のアメリカ旅行、

初の海外だった。

詳しいことは、わからない。

だけど、

志乃の言葉だけが、

いつまでたっても、頭から離れず、

忘れられなかった…。

殺した。

音楽をやるな。

香里奈は、あれからずっと、言葉の呪縛から、抜け出せないでいた。

どうしても…

抜け出せなかった。

香里奈は、いつのまにか…

寝てしまったらしい。

玄関のベルが、鳴った。

香里奈は、目を覚ました。

鳴ったか…どうかも、わからない。

けど、きこえた気がした。

部屋の中で、キョロキョロしていると…また鳴った。

香里奈は起き上がると、部屋を出て、階段を下りた。

「どちらさまで…」

ドアチェーンをかけたまま、少し開けた。

「速水さん…夜分遅く、ごめん」

ドアを開けた隙間から、外の様子を見た香里奈の目に、

笑顔の男の子が、飛び込んできた。

香里奈は訝しげに、男の子の見つめた。

知った顔だ…。

同じ学校だと思うけど…

話したことはないし、

名前も知らない。

「こんな時間に、家まで押しかけて、非常識なのは、わかってるんだけど…」

頭を一度下げてから、男の子は、鞄の中をガサガサと、何かを探し出した。

「携帯も、メルアドも知らないけど…速水さん家は、有名だから…直接来ました」

男の子の表情が、明るくなった。

やっと、見つけたみたいだ。

さらに、笑顔になり、

男の子は、手紙を香里奈に差し出した。

「いきなりだけど…」

今度は、顔を真っ赤にして、男の子は言った。

「好きです。付き合って下さい」

「え」

香里奈は目が、点になった。

「何!?」

香里奈は思わず、手紙を受け取ったけど、まだ理解していない。

あまりにも、突然過ぎて。

男の子は、赤くなりながらも、ずっと笑顔だ。

「返事は、今すぐでなくて、いいです。学校で、会った時に…いつでもいいから」

男の子は深々と、頭を下げる。

「じゃあ…失礼します。おやすみなさい」

一方的に、話し終わると、夜道を帰っていく男の子を、

呆然と、香里奈は見送った。

「誰…？」

香里奈は、手紙に視線を移し、首を捻った。

次の日の学校。

香里奈は、里緒菜に昨日のことを話そうと、急いで、教室に飛び込んだ。

「里緒菜！」

「速水さん、おはよう！」

声が被った。

それも、向こうの方が、声が大きい。

香里奈は恐る恐る…声のした方を、見た。

満面の笑顔で、昨日の男の子がいた…。

「同じクラス…？」

香里奈の顔が、引きつった。

「…で、コクられたと…」

昨日の手紙を、団扇のようにあおぎながら、里緒菜は、机に頬杖していた。

香里奈はチラッと、廊下寄りの、真ん中の席を見た。

男の子と目が合い、微笑みかけられる。

香里奈は、ため息がでた…。

里緒菜は、２人の様子を見て、

呆れた。

「コクられたことより…あんたが、知らないことが、びっくりよ」

里緒菜は手紙を、香里奈に返した。

「飯田直樹…成績優秀、スポーツも抜群！加えて、イケメンで、やさしいときたら…どんなに人気があるか…。それなのに…」

里緒菜も、ため息をついた。

「知らないだなんて…まして、同じクラスなのに」

香里奈は、口を尖らせる。

「だって…興味ないし…」

里緒菜は、頭を抱えた。

「色気がないと、思ってたけど…ここまでとは…」

バカにされてるみたいで、香里奈は、くってかかる。

「何よ！あんたは、知ってたの！」

「あのねえ～同じクラスなのよ！それに！」

「それに？」

香里奈は、聞き返した。

「同じ演劇部よ…」

里緒菜の言葉に、香里奈は驚いた。

「うそお！」

里緒菜は、少し機嫌が悪くなっていた。

「ナオくんが…。あんたみたいなのが…タイプだなんて…」

里緒菜はまじまじと、香里奈を、上から下まで見た。

「なによ～」

妙に照れる香里奈…。

「まあ…かわいちゃ…かわいいわね」

里緒菜は少し、納得した。

「あんたのお母さん…綺麗だもんね…」

「そうか～」

実感のない答え…。

「最近ＣＭに、出てるじゃない！あれなんて…歌も上手いし、綺麗だし…」

「ＣＭ？」

香里奈は、首を傾げた。

「知らないの！」

頷く香里奈。

里緒菜は呆れながら、

「あんたの親でしょ…。テレビ見てる？」

「見てるけど…見てない」

香里奈の言葉に、里緒菜は、顔を覗き込んだ。

「香里奈…大丈夫？」

心配そうな里緒菜の表情に、

香里奈は思いっきり、手を振った。

「大丈夫だよ」

テレビを集中して見れない理由は、わかっていた。

志乃だ…。

最近よくＣＭに、彼女は出ていた。

歌番組なら、覚悟はしてるけど…

いきなりのＣＭは、心を緊張させた。

歌は好きだし…

尊敬もしていたけど…

恐れていた。

そんな気持ちを、知らない里緒菜。

「あんた…普段、何やってるの？部活もしてないし…」

「別に…」

香里奈は、自分でもわからなかった。

時々…

自分が、抜け殻のように、感じる時があった。

「香里奈」

里緒菜の声に、我に返った。

「どうしたの…」

少しぼおっとしてたらしい…。

「あっ…ごめん」

「疲れてるじゃないの…」

「大丈夫。ありがとう…里緒菜」

ベルが鳴り、授業が始まる。

心を蝕む

それは…小さな場所で…

小さなものによって、始まった。

初めは、誰も関心をしめさなかった。

しかし、

じわじわと、染み込んできた。

最初は、夜の暗闇から…

次は、夜の明かりに照らされ、

そして、

それは、普通の日差しの中にまで、存在しょうとしていた。

激しく、扉を叩く女がいた。

壁のような一枚鉄の扉は、頑丈だ。

女の力では、びくともしなかった。

拳から、血が出るまで、いや…出ても、叩き続けた。

だけど、

扉は開かない。

発狂したような声を上げると、女は両手で、しばらく叩いたが、しばらくして…女は、扉に耳をつけた。

微かな振動で、中の音が聴こえた。

それだけで、女は涎を流して、うれしそうな顔をした。

ああっ…。

声をもらしていると、

ゆっくりと扉が開いた。

光のない光…

外の暗闇より、明るい癖に、暗かった。

ぬ〜うと、細長い手が扉の中から、出てきて、女の首筋を掴むと、

そのまま・・・・・中へと引きずり込んだ。

扉は、すぐに閉まった。

「何をしにきた…」

まだ喘ぐ女は、歓喜の声を上げた。

さっきは振動だったが、

今は直接、浴びることができたからだ。

音だ…。

この音は…。

狂ったように、両手を天に向けた。

そこにいる者たちは…。

「チッ！壊れてやがる」

女を中に入れた男は、そう呟くと、女を離し、乱暴に床に投げ捨てた。

「仕方がないでしょ…」

奥の方から、ブロンドの髪を束ね、黒いスーツを着た女が、出てきた。

「直接、聴いてるんだから…」

ブロンドの女は、後ろを振り返った。

そこは、百人程が入るライブハウスだった。

そのステージの下では…

観客は叫びながら…狂っていた。

本能のまま…

快楽を楽しむ。

「あたしたちだって…これがなければ…」

ブロンドの女は、髪をかきあげた。

耳につけたヘッドホンなようなもの…。

「これをつけていても…体が、火照ってくるのに…」

ブロンドの女は、喘ぐ女をちらっと、蔑むように見る。

「こいつがしつこく、ドアを叩きやがるから！」

男は女を掴むと、無理やり立たす。

「聴きたけりゃー金」

男の肩に、ブロンドの女が手を置いた。

「ティア…」

ティアと呼ばれたブロンドの女…。

ティアは微笑み、

「いいのよ…お金なんて…後で」

ティアは女の耳元で、そっと囁いた。

「今日は、一人で来たのね。それはダメって…言ったはずよ」

ティアはさらに、微笑むと、女の耳を掴み、

そのまま、女を外へ引きずり出した。

女は、耳がちぎれそうになっていても、興奮していた。

「次に、来る時は…あなたの、大切な人を連れて来なさい」

ティアは扉を閉めながら、

「あなたの大切な人…それが、この会場のチケットよ」

外に出され、泣き叫ぶ女。

女は這いずりながら、中に戻ろうとするけど、

ティアは鼻で笑いながら、扉を閉めた。

「大切な人ねえ…」

男は笑い、

「金の方が後悔しないぜ…」

ティアは苦笑し、

「狂うときはいっしょ…」

ステージの上を仰ぎ見た。

そこにいる者…。

それは…闇。

心の闇。

ガラガラと…建て付けの悪いドアが、開き、担任の先生が入ってくる。

みんなが、一斉に立ち上がり、朝の挨拶が始まる。

担任は、事務的に出席を取り終わると、

「何か、連絡事項はない…ね。…もうすぐ試験だから、予習復習を大切にして下さ…忘れないように」

言い直す先生に、生徒が苦笑した。

一人の女生徒が、口をはさんだ。

「牧村先生！また怒られますよ」

牧村は、キョロキョロと周りを見た。

「仕方がだろ～癖なんだから」

生徒に、あまり丁寧に話すなと、

学年指導に、牧村は何度も注意されていた。

しかし、

社会人から、先生になった牧村優一には、上から話す口調は、なか

なか言えなかった。

今日も言えない。

教師になって、3年が経った。

早いもので…。

最初は、母校を志望したけど…空きはなく…たまたま偶然…

季節外れに、体調不良の為、退職した社会科の先生の変わりに…

この学校に、着任することができた。

最寄りの駅で、降りたゆうは、驚いた。

（ここは…）

立ち止まり、見上げた坂道。

そして、その一年半後…。

初めて、担任のクラスをもつことになった。

そのクラスで、再び出会った。

懐かしき面影に…。

初恋の女性に似た少女…。

その少女は、彼女の娘だった。

「先生…？」

生徒の声で、ゆうは我に返った。

少し、ぼおっとしてしまったようだ。

（朝見たＣＭのせいだな…）

唐突に、画面に映った…懐かしき思い出に。

さらに、綺麗になったあの人の姿を、久々に見た。

噂はきいていたが、日本にいないから、長いこと会ってなかった。

（多分、俺の結婚式で会ったきりだ…）

テレビに見惚れるゆうを、

後ろから、じっ～と睨む妻。

「相変わらず～。明日香さんは、綺麗ですよね」

ぎくっとして、慌ててテレビをかえようとするが…リモコンが見つからない。

「そんなに慌てなくても…わかってることですよ」

妻…牧村幸子。

彼女も、明日香を知っていた。

同じ歌手として…。

今は、たまにしか歌わないが、音楽活動はやめていなかった。

ゆうは、妻といっしょにやっていたけど…

教師になってから、あまりいっしょに、ステージにたっていない。

幸子は、ため息混じりに、

「昔は…。お前をステージに連れていってやるとか、言ってた癖に…」

ゆうを教師になるよう、すすめたのは、幸子だ。

でも、女はむずかしい…。

ゆうはそそくさと、家を出た。

「ごめん、ごめん」

ゆうは、照れたように謝った。

ホームルームの終わりを告げる鐘が、鳴る。

「あちゃ…もう終わりか…ごめん！終礼は、ちゃんとやるから」

すまなそうに出ていくゆうの姿に、生徒から笑いが出た。

「あんなんで～いいわけ？」

香里奈は、後ろの席にいる里緒菜にきいた。

「まあ、牧村先生らしいんじゃあないの」

次の授業の準備を、手際よくしながら、里緒菜はこたえた。

「やれやれ…」

ため息混じりの香里奈。

また音をたてて、ドアが開き、次の授業の先生が、入ってきた。

「起立！」

いつもの決め事だ。

何度かの退屈な授業を、終えて…やっと昼休みだ。

「疲れたぜ」

大きく背伸びして、一番最初に立ち上がったのは、

岸本恵美。

身長１７５？と背が高く、モデルのようでありながら、柔道部という…熱い格闘家である。

「今日は外で、食べようよ」

眼鏡をかけ、小柄で目がクリッとしてかわいい…中山祥子が、香里奈の方に走り寄ってくる。

動きが小動物だ…。

香里奈は、外を見た。

気持ちよいくらいの、快晴だ。

「外いこう！」

「オウ！」

と香里奈、恵美、祥子が声を上げる中…。

一人、授業の片付けをしていた里緒菜。

「あたしはいい…。今日はお昼、部室にいかなきゃいけないから」

さっさと、教室を出ていく里緒菜。

その姿を見送る3人。

「機嫌悪いのか？」

こういうことに敏感な恵美は、香里奈にきいた。

香里奈は首を傾げる。

「演劇部、忙しいのよ！多分」

祥子は、2人の間に入った。

「と、とにかく！外行こうよ」

「ああ…」

そんな3人に、近づく者がいた。

「香里奈さん！いっしょに、ご飯にしましょう」

満面の笑みを、浮かべた直樹だ。

「え…ああ」

思わず口ごもる香里奈。

笑顔の直樹。

そんな2人を交互に、見回す恵美と祥子。

香里奈はまだ、昨日のことを、2人には言ってないことを、思い出した。

「あのさ…」

香里奈が、説明しょうとした。

その時、

何か閃いたみたいに、直樹は声を上げた。

「やっぱり、おかしいよね。男、1人じゃ」

いきなり振り返り、直樹は叫んだ。

「和也!」

廊下側の、一番後ろの席にいる男…。

和也は、教科書を開いて、頭にのせ、さっきの授業から寝ていたらしい。

返事がないので、直樹はツカツカと、和也の席まで歩いていき、教科書をとると、耳元で叫んだ。

「和也!」

「うるせいな…」

だるそうな声で、和也が目を覚ました。

「和也。ご飯いくぞ」

和也は、直樹の顔を見る。

「昨日…仕事で、あんま寝てないんだ…寝させろよ」

また寝ようとする和也。

「和也！」

直樹は寝させない。

「和也！」

しつこい直樹に、切れそうになる。

「腹も減ってない…う…」

思わずのけぞる和也。

他には見えないように、ボディブロウを、直樹は軽く、お見舞いしていた。

「な、なおき…」

呻く和也の耳元で、何かを直樹が囁く。

顔色が変わる和也。

「て…てめえ…脅す気か」

直樹はニヤリと笑う。

しばらくの間…。

和也は席を立った。

「しゃーねぇなあ…」

藤木和也。

１８０はある長身に、少し色黒で茶色の瞳…。

雑誌のモデルを、こなすイケメンである。

色が白い直樹とは、対象的だ。

同じクラスではあるが、香里奈とは、別の世界にいるように感じていた。

和也は、だるそうに欠伸をし、香里奈の方を見た。

「で、どこいくの？」

「あ」

口ごもる香里奈。

「屋上です！」

香里奈の代わりに、祥子がこたえた。

「ＯＫ、わかった。さっさと行こうぜ」

一番先に、教室をでる和也。

「じゃあ…行きましょう。速水さん」

直樹が促す。

なぜこうなったのか…理解できていなかったけど…

祥子は、和也の後を追う。

「行きましょう」

戸惑う香里奈の耳に、恵美が囁いた。

「あたしは、あんなチャラチャラした男、すかん」

一応、恵美は、祥子の後に続く。

「後で話せよ」

と恵美に、言われても…。

一番理解できてないのは、

香里奈だった。

屋上では、散々だった。

まったく話さない和也と恵美。

逆に、香里奈に、

「これ、おいしいよ」

とか、色々すすめてくる直樹。

直樹と和也に、気を使いまくる祥子。

（せっかくの昼休みが…）

深いため息をつく香里奈。

「ご、ごめん…やっぱり迷惑だったかな…」

香里奈の様子に気付き、はしゃいでた笑顔から、一転して暗い顔に

なる直樹。

「天気だし…。みんなで食べた方が、おいしいかと…」

直樹は、広げていた弁当をしまう。

「ずうずうしいとは思っていたんだ…」

直樹は、香里奈や恵美、祥子に頭を下げる。

「もう…こんなことしないから…ごめん」

そのまま、屋上から消えていく。

「直樹！待てよ」

慌てて、和也は追いかける。

何とも言えない空気が、屋上に流れた。

「…で、何があった？」

直樹たちが、去ったのを確認して、恵美は、香里奈に詰め寄った。

「何があったんだ」

強い口調の恵美。

祥子も、香里奈に顔を近づけ、

「香里奈ちゃん！」

2人の迫力に圧倒され…香里奈は口を開いた。

「好きだって…言われただけ…」

しばらくの間…。

「えええええ！！」

2人の絶叫。

「どっちよ！飯田くん、それとも藤木くん！」

祥子は、香里奈の肩を掴んで、揺らしながら、悔しそうにきいた。

「い、飯田くんだけ…モデルとちがう方…」

香里奈の言葉に、2人は呆れた。

「あんた、飯田くん…知らなかったの！？」

香里奈は頭をかき、

「あんまり…男の子の名前覚えないから…」

「信じられなあい！あの飯田くんよ！綺麗で、やさしいくって、格好いい…。藤木くんとのツーショットなんて、芸術よ！」

妙に興奮している祥子。

「それなのに～飯田くんを知らなあ～い！それどころか～告白されただとおお！」

いつもと様子が、ちがう祥子に、恵美もひいた。

「そんな事実が広まったら！クラスの…いや、学年の、学校中の女子を、敵にまわしたことになる！あたしも含めて！」

ギロッと、香里奈を睨む祥子。

「ショッちゃん…」

怯える香里奈。

「まあ…そこまではならないけど…友達だから」

というけど…祥子の雰囲気は、怖い。

「でも、驚いたのは…。どうして、香里奈なんだ」

恵美は、香里奈をマジマジと見、

「確かに…よく見りゃあ…美人系だが…」

「ガサツだし、女ぽくないし、可愛げがないし」

普段、そんなことを言わない祥子の言葉が、特に、香里奈に突き刺さる。

落ち込む香里奈の姿に、満足したのか…

かわいそうに感じだしたのか…

祥子は、咳払いをして、

「とにかく…他の女のやっかみに、気をつけた方がいいわ」

実感がないまま、香里奈は頷いた。

「おい、直樹！待てよ」

階段を降りる直樹を、追いかける和也。

階段の途中で足を止め、直樹が振り返る。

「ごめん…和也」

「はあ？」

「お前にも迷惑かけて…」

「何言ってんだよ」

和也は急いで、階段を降りると、直樹の肩に、手を置いた。

「好きなんだろ」

その言葉に、少し驚いた表情の後、直樹は強く、頷いた。

「ああ…」

「だったら、いいぜ。謝るなよ」

和也は、直樹を追い抜く。

階段を降り終えると、逆に振り返り、

「頑張れよ」

「和也！」

「お前には…俺の方が、いろいろ迷惑かけてるからな」

和也はそう言うと、軽く手を上げて…そのまま廊下を、消えていった。

しかし、和也は内心驚き、困っていた。

「よりによって…速水とはな」

技

放課後になる。

誰よりも早く来て、

誰よりも遅く帰る。

如月里緒菜とは、そういう女だった。

台本を細かく、チェックしていく。

すると、ドアが開いた。

直樹だ。

「早いね」

大体、一番か二番は、2人のどちらかだった。

「台本、合わせない？」

里緒菜の言葉に、少し驚いたが、直樹は頷く。

2人だけの台詞合わせ。

「例え…あなたが、何であろうと…」

直樹のセリフが続く。

「ぼくの気持ちは、変わらない…例え、あなたがどんな身分でも…
ぼくはあなたを」

「愛してる」

里緒菜は台本を閉じた。

「どうしたの？」

直樹は、里緒菜を見た。

しばらくの間。

やがて…。

直樹の方を見ないで、里緒菜は、口を動かした。

「わたし…きいてなかった…」

「何を…？」

里緒菜は、直樹の方に、顔を向けた。

「香里奈のこと…」

「ああ…如月さんは、香里奈さんの知り合いだったね…」

笑いながら、視線を外す直樹。

「香里奈みたいなのが、タイプなんだ…」

その言葉に、反応する直樹。

「ちがう…タイプじゃない」

「タイプじゃないって、どういうことよ！」

里緒菜は思わず、声を荒げた。

「香里奈さんみたいな…タイプが、好きじゃなくて」

直樹は、真っ直ぐ前を見据え、

「香里奈さんが、好きなんだ。タイプとかじゃない」

直樹の言葉も、まっすぐだ。

「香里奈さん…本人だけが好きなんだ」

里緒菜はじっと、直樹を見つめ、
少し目を閉じた。

ゆっくりと目を開けると、
「本当に好きなんだ」
「うん」
里緒菜は、少し苦笑すると、満面の笑みを浮かべ、
「応援するわ。ナオくん」
優しく、直樹の顔を見た。
「ありがとう」
直樹は、里緒菜に手を差し出す。
里緒菜は笑顔のまま、握り返した。
「私。香里奈の友達だから…何かあったら、相談にのるから」
「ありがとう」
直樹は、素直に頭を下げた。

香里奈は一人、学校の階段を降りていた。

恵美も祥子も、もちろん里緒菜も、部活だった。

香里奈だけ帰宅部だ。

降りる向こうに、和也がいた。

「よお」

和也は、香里奈を見上げ、軽く挨拶をした。

「藤木くん…」

香里奈は驚いた。和也に、声をかけられるのは、これが初めてだった。

「一人で帰りかい？」

香里奈は、階段を駆け降りた。

「みんな、部活だから…」

「そお」

和也は頭をかきながら、少しよそよそしく、

「速水さんは、部活やらないのかい？」

香里奈もよそよそしく、こたえた。

「き、興味があるのが、なくって…無理やりやるのも、失礼だから…」

香里奈は、和也の隣に立った。

やはり背が高い。

見上げてしまう。

「という藤木くんは…何かやってるの？」

「俺？…俺は…外の部活がいろいろ…」

「そっかあ！雑誌のモデルやってるものね」

「まあなあ～」

照れたように、和也は鼻の頭をかく。

「今日もあるの？」

「いや…今日は別用だ」

チラット腕時計を見ると、和也は、

「ごめん…もう行かないと」

和也は歩き出す。

「いってらっしゃい」

後ろ姿に、手を振る香里奈。

ふっと、和也の足が止まる。

ゆっくりと振り返り、

「速水！」

「うん？」

香里奈は、手を振るのを止めた。

ほんの少しだけ、和也は香里奈を見つめた。

少し緊張する香里奈。

和也は微笑み、

「直樹をよろしくな」

そう言うと、香里奈の返事を待つことなく、

和也は、廊下の奥に消えていった。

香里奈は、一人立ちすくみ、

和也へのこたえに、戸惑っていた。

想い出の影

長く続く…テレビ局の冷たい廊下を、付き人たちを振り切るようなスピードで、歩く女。

ラフにデニムと、Tシャツという出で立ちでありながら、漂う雰囲気は、気安くはなかった。

天城志乃。

現在の日本の音楽界トップに、位置する一人であり、日本人離れした歌声、ダンスの表現力は、世界を狙えると、噂されていた。

志乃は、用意されている楽屋に入った。

今日は、バラエティーの収録だ。

馬鹿らしいと、思いながらも、テレビの影響力は、わかっていた。

馬鹿に見せるんではなく、気さくに。

カリスマ性なんて、いらなかった。自分より、歌が有名になればいい。

楽屋に入るが、くつろぐ暇はない。

所属会社の社長が、飛び込んで来た。

「天城く～ん。どういうことなの！」

顔を真っ青にして、社長が直々に、志乃に詰め寄る。

「何です？」

志乃が、社長を軽く睨むと、それだけで社長は、慌てる。

弱小企業。

志乃が、メインで成り立っている。

「い、い、いえね～別に志乃ちゃんに対して…何か、言いたい訳じゃなくって…」

社長は、志乃のそばにいるマネージャーを睨んだ。

慌てるマネージャーは、志乃に気を使いながら、口を開いた。

「例の契約の件です」

志乃は、社長の方を向いた。

それだけでビビル周り。

志乃は、置いてあったお茶を飲みながら、

「あれね。別に悪い話じゃないわ…」

お茶を飲む志乃を、見守る取り巻き。

「アメリカを、ターゲットにいれたら…必要だから」

「でも、会社に相談もなく…」

社長の言葉は、志乃の目力でシュンとなる。

「悪かったとは、思ってるけど…あたしには、目的があるの」

志乃は、一冊の雑誌を社長に投げた。

それは、アメリカの音楽雑誌だった。

「13ページ」

志乃は、お茶を一口すすった。

急いで、ページをめくるが、英語で書いてある為、読めない。

社長は、愛想笑いを浮かべる。

横から覗き見たマネージャーが、何とか訳していく。

「中毒患者、続出…音のドラッグ…すばらし過ぎる音の麻薬…」

志乃は、お茶を飲み干す。

マネージャーが、それに気づき、お茶を入れようとするが、

「続けて！」

志乃は、それを制した。

マネージャーは恐る恐る、雑誌を訳していく。

「その者の素性は、わからないが…こう呼ばれている…ケー…」

「読み方が違う！」

志乃は、コップを床に叩きつけた。

怯える周りに。

「あいつだ！」

志乃は震えていた。

空港のロビー近く…。

人混みから、離れたところ。

女は、かかってきた携帯電話を取る。

電源を切ろうとした瞬間だった。

「俺だ」

電話に出た瞬間、クスッと笑ってしまう。

「あら。まだ生きてたの？」

その言葉に、絶句したのか…しばらく無言になる。

「ひどいな…それが恩人にいうセリフか」

「あらあ…いつも、もう終わりとか、死ぬばかり…言ってるから、そろそろかと」

また無言になる。

少し間があって…、

「いつから、そんな冷たい女になっちまったんだ…明日香」

大きな旅行鞄を、傍らに置き、電話にでている女は…、

速水明日香、その人だった。

明日香は苦笑し、

「で、サミーどうしたの？いきなり電話してきて」

「明日香…」

冗談を言いながらも、サミーの電話の声のトーンが、さっきからおかしいことに、
明日香は気づいていた。

「知ってるか…明日香」

「何を…」

「音のドラッグだ」

少し間を開けて、
明日香はこたえる。

「知ってるわ」

明日香は前のベンチに、大人しく座っている和恵を見た。

速水和恵。

香里奈の妹だ。

「まるで、麻薬のような音…西海岸辺りを、中心にして、中毒患者が続出…」

「その音を聴いたものは…快楽から、やがて狂ってしまう…」

「薬ではないから、警察も取り締まれない…」

「明日香…だったら、そいつが、そいつらが…何て言われてるか、知ってるのか？」

明日香は目をつぶり、静かにこたえた。

「知ってるわ」

「明日香…」

「ＫＫ…ダブルケイよ…」

「明日香…やつは、生きてるのか…」

明日香の返事はない。

「生きてるのか！啓介は！」

サミーは、電話越しに叫んでいた。

「啓介は…」

明日香は、言葉を噛み締め、

「あの人は死んだわ」

サミーは認めない。

「人を狂わせる音を吹けるやつなんて、そうはいないぞ！」

興奮しているサミー。

「サミー…。啓介は、死んだのよ…」

明日香は電話を切った。

しばらく、その場で、立ち尽くしてしまう。

「ママ…時間だよ」

和恵の声に、我に帰る明日香。

場内アナウンスが、日本行きを告げる。

「帰りましょう…お姉ちゃんのところへ」

和恵が笑顔で頷くと、明日香は、手をつなぎ、

歩きだした。

思惑

一人…トボトボ歩いてしまう香里奈…。

先程の…和也の言葉が、気にかかる。

正直、

直樹に告白されて、いやな気持ちには、ならなかった。

戸惑ったけど、ドキドキした。

でも…

あまり彼を知らない。

香里奈の足は、いつになく重い。

やっと駅近く来た時、香里奈を、呼ぶ声が後ろから、聞こえた。

振り返ると、全速力で走ってくる直樹が見えた。

息を切らしながら、物凄い速さで、香里奈に追いついてくる。

「間に合った…」

直樹は、激しく息をしながらも、笑顔を香里奈に向けていた。

「部活じゃなかったの？」

里緒菜は、今日も部活で、忙しいと言っていた。

「行ったんだけど…途中で抜けてきた。ぼくのパートは、もう完璧だし」

直樹は、駅から見上げる山を眺めた。

ダブルケイも見える。

「それに、ちゃんと話したかったんだ。好きになった理由を」

直樹は、香里奈に視線を移し、眩しそうに見つめた。

夕焼けの光が、美しく香里奈を照らしていた。

ダブルケイに行く途中に、左に曲がる道がある。

その道を行くと、すぐに公園があった。

もう夕方…誰もいない公園のベンチに、二人は腰掛ける。

「もう…何年も前だけど…。ぼくの両親が亡くなって、すぐぐらいに、あなたの歌を、聴いたことがある」

「あたしの歌…」

直樹は頷く。

「おばあちゃんが…連れていってくれたんだ…。ダブルケイに」

夕焼けが、沈みかけてる。最後の輝きが、ダブルケイを一層照らしていた。

「夜じゃなくて…昼間…発表会か、何かだった…」

もう遠い昔。

小さな男の子が、ステージで歌っていた。

何かヒーロー番組の主題歌だ。

武田が、最後をしめるフレーズを叩いた。

拍手がわき起こる。

ペコッと頭を下げると、男の子はステージを降りる。

小さいうちから、音楽を気楽に、楽しんでほしい。

そう考えていた明日香と里美は、触れ合える音楽を、カラオケでなく、生バンドで、経験させたかった。

近所の子供たちを集め、無償で教えていた。

直樹は、ステージ前に並べられたパイプ椅子の一番端に、行儀よく

に座り、

同年代の子供たちの歌を聴いていた。

両親を亡くしたばかりの直樹を、元気させる為に、祖母が連れてきたのだ。

だけど…。

歌い終わった男の子を、やさしく迎える家族。

幸せそうな笑顔は、

遠いものを感じさせた。

次の女の子が、ステージに上がり、アイドルのヒット曲を歌う。

「あんまり、カラオケと変わらないじゃない」

オレンジジュースを片手に、直樹の近くに立っている少女が、少し不満げに呟いた。

「そう言わないの。志乃ちゃん」

明日香が、志乃のそばに来た。

「志乃ちゃんも、歌うんでしょ」

「いやよ」

志乃は、そっぽを向いた。

「みんなに、お手本を見せてあげてよ」

「いや」

志乃は舌を出した。

明日香は少し、困り果てた。

才能があり、負けん気も強いが、プライドも高い志乃…。

歌手としてはいいけど…

まだ小学六年生。

友達ができるかしら…。

明日香の心配なんて、関係ない風の志乃。

「あたしが、歌わなくても…香里奈ちゃんが、いるじゃない！手本なら、香里奈ちゃんで十分！」

志乃は、ジュースを飲み干した。

明日香はため息をつき、

「それが、さっきからいないのよ」

ステージには、また新しい子供が上がる。

直樹は席を立った。

「ちょっと外にでる」

子供たちの歌に、夢中で手を叩いている祖母に告げると、直樹は外に出た。

「おトイレ？」

祖母の言葉に頷いた。

扉を閉め、直樹は歩きだした。

確か近くに、公園があったはず。

直樹は坂を降りた。

駅の手前で右に曲がると、すぐに公園があった。

誰もいないと思っていたけど、

ブランコを思いっきり、天に届くくらいにこいでいる男の子…

がいた。

ブランコから勢いよく、飛び降りた…その姿は。

風になびき、太陽に照らされて…

とっても綺麗だった。

（男の子じゃないや…）

それが、直樹と香里奈の出会いだった。

思わず見とれる直樹。

その視線に気づいて、香里奈は、直樹の方を向いた。

「何？」

少し直樹を睨む香里奈。

さっきは綺麗な女の子と、思ったけど…

撤回…。

やっぱり男の子みたいだ。

「えっ…」

口ごもる直樹に、香里奈は近づき、ジロと見た。

「あんた…この辺の子じゃないわね。どこの子？」

直樹は少し怯えながら、駅の向こうを指差す。

直樹の指の方向を、香里奈は見て、フンフンと頷いた。
えらそうだ。

「駅の向こうって、大路の方ね」

香里奈は歩きだし、次はすべり台に向かう。

「向こうにも公園あるのに、何でここにいるのよ」

香里奈は下から、すべり台を駆け上がる。そして、そのまま駈け下りる。

「危ない！」

思わず叫ぶ直樹。

一瞬にして下り終え、
香里奈はまた、直樹の前に来る。

「あのさあ…子供の頃からやってるから、大丈夫なの」

腕を組んで、直樹を睨む香里奈に、

直樹はどこか、おかしさを感じ、笑ってしまう。

大人びているけど、まだ子供だ。

馬鹿にされていると感じ、香里奈が詰め寄る。

「何よ！何がおかしいのよ！」

きりっと直樹を睨み、

「どうして、この公園にいるのよ。近くに大路公園あるでしょ！」

直樹は少し後退りしながら、説明する。

「近くの店で、発表会があって…」

「発表会！」

香里奈ははっとして、声を荒げた。

びっくりする直樹。

「あんた…音楽やってるの？」

「え…ただ聴きにきただけで…」

香里奈は口ごもる直樹に、フンと鼻を鳴らすと、再びブランコに飛び乗った。

「だよね。やってるように見えないもん」

ブランコは、すぐに勢いを増す。

「だって、元気ないもん！」

香里奈はまた、飛び降り、直樹の近くに着地する。

「男の子はいつも、元気じゃないとだめ…じゃないと…」

香里奈は、鼻の頭をかきながら、

「あたしが、女の子に見られないのよね」

直樹は、そんな香里奈を見て、笑ってしまう。

「何がおかしいのよ！」

香里奈が叫んだ。

「香里奈！」

公園の入り口から、香里奈を呼ぶ声がした。

香里奈は声の方を見た。

「里美おばちゃん！」

里美は、香里奈に走り寄る。

「あんた、何してるのよ！あんたの出番、とっくに過ぎてるのに！みんな、捜してたのよ」

里美は、香里奈の頭を小突いた。

「痛っ！何するのよ！おばさん」

「それと、あたしは、おばさんじゃない！お姉さんと呼びなさい」

「無理あるよ…」

ぼそっと呟いた言葉を、里美は聞き逃さない。

「何？」

「綺麗だなっと…里美お姉さん」

愛想笑いを浮かべる香里奈に、里美は頷き、

「分かればいい」

香里奈の腕を掴み、ダブルケイに向かって引っ張っていく。

香里奈は、直樹の方を振り返った。

「今から歌うから、見に来て！絶対、元気になるから」

直樹は、大きく頷いた。

とても笑顔で。

「やればできるじゃん」

香里奈は、直樹に微笑んだ。

直樹も、香里奈の後を追った。

歌を聴く為に。

「あの時、聴いた…速水さんの歌が、今までで、一番感動した。楽しくって、元気がでた」

直樹の話をきいても、香里奈には、記憶がなかった。

「その時から…あたしが好き…だったの…？」

直樹は、首を横に振った。

「ただ…それがきっかけで、常に笑顔でいようと思った。暗くなっては、いけないと…それは守ってきた」

直樹は立ち上がった。

「高校に入って、しばらくは…あなたが、あの女の子とは、わからなかった。でも、元気で、いつも笑顔で…いつも輝いてた」

もう日が半分、山の向こうに沈んでいた。

もう黄昏も終わりだ。

直樹は、眩しそうに夕日を見つめ、

「そんなあなたに、惹かれて…あなたが、ダブルケイの女の子と知って、納得した」

「納得？」

「キラキラした笑顔の女の子だって…」

直樹は、夕日に目を細めた。

「夕日より、綺麗で輝いてて…」

直樹は、頭を抱えた。

「うまく言えない！くそ！」

地団太を踏む。

「好きな理由が…うまく言えない程」

直樹は、視線を香里奈に移し、真っ直ぐ見つめ、

「好きです」

ただ真っ赤になる香里奈。

好きと、何回言われただろう。

「え、えっと…」

香里奈は、しどろもどろになり、口を摘むんだ。

しばし無言。

「家まで送るよ」

直樹は、急いだ答えをもとめてなかった。

頷く香里奈。

2人は、歩きだした。

まだ…手は、繋げないけど。

「じゃあ…」

ダブルケイの前まで、直樹は送り終わると、来た道を戻っていく。

「あ、あのお…」

香里奈の声に、直樹は振り返る。

香里奈は、きちんと姿勢を正すと、頭を下げた。

「送ってくれて、ありがとう」

直樹は目を丸くしたが、笑顔を向け、

「いいよ」

香里奈は、頭を上げると、言葉を続けた。

「まだ付き合うとか…わかんないんだけど…」

香里奈はもう一度、今度は深く、頭を下げた。

「よろしくお願いします」

直樹も直立不動になり、

「こちらこそ、よろしくお願いします」

頭を下げた。

2人とも、頭を下げたまま…やがて、

笑い合った。

これが付き合うかどうかの返事とは、違うかもしれないけど…

2人の始まりだった。

時祭

部活を終え、里緒菜は一人、駅までの道を歩いていた。
もう陽も沈み、暗くなっていた。

一台の黒い車が、里緒菜のそばを通る。
車はすぐに、前で止まった。
里緒菜は気にせずに、車を追い抜いていく。

「お嬢様！」

車から降りたお爺さんが、慌てて里緒菜を追いかける。

「お嬢様！」

里緒菜は足を止めず、前を向いたまま、

「学校には、来ないでと…言ったはずよ」

「し、承知しておりますが…このままでは、パーティーに間に合いませんもので…」

里緒菜は足を止め、

「今日のパーティーは出席する気はありません」

キッパリと言い切った。

しかし、

「今日は絶対、出席させろと、旦那様から言われております」

里緒菜は、歩き出す。

「お父様の会社と、敵対関係のある…時祭財団の会長が、来られることになりましたので…」

里緒菜は振り返った。

「時祭財団！？」

広い屋敷の庭に置かれたテーブルに並ぶ、数多くの料理。

華やかな雰囲気が、少し息苦しい。

里緒菜は、次々に来客するＶＩＰたちに紹介されながら、愛想笑いを浮かべる。

「我が一人娘です」

里緒菜の父が里緒菜を、ＶＩＰに紹介する。

「もう大きくなられて」

「お綺麗になられて」

里緒菜は制服から、白いドレスに着替え、お客様のお世辞に、深々とお辞儀した。

「本当…お綺麗ですわ。…もう高校生に、なられたとか…失礼ですが、どちらの学校に？」

「大した学校に、はいってませんよ…娘が望んだのですが、普通の公立高校です。普通の高校生活を体験したいと、自ら言い出したものでして」

里緒菜の父は困ったように、里緒菜を見た。

「どちらの公立で」

「大路学園高校です」

「奇遇ですなあ。うちの甥っ子も、その高校に通っております」

その声に、人々が騒めく。

会場の入り口から、白髪のタキシード姿の男が現れた。

「これは、時祭会長。わざわざお越し頂き、ありがとうございます」

時祭会長と里緒菜の父は、握手する。

「甥っ子さんが、娘と同じ学校とは…何たる偶然。まったく知りませんでしたよ」

時祭は笑いながら、

「名字が違いますから…。嫁いだ妹の息子ですので…。今日は遅ればせながら、皆さんに紹介しょうと、連れてきております」

時祭会長に促されて、後ろに控えていた少年が、一歩前に出た。

「藤木くん!?」

驚いた里緒菜が、思わず声をだした。

「ああ、そうでしたなあ…お嬢様とは、同じクラスメートですな」

会長の言葉に、

「そうなのか、里緒菜」

父は里緒菜を見た。

和也は、すうっと前にでて、

「挨拶が遅れまして、誠に申し訳ございません」

里緒菜の父に、頭を下げた。

「藤木和也と申します。お嬢様とは、同じ学校に通っております」

いつもとはちがうスーツ姿に、落ち着いた物腰に、

里緒菜は驚いていた。

頭を下げながらも、ちらっと里緒菜を見、和也はウィンクした。

「驚いたわ…藤木くんが、時祭会長の親戚だなんて…」

大人たちが笑顔の下、いろんな思惑を隠して、話し合っている。

そんな輪から、少し離れて、里緒菜と和也はテラスにもたれていた。

和也はワインを傾けながら、

「あまり…言いふらすものでもないしな…」

里緒菜は、人々の動きを眺めていた。

「如月こそ…あまりそういうこと言わないよな」

「知ってる者は、知っているわ…」

如月グループ。

飲食業を基本としながら、数多くのレジャービルを手がけながらも、店名に、如月は入れてしない。

しかし、店自体は、全国的に千店舗以上あり、有名である。

学校でも、如月グループの一人娘だと知ってる者は、生徒も先生も、態度が違った。

里緒菜は、普通の学生生活が、したくって、中学校まで私立だったのを無理やり、高校だけ公立に行くことを、親に進言した。

成績は落とさずに、つねに全国模試で上位にいること、大学卒業後は必ず、

家を継ぐこと。

そして、

親の決めた相手と結婚すること。

決められた未来。

今だけが、自由になれる時期だった。

それなのに…

学校でも…。

演劇部に入ったのは、役を演じることで、逆に、自分が自由になれるような気がしたから。

そこで、自分に似た人にあった。

直樹である。

そして…

自分とは似ていないが、眩しい日差しのような…女の子に出会った。

香里奈である。

里緒菜の家を知っても、彼女は普通だった。

それは、恵美も祥子もだ。

初めての友達。

如月グループとか気にせずに、付き合ってくれる友達。

そんな友達がほしくって、公立にしたのかもしれない。

「藤木くんこそ…どうして、大路に？」

和也は、人並みに背を向けていた。

「俺？俺は…おじさんの命令だ」

「命令？」

「そう…命令」

「藤木くんだったら、もっと上の私立に、いけたんじゃないの？」

「それは、如月もだろ」

里緒菜は黙る。

「決まっていたさ…。俺も、あいつもな」

和也の横顔に少し、陰が落ちる。

「直樹さ…」

「ナオくん？」

「東條高校に推薦が、二人とも決まっていたんだが…」

中学三年のある日。

和也は、時祭会長の呼び出しを受けた。

会長室の前に立ち、ノックをした後、扉を開けた。

「失礼します」

「今日…お前を呼び出したのは、ほかでもない」

会長は和也を見ない。

「東條に、いくのはやめろ…お前は、大路学園にいけ」

和也は驚き、

「どうしてですか？」

「東條は、全寮制だが…大路なら、通える範囲だ」

「なぜです！理由は」

「テーブルの上に、ある写真を見ろ」

和也は、テーブルに近づき、そこにある写真を、手に取った。

「その女を監視しろ。それが、お前の仕事だ」

「監視…」

そこに写る人物を、和也は知らなかった。

「誰です？」

「お前の知ることではない」

「しかし…誰か知らないと…」

「お前と、同じ学年になる。入学したら、しばらくは監視だけを続けろ」

会長はそれだけ言うと、

「もう用はない。下がれ」

和也は出ていく前に、もう一度きいた。

「誰です…せめて、名前だけでも教えて下さい」

会長は横目で、和也を少し睨む。

「速水香里奈だ」

和也は会長室を出て、もう一度写真を見た。

普通の女の子だ…。

なぜ監視など…。

しかし、和也に断ることはできなかった。

和也は、高級マンションの最上階の一室に帰る。

部屋に入ると、ベットに横になり、

少し考えた後、唇を噛み締め、携帯に手を取った。
すぐにはつながらない。
留守電になった。
「直樹、すまない…いっしょにいけなくなった」
言葉がでない。
「…家の都合で、大路学園を受けることになった…すまない」
和也は電話を切ると、携帯を壁に投げた。

「和也さん…帰ったんですか」
ドアの向こうで、声がした。
和也が返事すると、ドアが開き、一人の女性が入ってきた。
スラッとした細身の女性…和也の母親だった。
「兄さんに呼ばれたんでしょ…どんな用件だったんですか」
母親の律子は、会長とはかなり年が離れていた。
「進学する高校をかえられたよ」

和也が、吐き捨てるように言うと、

慌てて、律子は和也のそばに走り寄る。

和也の両肩に手を置き、心配そうに、和也を見た。

「兄さんに逆らってはいけません…我慢して下さい」

「母さん…」

「今は我慢して下さいね」

律子は言葉とは違って、口調は厳しく、きつかった。

何年か前、

和也は、親子3人で暮らしていた時代。

父親は小さいながらも、飲食店を営み、何とか、3店舗まで支店を、もつまでになっていた。

ある日。

父親の各店舗の近くに、同じ業種のライバル店ができた。

それこそ、時祭グループの店舗だった。

目的は簡単だった。

和也の父親の店を、潰す為だった。

理由は…。

和也が欲しかったのだ。

時祭には、跡取りがいなかった。

だが…

頭を下げるつもりはなかった。

向こうから、頭を下げるように仕向ける。

父親は頑張り、二年近くは踏ん張った。

お客を取られ、赤字が続いても…。

とうとう、従業員の給料が払えなくなり、

途中、律子がパートにでても、家族が食べれなくなってしまった。

育ち盛りの和也が、お腹をすかしている姿を見、我慢できなくなった律子は、

時祭のもとにいく。

時祭はにやけながら、和也を差し出すことを命じた。

そうすれば、撤退すると。

律子は悩む余裕もなく、頷いた。

家に帰り、父親に説明しょうとして、ドアを開けた目の前で…

父親は首を吊って、自殺していた。

あれから、数年…。

今の律子の頭にあるのは、復讐である。

和也を、時祭財団の跡取りにして、すべてを奪う。

その目的の為にだけ、存在していた。

時祭に与えられた家で、命じられるままに、生きながら…。

「絶対に。兄さんには逆らっては、駄目！いけません」

そう言う律子の瞳の中に、嫌なものを見、

和也は目をそらし、律子の腕を払いのけた。

「わかってるよ…母さん」

「本当ね！本当なのね」

何度もそう確認しながら、律子は部屋を出た。
和也はそばにあった枕を、ドアに投げつけた。
そして、
ベットに顔をうずめ、何の力もない自分を呪った。
「くそっ！」
今は、自分を責めるしかなかった。

次の日、
学校にいった和也は、昼休みに、東條高校の推薦取り消しをする為、職員室に向かった。
担任は、ため息をつきながら、書類に目を通した。
「東條をやめて…大路か…もったいないなあ…折角合格したのに…」
「すいません」
和也は頭を下げた。
「まあ、いいけど…ほんともったいないよ。それにしても、何考えているんだか…お前も飯田も」

「え？飯田がどうかしたんですか？」

担任は呆れながら、

「今朝早く、学校に来て、推薦取り消してくれと…お前と同じ、大路を受けるとな」

担任は、和也を見、

「遊びじゃないだぞ。進学は」

担任の言葉が、終わらないうちに、

和也は職員室から走り出した。

「直樹！」

教室に入ると、弁当をパクつく直樹がいた。

「お前。どういうつもりだ！」

和也は、直樹を教室から引きずり出した。

「同情してるつもりか！」

和也は、直樹の襟を掴んだ。

「ちがう」

「だったら、取り消せ！」

「いやだ」

直樹は、真っ直ぐに和也を見つめる。

「東條だぞ！通ったんだぞ！」

「関係ない」

「関係ないだと！お前はいけるんだぞ！俺とちがって！」

直樹は、襟を掴んでいる和也の腕に手を置いた。

「お前は、行きたかったんだろ」

直樹は、ゆっくりと、
腕を首もとから離させる。

「俺もだ」

「直樹…」

和也は微笑む。

「だから、今は…お前と大路に行きたい」

直樹は、立ちつくす和也をすり抜けて、教室に戻ろうとする。

はっとして、和也は振り返る。

「お前。お爺さんたちは、田舎に引っ越すんだろ！東條は、全寮制だったが…住むところ、どうするんだ！」

直樹は振り返り、

「何とかするよ」

「何とかって…」

「大路は公立だから、学費も、東條に比べて、格段に安い」

笑顔を、和也に向けたまま、

「あまりお爺さんたちに、負担をかけなくてすむ」

「…」

「だから…いいんだよ。和也」

直樹は教室の中に入った。

「直樹…」

和也はただ、直樹の背中を見つめるだけだった。

手すりにもたれながら、和也は、ぐいっとワインを飲んだ。

「何も言わないが…俺のためだ…そういうやつなんだよ。あいつは」

「そうね…」

里緒菜は、遠くの方を見つめた。

「心の整理がつかないか…」

和也もまた、里緒菜と同じ方向を見た。

「え？」

里緒菜は、和也の方を向いた。

「親友だものな…」

和也は、手すりにもたれるのをやめた。

「だけど…避けるのはよくないぜ」

里緒菜は、和也の言葉の意味を理解した。

「わかってるわ」

「だったら…これ以上は、俺が、口をはさむものじゃないな」

和也が、テラスから離れようとした。

その時、

人々から歓声がわいた。

和也と里緒菜は、声がした方を見た。

「あれは…天城志乃!?」

会場にいきなり、現れたのは、歌姫、天城志乃だった。

「皆さんにご紹介…紹介は無用ですかな」

時祭会長が、志乃をエスコートする。

驚く会場内の人々の視線が、志乃に釘付けになる。

自慢気に、会長が話す。

「我々時祭財団は、ディーバ天城志乃を、全面的にバックアップすることにより、音楽と食を、基本とした一大プロジェクトを始動させます」

会長は手を広げ、

「それは日本を越えて、まずは、アメリカからはじめたい！」

志乃は一歩前に出てて、深々と頭を下げた。

「天城志乃の全米デビューとともに」

会場がざわめく。

それが、運命の始まりとなる。

親の幻

ダブルケイ。

カウンターに座り、オレンジジュースを飲む、香里奈。

カウンター内では、里美が背を向けて、仕込みをしていた。

「里美おばさん」

返事がない。

「おばさん！」

返事がない。

香里奈は頬杖をつき、

仕方なく、

「里美お姉さん」

「なあに？香里奈ちゃん」

やっと返事が帰ってくる。

香里奈は、肩をすくめた。そして、おもむろに話しだした。

「元気がでる歌って…なんだろ？」

香里奈の質問に、里美は味見をしながら、

「それは、人それぞれ、感じ方が違うから…一概には言えないわね」

里美は振り返ると、箸でつまんだ煮物を、香里奈の口にほり込んだ。

思わず、熱さにびっくりしたが、

「おいしい！」

里美は、料理がうまい。

「歌に、興味がでたの？」

「別に…」

そっけない香里奈。

里美は、ため息をつくと、

「昔のあんたの歌は、前向きで、まっすぐな歌だったよ」

そう言うと、里美はまた鍋と向き合った。

「またやりたくなったら、いつでもやりなさい。遠慮せずに」

「うん…」

香里奈は、力なくこたえた。

何もない殺風景な室内。

それが、時祭財団の会長室だった。

机と来客用のソファ…。

それぐらいしかなかった。

高層ビルの最上階。

時祭会長は、後ろ手で窓際に立ち、街並みを見下ろしていた。

ドアがノックされた。

「会長。お客様をお連れしました」

「入って貰え」

秘書に促されて、会長室に入ってきた女。

会長は、振り返らず、

「久しぶりだな…明日香」

「こうして…2人で会うのは、初めてかもしれません」

明日香は、会長の背中に、軽く頭を下げた。

「何年ぶりかな…」

会長は少し間を置くと、ゆっくりと振り向いた。

明日香と目が合う。

「まあ…座れ」

明日香は、会長に促されてソファに座る。

「母さんのお葬式にも、顔をだしてくれませんでしたから…もう記憶にはないですね」

会長もソファに座り、

「仕方があるまい…私は忙しいし、出席できる身分でもないしな」

明日香は、久々に見る父親の顔を見据えた。

「そうでしたね。あなたには、関係のないことでしたね」

会長はフッと笑うと、明日香をまじまじと見つめた。

「…で、何の用だ?お前から、俺に会いに来るとは…余程のことがないかぎり、あるまいて」

明日香は、膝に置いた手を握り締め、

「店に来ましたね。ダブルケイに」

「記憶にないな」

「とぼけても無駄です!あたしと…香里奈を訪ねて」

会長は立ち上がり、

「娘と孫を訪ねて、何が悪い」

会長は、窓まで歩いていく。

「あなたこそ…理由もなく、会いに来るはずがないわ」

明日香は、窓から外を眺める父親の後ろ姿を、睨む。

「あなたは、あたしと母さんを捨てたはずです。何を今更」

会長は苦笑する。

「お前たちは捨てたよ。確かにな…」

会長は、ギロリと明日香を見ると、

「だが、孫は必要なのだよ」

再び窓に目をやった。

窓に映る明日香に、目を細め、

「お前の母親と別れ、何人かの女と結婚したが…子供は、できなかった」

会長は振り返り、

「明日香。お前だけが、私の子供だ」

会長は、部屋の中を歩き出す。

「跡取りにする為、親族から選ぼうとしたが…やはり、私の血を引いた、私の血筋からほしい！」

会長は、明日香に迫り、

「お前は、私を憎んでいる！だから…孫の香里奈が、ほしい」

「何を都合がいいことを！」

「お前がなぜ、世界的に成功しているか、わかるか？」

会長は、手を天に広げ、

「血だよ！時祭の血だ！お前の体に流れてる半分は、私の血だ！例え半分が、薄汚れた下賤の血であってもな」

明日香は、父親を睨みつけた。

「母さんのことを！」

「だから、別れた！私とは身分がちがうからな」

「あなたに、あたしの子供たちを渡すつもりはありません」

明日香は、外に出ていこうとする。

「あたしの子供たちだと！？何を寝ぼけたことを！私が、知らないとでも思っているのか」

明日香はドアのノブを握ったまま、

硬直した。

「私の孫は、香里奈１人！お前が連れている…何だったかな…ああ、和恵だな。あれは、お前の子供ではないだろ」

明日香は、そのまま動けなくなる。

「お前の夫、速水啓介と…天城志乃の姉…天城百合子との間にできた子供だ」

明日香は力を込めて、振り返った。

「ちがう！和恵はあたしの子供だわ！」

会長は大笑いする。

「確か…お前に音楽を教えた女も、血のつながらない息子を育てたんだったな！その女から、変な病気でももらったか」

会長の笑い声が、部屋にこだまする。

明日香は、これ以上何を言っても無駄と感じ、黙ってドアを開いた。

「かわいそうな人…」

明日香は、静かに出て行った。

なぜか…

怒りが、わかなかった。

ドアを閉めながら、

明日香は、母の言葉を思い出していた。

「お父さんは悪くないの…ただ…かわいそうな人なのよ…」

明日香は、母の言葉の意味が、わかったような気がした。

明日香は、会長室をでた。

廊下を真っ直ぐ歩き、突き当たりにあるエレベーターを待つ。

エレベーターの扉が開き、

中から、和也が出て来た。

明日香は道を開け、和也とすれ違う。

エレベーターのドアが閉まる瞬間、和也は振り返った。

「あの人は…」

エレベーターで、一階に降りた明日香は、そのまま和恵が待つフロントへと向かう。

明日香の足が止まった。

ソファに座って、楽しそうに話す和恵。

そのそばにいるのは、

天城志乃だった。

和恵が、明日香に気付き、手を振った。

志乃が、明日香の方を見る。

目が合う二人。

志乃は、頭を下げると、
ゆっくりと近づいて来る。

「お久しぶりです。先生」

志乃は、満面の笑みを浮かべている。

しかし、

その笑みは、綺麗なバラの如く、

棘があった。

「志乃ちゃん…」

志乃と会うのは、何年ぶりだろうか…。

和恵が産まれる、少し前だから、

もう7年近くなる。

あの頃、中学一年だった少女は、日本を代表する歌姫に。

モデルのようにスラッとしたスタイルは、同世代の女性の羨望の的

だ。

「先生には…まずは、ありがとうと、言わないといけないですね」

志乃は、後ろにキョトンとして座る和恵を見た。

「姉の娘を、今日まで育ててくれたことに」

「そのことを、和恵に言ったの？」

「恐い顔しないで下さいよ。そこまで、無神経じゃないですから」

明日香は、志乃の肩越しの和恵を見つめた。

和恵は首を傾げた。

「いずれ…あたしが引き取ります」

「あの子が、望むならね」

明日香は和恵から、少し目を外した。

「だけど…あいつは許さない」

志乃は一歩、明日香に近づいた。

「先生は、ご存知なんですか？」

志乃は、明日香の顔を覗き見た。

明日香は訝しげに、志乃を見返す。

しばらく、時が止まる。

志乃は鼻を鳴らすと、

「あの男が生きてることを」

憎しみと怒り。

それだけが、志乃の体を震わせた。

ワナワナと震える志乃の姿に、明日香は哀れみを感じた。

「志乃ちゃん…」

「姉さんを殺しといて！ぬくぬくと生きてる、あの男を許さない」

志乃は廊下の壁を叩く。

明日香が、志乃に手を差し伸べた。

しかし、

志乃は、それをすり抜け・・・歩き出す。

すれ違う刹那、明日香の耳元に囁く。

「さよなら、先生」

去っていく志乃。

明日香は、急いで振り返った。

「あの男が、あの人だとしたら…志乃ちゃん。あなたは絶対、かなわない」

志乃は振り返らず、せせら笑った。

「戦うことも、確かめることもしない女が、何を言う」

明日香と志乃…。

まったく違う二人が、すれ違った…

最後の時だった。

追憶のロンリネス

明日香が、去った会長室。

一人残された会長は、机の引き出しから、一枚の写真を出した。

一人の美しい女性が、写っていた。

「千春…」

時祭光太郎は、学校の近くにある桜並木で、心を奪われた。

向こうから歩いてくる少女に。

一目惚れだった。

風が吹き、桜の花びらが舞う中、

まるで、花びらのトンネルを潜ってくるように…

少女は、光太郎に近づいてくる。

少女は、桜そのものだ。

恋とは、突然やって来て、すべてを変えてしまう。

少女の名は、香月千春。

桜の季節が終わる頃には、二人は恋に落ちていた。

すべてが決められていて、引かれたレールの上を、走るだけだった光太郎は、

初めて、そのレールを外れた。

大学を卒業してすぐ、光太郎は千春の手を取り、家を出た。

事業が、戦前から続く…時祭家を継ぐ気は、なくなった。

まだ小さいが、妹が継いだらいい。

光太郎は、地元から少し離れた…地方都市へと流れていった。

この街はまだ、発展途上だ。

続々と入ってくる人混みに紛れたら、わかるまい。

築２０年は過ぎた、小さな一軒家を偶然、格安で借りることができた。

坊ちゃんだった光太郎は、今まで貯めた金が結構あった。

親が、おこずかいとしてくれたものだった。

しかし、何ヶ月か経てば、すぐになくなった。

働きはじめ、質素だが、千春と幸せな日々は続いた。

千春の料理は、おいしかった。

しかし、

たまに無償に、昔食べた…数々の高級料理が、浮かんだ。

今は贅沢なもの。

あの頃は普通のもの。

明日香が産まれた。

幸せはピークだった。

しかし、生活の苦しさもピークとなっていた。

そして、

その状況を、一番よくわかっていたのは、

光太郎の親たちだった。

ある日、仕事から家に帰る途中…。

実家で世話を、焼いてくれていた執事と、母親が車をとめて、待ち伏せていた。

驚き、逃げようとした光太郎を、執事はやさしく諭した。

連れ戻しに来た訳じゃありません。

久しぶりに、坊ちゃまとお話がしたいだけです。

お食事でもしながら。

少し涙ぐんでいる母親を見ると、光太郎の心は、痛んだ。

元々勝手に出ていたのは、自分であり、母親には負い目があった。

渋々頷いた光太郎は、車に乗り、都内のホテルへ連れていかれた。

そこにあった贅沢な料理の数々に、光太郎は魅了された。

時を忘れ、母親や執事との食事を楽しむ。

ふっと時計を見ると、

もう遅い。

帰らないと…。

席を立とうとした光太郎を、執事が止めた。

もう奥様には、私が連絡しておりますので、

今夜はホテルで、お泊まり下さい。

光太郎は、嬉しそうに頷くと、

母親も嬉しそうに頷いた。

今夜だけ、泊まろう。

その今夜だけが…

2週間にも及ぶことになる。

まったく帰ってこない夫に、千春は心配して、会社に電話したが、

もう退職したといわれた。

警察に捜索願いをだそうとしたが、受け取ってくれない。

まだ赤ん坊の明日香を、抱えながら…途方にくれていると、家に電話が入った。

執事からだった。

坊ちゃまがお呼びですので、至急こちらの場所まで来て頂きたいと

…。

千春は明日香を抱え、その場所に向かった。

大きなビル。

時祭財団の本社ビルだった。

最上階の社長室に、通された。

そこには、

仕立てのよいスーツを着た…光太郎がいた。

「光太郎さん！」

千春が駆け寄る。

「大丈夫でしたか？心配してました…」

光太郎の胸に飛び込む。

しかし、

光太郎は、抱き締めてくれない。

「ああ…大丈夫…」

光太郎は少し、後ずさる。

そんな光太郎に驚き、

光太郎の目を見る千春。

光太郎は、目をそらした。

「ああ…ご、ごめん」

光太郎は、千春たちから離れた。

「光太郎さん…」

光太郎は、窓際まで下がり、千春たちに背を向けた。

「千春…」

光太郎は鼻の頭をかき、深く息をすると、

「俺たちは…まだ正式に、籍をいれていないよな…」

千春はもう理解した。

明日香に聞かせたくたいのか…

千春は、光太郎から背を向け、明日香をあやす。

千春に、やさしく体を叩いて貰うと、

慣れないところまで来て疲れてたのか…明日香は、すぐに寝てしまった。

千春は、明日香が寝たのを確認すると、光太郎に言った。

「何がありました…この2週間」

千春は、振り向いた。

光太郎は言葉がでない。

千春は、光太郎の正面を向いた。

「あたしと、明日香を忘れるくらいの…何がありました」

光太郎は、無理やりの笑顔を見せる。

「家に連れ戻されて…それから、昔と…同じ…生活をしてた…」

光太郎は、千春に近づく。

「おいしかった…料理も。何年も食べてなかったし…」

光太郎の声が、大きくなる。

「仕事も…大したこともできないジジイたちに、ごちゃごちゃ言われて！」

光太郎は、手を広げた。

「ここにいたら、誰も…俺に逆らえない」

光太郎の表情を見た瞬間、
千春はまた、背を向けた。
「心配しなくていい…お前たちの面倒も見るから…結婚できなくても、今よりいい生活ができる」
千春は話の途中で、光太郎の方を向き、頭を下げた。
「ごめんなさい…」
「え…？」
「今日でお別れします」
「何を言っている！今より幸せになれるんだぞ」
「ごめんなさい…」
「け、結婚はできないが…明日香は、認知してやるし…」
千春はもう辛かった。
今、そばにいるのは…千春の知らない人だ。
千春は泣いていた。
凛とした態度でいたかったが、涙は止まらなかった。
「千春？」

戸惑う光太郎。

「ごめんなさい…あたしは、あなたを…幸せにできなかった…」

千春は涙を拭うと、

「あたしは、どんなに貧しくても、あなたといて幸せでした」

千春は、深々と頭を下げると、

ドアのノブに手を伸ばした。

「あなたを、幸せにできなかった…あたしの責任です」

千春は、最後に笑顔を光太郎に向けた。

「別れます。これは、あたしの責任です。あたしが、あなたを幸せにできなかったからです…」

「千春…どうする気だ」

「あたしは、明日香と2人で、何とかやっていけます」

「千春…」

「何もいりません…」

千春はドアを開けた。

「失礼しました…さようなら」

千春は深々と頭を下げると、しばらくそのまま止まると、顔を上げて、笑顔のまま…ドアの外へ、消えて行った。

「千春！」

バタン…。

ドアが閉まった瞬間、

光太郎は、自分がしたことを理解した。

千春と明日香を失ったことを…。

しかし、

「仕方ないじゃないか…」

あの貧乏な生活に、戻る勇気もなかった。

BAR

「失礼します」

何度、ノックしても反応がない為、躊躇いながらも、和也は会長室に入った。

光太郎は、椅子に座りながら、机の上の写真を見つめていた。

少し間があって、

光太郎は、和也に気づくと、写真を引き出しに戻した。

「先程…廊下で、すれ違った方は…」

光太郎は音をたてて、立ち上がった。

「お前には関係ない！」

あまりの剣幕に、和也は驚いた。

「お前に、新しい指令を命じる」

光太郎は、和也に近づき、

「速水香里奈をものにしろ」

「え！？」

「香里奈を、お前の女にするんだ」

「ど、どうしてです！」

和也は慌てる。

光太郎は、和也を指差し、

「そうすれば、お前の母親が望んだ、この家のすべてが手に入るぞ！手っ取り早くな！」

光太郎は大笑いした。

そして、

すぐにもとに戻ると、

「話はそれだけだ！早く出ていけ！」

光太郎は、和也を怒鳴りつけた。

和也は、静かに頭を下げると、ドアの外に出ていった。

街角のＢＡＲ。

街の中心部から離れた、雑居ビルの中にあった。

名前はｏｒａｎｇｅ　ｌａｄｙ。

一階に美容院。

二階には服屋や、アクセサリーショップが並び、

その一角にｏｒａｎｇｅ　ｌａｄｙはあった。

昼間はカフェ、夜はＢＡＲ。

カウンターの中で、直樹はグラスを洗っていた。

扉が音をたてて、開いた。

「いらっしゃいませ」

ｏｒａｎｇｅ　ｌａｄｙの中に入ってきたのは、

天城志乃だった。

黒で、ラメが入ったＴシャツを着、下はデニムとラフな格好だ。

まだ7時半。

奥のテーブルに、二組のカップルがいるだけだった。

店内を見回すと、志乃はカウンターに座った。

志乃に気づき、カップルが騒めいている。

「いらっしゃいませ」

直樹は頭を下げると、志乃の前に、コースターを置いた。

志乃は一言、

「ビール」

直樹はサーバーから、ビールを注いだ。

コースターの上に置かれたビールを手にとり、

志乃は一口ビールを飲んだ。

しばらく、無言の時が続く。

カウンターの奥の厨房にいたマスターが出てきて、音楽を変えた。

何とも言えない艶のある声…。

志乃は、ビールを飲み干すと、そばに立つ直樹に言った。

「ジンバック」

直樹は、棚からビンを取り出すと、チェイサーで分量を計る。

志乃は、その様子を見ながら、

「キミは知ってる?」

「はい?」

質問がわからず、直樹は志乃を見た。

「…あ、あまぎ、志乃さん…」

志乃はクスッと笑う。

「あたしのこと知ってた?。何も反応ないから…知らないと思った」

直樹はジンバックを、志乃の前に置いた。

「飲みに来られたお客様の、邪魔になるようなことは、しません。どんなお客様でも、私たちから話しかけることはしません」

真面目に答える直樹。

「珍しいわね。他のＢＡＲではよく、話しかけられるわよ。バーテンに」

「ここのマスターの教えです。ＢＡＲとは、お客様の憩いの場であり、カウンター…とはお客様と一線を引き、お客様の隔てている」

マスターは奥から顔を出した。

「古い考えです。私はこういう昔ながらの、ＢＡＲのスタイルを守りたい。話しかけた方が、常連になって頂けるかもしれませんが…こういうＢＡＲがまだ、あってもいいんじゃないかと」

グラスを傾けると、氷が踊った。

志乃は、ジンバックを一口飲み、

「そうですね」

マスターに、微笑みかけた。

マスターは照れたように、頭を下げ、

「出過ぎた真似をしまして、申し訳ありません」

また厨房の中に、消えていく。

志乃はまた、グラスを傾けた。

そして、直樹を見る。

「さっき知ってると言ったのは…あたしじゃなくて…」

志乃は、上を指差した。

思わず上を見る直樹。

志乃は、またクスッと笑うと、

「音楽のことよ」

直樹はああ…と納得する。

「これは…確か…」

かかってる曲は、知っていた。

志乃は、ジンバックを飲む。

「河野和美よ」

「あっ！知ってます。日本人で初めて、有名な賞を取った人と」

「ロンリネス・イズ・マイセルフ…有名な映画の主題歌になった曲。彼女は天才よ」

和美の歌に合わせて、志乃は軽くリズムに乗る。

「最初の受賞者は、河野和美。二番目は…」

またジンバックを飲み、

「速水明日香…。三番目が、あたしの予定」

志乃は言った後に、自分自身に笑った。

（大した、自信ね！）

（天城志乃！）

志乃は、ジンバックを飲み終わった。

「キミは…若いわね。高校生？」

志乃の問いに、

直樹は、はいと返事をする。

「未成年が…いいの？」

「普段は、もう上がっています。夜のバイトの人が、今日は遅れてまして…　交代制ですから…」

「大変ね…」

「いえ…逆に、もっと働きたいです」

マスターがまた、厨房から顔を出した。

「この子は一人暮らしで、生活費を、自分で稼いでるんですよ」

志乃は、思わず声を上げた。

「高校生なのに！大変」

直樹は照れくさそうに、

「そんなことはないです」

志乃は、ジンバックを飲み干すと、おかわりを頼む。

新しいグラスに、直樹は再びジンバックを作る。

「じゃあ、毎日大変ね。遊ぶ暇もないんじゃないの」

直樹は、ジンバックを志乃の前に出すと、

「大丈夫です。部活もやってますし…そ、それに…」

直樹は顔を赤らめる。

「それに…何？」

志乃が、身を乗り出す。

「何言ってんだか…」

直樹は一人呟くと、志乃の視線に気づき、

「な、何でもないです！」

慌てる直樹に、志乃はいたずらぽく微笑むと、

「彼女ね」

「か、か、彼女じゃないです」

さらに慌てる直樹が、可愛いかった。

志乃はグラス越しに、直樹を見た。

「まだ友達？その子とは」

開き直った直樹は、

「友達にやっと…近づけたぐらいです」

志乃は苦笑する。

「道のりは長いんだ」

直樹は頷いた。

志乃は、グラスに口をつけた。

「デートはした？」

「いえ」

グラスをコースターに置くと、

「したほうがいい。そうしないとわからないから…」

和美のＣＤが終わる。

次にかかったのは…

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのＣＤ。

かつて、明日香と啓介が組んでいたバンド。

志乃は、席を立った。

「ごちそうさま」

いきなりで、直樹は戸惑う。

「ま…また、来て下さい」

直樹の笑顔に、志乃は笑顔でかえす。

「ありがとう」

店を出る時、志乃は振り返り、

「話の続きを、きかせてもらうから」

店内に、明日香の優しい歌声が響いていた。

店をでると、志乃は携帯を鳴らした。

「アメリカで出す…アルバムの件なんですけど…」

志乃の目が一瞬鋭く、目の前を見据えた。

それは、ここではないところを見ていた。

「一曲…録音したけど、サンプリング代がかかるし、今回は、オリジナルばかりにしょうと、お蔵入りにしたやつあるでしょ」

志乃は歩き出す。

「マリーナ・ヘインズの曲から、サックスだけ抜き出したやつ…あれ、使うわ」

志乃は、クスッと笑った。

「曲名も決めたわ」

マリーナの曲は昔、啓介が参加した曲だった。

「ロンリネス・イズ・ユアセルフよ」

志乃は、携帯を切った。

これは戦線布告だった。

「楽しみだわ」

志乃はそう呟くと、歩くスピードを上げた。

足取り

「和也！」

学校に登校すると、直樹はすぐに、和也を探した。

教室にはいなかった。

あまり人が来ない、理科室とかがある南館に通じる…渡り廊下にいた。

一人、物思いにふける和也に、直樹は近づいた。

「おはよう！こんなところにいたのか」

和也は、直樹に気づき、

「ああ…おはよう…」

少し目を伏せた。

直樹は、和也のいつもと違う雰囲気に気づいた。

「どうかしたのか？」

和也は驚き、直樹を見た。

しかし、あまりにも真っ直ぐな瞳に、すぐに、目をそらした。

「別に…何でもない」

そんな台詞で、直樹が納得するはずがない。

和也は笑顔をつくり、

「ちょっと昨日…眠れなくてな」

「大丈夫か？何か、心配事とかあるのか？」

和也は首を横に振り、

「単に、寝苦しかっただけだ…ありがとう」

「…モデルの仕事は、きついんじゃないのか？あまり無理するなよ」

「ああ…」

和也は目をつぶり、直樹のやさしさを噛み締めた。

目を開けると、直樹を見、

「お前。何か話があるんじゃないのか」

直樹は照れくさそうに、頭をかき、

「お前に、相談したいことがあるんだ…」

「相談？」

直樹は、顔を真っ赤にして頷くと、

「速水さんとの…ことなんだけど…」

「速水…」

和也の脳裏に、昨日の光太郎の言葉が蘇った。

（香里奈をものにしろ！）

「クッ」

和也は、少し顔をしかめた。

「どうした？」

直樹は、和也の顔を覗き込んだ。

「何でもない」

和也は顔をそらしながら、直樹にきいた。

「それで…相談の内容は」

直樹は訝しげに、和也を見つめながらも、

相談内容を思い出し、また赤くなる。

「は、速水さんと…デートしたいんだけど…どこかオススメないかな…」

「デート…か…」

「和也だったら…どこかいいところを、知ってるかと思って」

和也は、もたれていた手すりから離れ、

歩き出す。

「すまん…直樹。思い浮かばない」

「和也…」

「もう授業…始まるぜ」

教室に向かう和也の後ろ姿を、直樹はしばらく見送った。

都市の中心地にあるビル。

周りに比べたら、大きくはないが、それでも、名前は有名だった。

Pーレコード会社。

明日香が、所属する会社だった。

ビルの一室。

海外事業部に、明日香はいた。

「残念だけど…くわしいことは、わからないね」

海外事業部課長、井上は世界中から送られてくるＦＡＸに目を通しながら、こたえた。

「確かにネットでは、話題になっているみたいだけど…メジャー会社とは、まだ契約していないみたいだし…」

「そうですか…」

明日香は、肩を落とした。

隣には、和恵がいる。

「最近は…向こうの話題は、うちらレコード会社より、ネットやファンの方が詳しいよ。こっちに送られるより、情報早いしさ…」

「わかりました…お手数をおかけしました」

頭を下げる明日香に、慌てて井上は、席を立った。

「やめてください！所属アーティストに頭下げられるなんて…それも速水さんに！上に怒られます」

井上は、頭をかき、

「何か入りましたら…すぐに知らせますんで…」

「お願いします」

また頭を下げると、明日香は去ろうとする。

慌てて、井上は止めた。

「ま、待って下さい」

明日香と和恵が、振り返る。

井上はさらに、頭をかき、

「今朝新聞見て、気になったんですが…」

資料で、散らかっている机の上をかきわけ、新聞を取り出す。

「あった…これだ」

井上は新聞を開け、明日香に見せた。

「引きこもりの男性…母親を殺害…？」

明日香は、記事を読んだ。

「ネット上で…音楽の情報を、ダウンロードして聴いていた男性が…いきなり、ナイフを持って暴れだした…」

「男は神のお告げが、パソコンに宿ったと…わめきながら…そのまま…逃走…」

井上は補足する。

「最近こういった、パソコンでダウンロードした音を聴いて…おかしくなった、気分が悪くなったというのが、多いんですよ」

明日香は、井上に迫った。

「その音楽は、何です！」

「わかりません…新聞に、そこまで載ってないし…」

「調べられませんか？」

明日香のあまりの迫力に、井上は後ずさる。

「わ、わかりました…ネット検索してみます」

机の上から、ノートパソコンを探しだし、井上は検索する。

「でました…」

すぐに情報は、得ることができた。

しかし、その文字を見た瞬間、絶句した。

「ＫＫ…ダブルケイ」

パソコンの画面上に現れた、数多くの同じ文字…

ＫＫ。

それは賞賛と、お薦めの嵐だった。

感動した。

凄くいい。

気持ちいい。

癖になる。

数多くのホームページが、絶賛し、

すぐにでも、ＫＫのホームページにアクセスできるようにしていた。

井上は、唾を飲み込み、

「いきますよ」

ＫＫのホームページに、アクセスしょうと、カーソルを持っていった。

クイックしょうと、指に力を込めた。

「待って！」

明日香が叫んだ。

「え！」

驚いて、井上は思わず飛び上がる。

「井上さん…あたしが後で、別の場所でアクセスしてみます」

明日香は、画面の文字を見つめ、

「井上さんは、しない方がいいです」

丁寧に挨拶して、去っていく明日香たちを見送った後…

井上は再び検索した。

「俺だって、音楽業界にかかわっているんだ」

画面をクイックする。

「どんな音か気になる…」

画面上にＫＫの文字。

ホームページは、何の変哲もない。
至って普通だ。
ライブ活動などを、ＰＲしている。
「ダウンロードと…」
井上は、ＣＤＲをセットした。
普通に、ＣＤＲは焼き上がり、
井上はそれをかけた。
「ただの普通の音楽…？」
ビルを出た明日香の携帯電話に、着信があった。
電話に出ると、横田からだった。
「ああ…ダウンロードしたやつから、聴いたんだが…別に、頭がおかしくなるとか、気分が悪いとかは、ないみたいだ」
横田は昔、河野和美のマネージャーをやっていた。

和美は日本を去るとき、明日香に、横田を紹介していった。
明日香は学生時代、いろいろお世話になり、
今は、明日香のマネージャーになっていた。

「ただし…」

横田は言葉を切り、

「毎日聴きたくなる程…ＢＧＭとしては、最高らしい」

「ＢＧＭ…」

明日香は呟いた。

（あの人の音楽とは一番程遠い言葉…。）

しかし、

インストなら、仕方ないのだろうか…。

「それと…もう一つ」

「もう一つ…？」

横田は勿体ぶる。

「今とれる音は…昔のと違うという噂がある」

「音が違う？」

「まさしく、その通り！演奏は同じだが、音の感じが違うと」

明日香は考え込んだ。

隣で、和恵が不思議そうに、明日香を見上げている。

「それは、いつからなの？」

「わからない…少なくても、あの事件以降はないと思うが…」

「できれば…以前の音を、手に入れられないですか？」

明日香の手を、和恵が握った。

もう退屈なのだろう。

「何とか探してみる」

携帯が切れた。

明日香は、すぐに和恵に微笑むと、手をつないで歩きだした。

「ママ…早く、お姉ちゃんこといこうよ」

「そうね。早くお姉ちゃんとこへ、帰りましょう」

「うん！」

元気よく頷く和恵を見て、明日香は、手をしっかりと握り、決して離さないと、
改めて、心に誓った。

再会の黄昏

「今、あまり悪い噂を広げるべきではない」

何もない薄暗い部屋。

最小限の明かりの中…ティアはいた。

隣に立つ、体格のよい男。

部屋の真ん中に置かれたディスクの上に置かれた、パソコンの画面に、ＫＫの文字が輝いていた。

「なぜだ」

男はティアにきいた。

「もう世界中で話題に上がっているわ。こちらから、仕掛ける必要もない」

「勝手に騒いでくれると…」

ティアはディスクに近づき、キーボードを叩いた。

アクセスを見て、苦笑する。

「音楽とは、不思議なものね…こんな形のないものに群がる」

「音楽は原始から、人々の生活とともにある」

ティアはパソコンを切る。

「ＫＫはどうしてる？」

ティアは、タバコを取り出すと、火をつけた。

男の質問に、肩をすくね、

「部屋よ。多分…サックスを吹いてるわ」

「寝る時もか…」

「ＫＫとは…サックスのそのものの名前かと…思う時があるわ。吹いてる人間は…飾りのようなもの」

ティアはタバコを吹かし、

「同じ演奏でも、まったく違って聴こえる…。狂わすようなときもあり、どうでもいいときもある」

ティアは壁にもたれ、

「いつでも狂う訳じゃない」

「お前は、これからどうしたいんだ？」

男の質問に、ティアは微笑を浮かべ、

「別に、何もないわ…人が狂うのも見るのも、飽きたし…」

「俺は飽きてないぜ」

「ジャック。あなたこそ、何をしたいの」

「金だ」

ジャックはニヤッと笑う。

そんなジャックを、冷静に見つめるティア。

「ＫＫは金になる！これからな！ＣＤを出せば、必ず売れる。ライブをやれば、中毒者続出だ！」

ジャックは、笑いが止まらない。

ティアは、タバコを途中で、ディスク上の皿にねじ込むと、歩きだした。

そのまま、ドアに向かうティア。

「どこにいく」

ティアは、ジャックの方に振り向き、

「部屋に戻って、寝るだけよ」

ティアは外に出ると、廊下を歩き出した。

廊下の先から、微かに漏れる音。

ティアは、ふっと足を止めると、音の方に向かった。

ＫＫの部屋。

完全防音のはずなのに…。

ティアは、そっとドアに耳を近づけた。

漏れる音の素晴らしさに、ティアは涙した。

これは狂っていても、

綺麗な音だ。

そして、

悲しい音だ。

ＫＫの音に、皆が魅力されるけど、誰でも狂う訳ではない。

この音の深さと、絶望を感じることができる…

心に傷を持つ者だけが、シンクロするのだ。

「そうよね…こんな世界、なくなればいいのよ。こんな悲しい世界なんて…」

ティアは、心の奥にある感情が刺激された。

「壊したらいい…」

ドアにすがりながら、ティアは泣き崩れていた。

放課後、

珍しく部活がない恵美と祥子と、一緒に帰る香里奈。

「部活がないと、暇だなあ～」

恵美が、大きな欠伸をした。

「どこか寄っていこうか」

祥子が提案した。

「賛成！」

香里奈と恵美が、声を合わせた。

「じゃあ、久々に寄り道として、ライムライトに行きますか」

ライムライトはクレープ屋だ。

「賛成！！」

と、また二人が声を合わせた時。

「速水さん！」

後ろの方から、声がした。

香里奈たちは、顔を見合わせ、ゆっくりと振り返った。

こちらに向かって、手を振りながら、満面の笑みを浮かべた直樹が、走ってくる。

香里奈は、ため息をついた。

香里奈たちにたどり着いた直樹は、全力で走った為、肩で息をしている。

「よかった…間に合った」

「あんた、部活はどうしたの？」

恵美が直樹にきいた。

「今日は休みです。公演が近くって、最近みんなずっと遅くまで、練習していたから…今日は休めと、部長が言いましたので」

「じゃあ、里緒菜はどうしたんだ？」

恵美の後を、祥子が続ける。

「そうよ。今日も部活だと言っていたわ」

直樹は首を捻り、

「もしかしたら…如月さんは、部室にいったかも…」

「どうして、里緒菜だけ」

香里奈は、直樹に詰め寄った。

「今回の脚本は、如月さんが書いたので…昨日、やり直したいところがあるって、言ってたから」

「そうなんだ…」

直樹の言葉に、香里奈は納得した。

最近、里緒菜とまったく話していない。

いろいろ話したいのに…。

少し黙り込む香里奈と、それを見守る直樹。

二人の様子を、じっと見ていた恵美と祥子は、

顔を見合わせると、

「香里奈…あたしたちいくな」

「じゃあ、またね。香里奈ちゃん」

手を振り、離れていく二人。

「え…ま、待ってよ」

残された香里奈と、

直樹。

気をつかわれたのだろうけど、

笑顔の直樹を見て、香里奈はまた、ため息をついた。

一人きりの部室。

里緒菜は、台本を見つめていた。

これでいくと、決めていたけど、

里緒菜は、悩んでいた。

この物語の終わりを。

ハッピーエンドのはずだった。

でも、今は、

悩んでいる。

ハッピーエンドにして、いいのか。

主人公を演じるのは、里緒菜と直樹。

物語の主人公は、ハッピーエンドに終わっていた。

この前、直樹と二人で台詞を合わした時、

自分が書いた、物語の意味を知った。

（あたしは、劇を隠れ蓑にしている。）

この物語は…。

部室の扉が、開いた。

「今日は、休みと言ったはずだけどな」

入ってきた女は、腕を組んで、里緒菜を睨んだ。

「部長…」

演劇部部長ー中谷美奈子は、里緒菜に近づき、

「台本を、変えたいんだって？…公演は、来週だぜ」

「わかってます。だから、変更は結末だけです」

里緒菜は、目をそらした。

そんな里緒菜の姿を見て、美奈子は、ため息をついた。

「やれやれ…何があったか、知らないけどさ」

美奈子は、里緒菜から台本を取り上げる。

「一度完結させた物語は、変わらないぜ。例え、最後だけ変えたとしても」

美奈子は、台本をめくり、

「よく出来てると思うぞ。エンディングに向かって、相手への思いが溢れてる。それなのに…」

美奈子は、台本を里緒菜に返した。

「最後だけ、無理やり変えたら、おかしくなる。主人公のそれまでの行動…気持ちさえもな」

「何とかまとめます」

里緒菜の言葉に、美奈子は頭を抱えた。

「かあ～！何とか…まとめる！何をだ、如月！」

「ストーリーを…」

「違うだろ！」

美奈子が叫んだ。

思わず、里緒菜は美奈子の顔を見た。

「ストーリーじゃない！お前の気持ちだろ」

はっとする里緒菜。

美奈子を見て、すぐに視線を外した。

「ったく！」

頭をかきながら、美奈子は扉に歩きだす。

「台本は、このままでいく。お前ができないんだったら、誰かに、代役をさせるからな！いいな」

里緒菜は、俯いたままだ。

「どっちにしても、今のお前じゃ…エンディングを変えたとしても、演技なんてできないよ」

美奈子は、部室を出ていった。

また一人になった里緒菜は、

ただ台本を見つめることしか、できなかった。

「はあ～」

香里奈は、深くため息を落とす。

薄情にも、恵美と祥子は先に消えてしまった。

「帰りましょうか」

直樹の笑顔は、嫌じゃなかった。

素直で、まっすぐで、香里奈に何も求めていない。

だから、ただ…。

それに…ここは、学校から駅までの帰り道。

行き交う生徒の視線が、痛い。

祥子が言っていたけど、直樹は女子に人気がある。

（香里奈ちゃんが告白されたことは、くれぐれも内緒にした方がいいよ…。）

と、言われたけど…。

「速水さん」

向こうがこうも、大々的にアピールしてきたら、

「無理…」

香里奈は肩を落として、呟いた。

祥子の言葉は続いた。

（香里奈ちゃんも、お母さんが有名だから…目立ってるし…）

（だから…飯田くんも他の男の子に、妬まれ…）

（ないかあ…どうしてだろ）

思い出したら、腹が立ってきた。

「は、速水さん…」

直樹の声で、香里奈は現実にもどった。

周りを見ると、

他の生徒たちがじろじろと、二人を見ていた。

香里奈は、恥ずかしくなって、

思わず直樹の腕を取ると、全力で走り出した。

「は、速水さあん！」

駅をこえ、タブルケイに向かう坂道に着く。

肩で激しく息をする二人。

「公園で休もう」

直樹の提案に頷く。

公園のベンチに、座り込む香里奈。

直樹はさすが男の子。

まだ余裕がある。

少し息を整えて、

「いきなり、走り出すからだよ」

香里奈は、やっと息が整ったみたいで、直樹を見た。

「みんないるんだもん…恥ずかしい…」

直樹は微笑むと、

「ジュースでも買ってくるよ」

ベンチに座り込む香里奈を残し、

公園の外の自動販売機に、買いに行こうとした。

直樹の足が止まった。

前方から、妙な気を感じた。

公園の入り口に立つ、

黒すぐめの3人。

右端は女…。

あとは男だ。

3人は、近付いてくる。

動かない直樹に気づき、
香里奈は顔を上げた。
「どうしたの…」
直樹は、前を見据えたまま、
「速水さん…動かないで」
直樹は少し構えた。
気のせいではない。
3人は、こちらに向かってくる。
周りに誰もいない。
「速水さん、逃げて」
「え？」
直樹は拳を握りしめた。
3人は、少し広がった。
直樹は舌打ちした。

別々に動かれたら、まずい。

直樹は、香里奈のそばまで下がり、

3人と距離を取りながら、

香里奈を逃がすことに決めた。

3人の足が止まった。

「香里奈様ですね…」

女だけ一歩、前に出た。

「お迎えに参りました」

女は、深々と頭を下げた。

「KKが、あなたを必要としています」

「KK…」

香里奈は、いきなり名前を呼ばれ、驚き、

さらに迎えにきたで、訳がわからなくなった。

「誰よ。あんたたち！」

直樹を押しのけて、詰め寄ろうとする香里奈を、直樹は何とか止め

る。

辺りはもう、日が暮れてきた。

黄昏だ。

女は言う。

「あなたに、否定する権利はない」

「何だとお！」

怒る香里奈。

「落ち着いて」

なだめる直樹。

女は顎を上げ、

「捕まえろ。男はいらない」

二人が、襲いかかろうとした瞬間、

一人が、体を宙に浮かせて転んだ。

誰かに、足を払われたのだ。

「権利がないのは、あなた方よ」

いつのまにか3人の後ろに、立つ女。

「あ！」

香里奈が声を上げた。

黒すぐめの女は、後ろを振り返った。

「お、お前は…」

もう一人の男が、後ろの女に、襲いかかるが、

すぐに転がされる。

合気道のようなものだった。

「世界中を旅するには、ある程度の護身術は、身に付けないとね」

黒すぐめの女は、わなわなと震え、

「速水明日香…なぜここに！」

「明日香！警察に通報したわ」

公園の入り口に、里美が現れた。

「どうする？」

微笑む明日香を、３人は見つめると、

「チッ」

舌打ちを残し、公園の左側の林の中へ消えていった。

明日香は、逃げていく３人の背中を見つめた。

「ママ！」

香里奈の声に、明日香は振り向いた。

夕陽に照らされ、輝いてる明日香向かって、香里奈は飛び込む。

「帰ってきてたの！知らなかった」

香里奈を抱きしめながら、

「ごめんね…驚かしちゃったわね。怪我はない？」

「うん」

香里奈は、明日香の胸の中で頷いた。

その様子を、ほっとして見つめる直樹。

明日香は直樹に気づき、微笑みかけた。

直樹は、慌てて頭を下げた。

夕陽が沈むまで、

香里奈は、明日香の胸の中にいた。

「香里奈…あちらの男の子は？」

香里奈の髪を、撫でてあげながら、明日香がきいた。

香里奈ははっとして、明日香から離れた。

明日香に、甘えているところを見られた。

姿勢を正すと、

「お、同じクラスの飯田くん」

香里奈の紹介を受けて、

直樹は頭を下げた。

「飯田直樹です。速水さ…」

「かわいらしい彼氏ね」

直樹の言葉が、終わらないうちに、

明日香が話し出した。

「え…」

直樹は、彼氏の言葉に舞い上がってしまう。

「よかった。ちょっと、心配してたのよ。香里奈って、女の子ぽくないじゃない…彼氏なんて、できるのかしらと心配で…」

明日香は、直樹を見つめた。

「本当によかった。彼氏ができて…それも、こんな素敵な。ありがとうね」

お礼を言われ、戸惑う直樹。

「少しがさつなところがあるけど、許してやってね…まったく、誰の影響かしら…」

明日香は、チラッと隣を見た。

「あたしの影響と、言いたいのか」

いつのまにか、里美がそばまで来ていた。

明日香はクスッと笑うと、そのまま歩きだした。

「無視かい！」

里美が怒鳴る。

「さあ、ダブルケイに帰りましょう」

明日香は里美を無視して、微笑んだ。

「ちょっとママ！待ってよ」

香里奈は、急いで後を追う。

里美も、仕方なく歩きだす。

直樹は、大きく息をはいた。

やっと、緊張感から解放された。

明日香は振り返り、

「飯田さんも、うちに来る？」

「いえ、今からバイトがありますので…ご遠慮させて頂きます。本当にすいません」

丁寧に謝る直樹に、明日香は、

「そんなに、かしこまらなくていいのよ」

明日香の気さくに、直樹は少し驚いていた。

世界的な歌手なのに。

「はい！」

直樹は、元気よく返事した。

「バイト頑張って」

明日香の微笑みに頭を下げ、直樹は走り出す。

里美にも頭を下げ、

香里奈に、

「また明日。お休みなさい」

そして、もう一度、明日香に頭を下げると、駅の方に走っていく。

「飯田くん！」

香里奈が叫んだ。

直樹は足を止め、

振り返った。

「ありがとう」

香里奈の言葉に、直樹は頷いた。

また頭を下げると、走り出した。

「お休みなさーい！」

香里奈は、直樹の後ろ姿に手を振った。

足を止め、香里奈と直樹の様子を見守りながら、

明日香と里美は、話をしていた。

「警察には…」

明日香の問いに、

「通報してないわ」

里美の返事に、明日香は頷いた。

「明日香…あいつら誰なの？」

里美は、明日香を見た。

「あんた。誰か、わかってたから…脅すだけにしたんでしょ」

明日香は黙り込む。

もう夕陽が、完全に沈んだ。

「明日香！」

明日香は、ゆっくりと歩きだす。

「明日香！」

明日香は振り返らずに、こたえた。

「ＫＫ…ダブルケイと呼ばれているわ」

「ダブルケイ…」

里美は呟き…

はっとした。

「それって…もしかして…でも…そんなはずは…」

明日香は足を止め、

「生きていたのよ」

明日香は、道の先にある店を見つめ、

「啓介が」

それは、香里奈たち親子の未来を、

暗く遮る陰となっていた。

まるで暗闇の如く。

ダブルケイの店の前に、

和恵が立っていた。

和恵は、明日香と香里奈に気づき、大きく手を振り、近づいてくる。

「ママ、お姉ちゃん！」

「和恵！」

香里奈は、大きく手を広げ、飛び込んできた和恵を抱き締めた。

そんな2人の娘の様子を、やさしく見守る明日香。

「明日香…啓介さんが生きてるって、どういうことなの？」

里美は、明日香に食い下がる。

「どういうこと？説明してよ」

明日香は、視線を娘たちから外し、

里美を見た。

「あたしも…わからないわ」

明日香の悲しそうな瞳の色に、

里美は、口をつぐんだ。

「ママ！」

元気よく、明日香に手を振る和恵に、
明日香は、笑顔で振り返す。
和恵と香里奈は、店の中に入っていった。
「ただ…言えることは…」
明日香は、ダブルケイの扉を見つめ、
「あの人は…あたしたちの知ってるあの人とは、違うということよ」
明日香は、里美に悲しげに微笑んだ。
「明日香…」
明日香は、ダブルケイに向かって歩きだした。

いきなりな話だった。
しかし、
驚かなかった。

松木大輔には、予感があった。

志乃から、しばらく活動をアメリカに移すと告げられた時も、驚かず、

やっと始まるのかと、心が踊った。

志乃のバックについてから、どれくらい経ったか…。

もう七年近い。

もうすぐ２０歳になる歌姫が、中学校の頃からついている。

出会いは…チーフの店だった。

ダブルケイ…。

懐かしい響きだ。

かつて、存在した日本最強…

いや、世界最強だと自負していたバンド。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

大輔は、そのメンバーだった。

まだ高校生だった大輔を、ギターリストとして見いだしたのは、啓介だった。

初心者だった大輔の才能が、見込まれたのだ。

そして、

忙しい啓介がいないとき、バンドをまとめ、大輔を育てたのが、

３つ上の明日香だった。

バンドは、世界中を飛び回った。

アメリカ、フランス、ブラジル…

東欧の治安の悪い国々も。

危ない目にもあったが、楽しかった。

大学進学もやめて、ギターリストとして、何年も旅した。

たまに帰ってくる日本。

ダブルケイで、

志乃に出会った。

才能がある子だとは思ったが、

一緒にやるとは、思わなかった。

俺には、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕがあるから。

永遠にこのバンドで…

明日香と一緒に。

大輔は、明日香に淡い恋心を抱いていた。

啓介という憧れ尊敬するアーティストと結婚していて、子供がいても、関係なかった。

思うことは自由だった。

明日香と啓介のバックでギターを弾きながら、

大輔は、ミュージシャンとしても満足していた。

しかし、

大輔の思いは、断ち切られることになる。

啓介の死によって。

大輔は、バンド活動を続けることを主張した。

明日香さえいれば。

啓介のスペースは、ギターで埋める自信もあった。

しかし、

明日香は、首を縦に振らなかった。

他のメンバーも、解散を望んでなかった。

啓介の浮気も、発覚していた。

「今やめたら、ダメだ」

大輔の言葉を受けて、

明日香は、やさしく微笑んだ。

「そうね…大ちゃんの言う通りね」

それは、とても悲しい微笑みだった。

明日香はそのまま…

バンドを脱退した。

明日香と啓介のいない…

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

バンドだけが残っていた。

大輔たちは、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕを続ける為、
志乃をボーカルに迎えた。
いや、志乃が呼んだのかもしれない。
志乃は、啓介を憎んでいた。
姉を殺した相手として…。
憎しみの感情は、どこか大輔とシンクロした。
大輔は、自分から離れた明日香を見返すかのように、
曲を書いた。

もともとＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、オジナルやカバーとかに、
こだわりがないバンドだったが、
志乃の入り、ロックやポップス、Ｒ＆ａｍｐ；Ｂを基本としたバンドに変わった。
当初、天城志乃＆ａｍｐ；　ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕにしょうかとしたが、
バンド名は捨てた。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕの名前に、すがりたくなかった。

志乃だけを、全面にだした。

高校生になった志乃は、才能を爆発させる。

作詞に、ダンス…圧倒的なパフォーマンス。

大輔も曲を書きまくった。

そして、志乃たちはヒットメイカーとなり、

毎週ヒットチャートを賑わし、

チャートとにらみ合っていた。

大輔の作曲能力もかわれ、数多くの歌手に曲を提供した。

日本という狭い国で、忙しく動き回り、天才とチヤホヤされて。

それはＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕとはまったく違った。

世界中を旅して、ヒットチャートなんて関係ない。

音楽だけの旅。

やはり世界にでたい。

世界中で、認められたい。

大輔たちは、志乃とともにアメリカに旅立った。

早くも何ヶ月か前に、

時祭グループがアメリカで、チェーン展開している店舗や、テレビスポットで、志乃の曲は流れていた。

頻繁に。

アメリカの地を踏み、しばらく歩いていると、どこからか流れてくるぐらいだ。

アルバムのレコーディング、ライブの予定の前に、

志乃は、行きたい場所があると言った。

今、志乃と大輔たちは、その目的地の前にいた。

それは異様な光景だった。

ある建物の前に、テントやプレハブ小屋が並び、

人々は、その建物にすがりつき、耳をつけ、

中の音を聴こうと、群がっていた。

虚ろな目、汚れた服。

人々はただ…中の音だけを求めていた。

道に寝ころんだ者。

ただ宙を見つめている者。

群集を押しのけるように、志乃たちは進む。

建物の扉を開ける。

黒ずくめの男が、志乃を見て、口笛を吹くと、チケット代をせがむ。

志乃は人数分払うと、奥に進んだ。

奥の扉から、音が漏れてくる。

大輔はその瞬間、

震えた。

（何だ?この音は…）

震える体を抑えていると、

志乃は、扉を開けた。

大輔たちに、衝撃が走った。

立ってるのがやっとだ。

音が刺激する。

会場内に、一体感なんてない。

失禁してる者。

喘いでいる者。

何かを、狂ったように振り回している者。

泣き叫ぶ者、やってる…者。

共通点は、狂っていることだけだ。

ステージ上では、バンドメンバーも泣き叫び、演奏なんてしていない。

ただ一人…

だけが、サックスを吹いていた。

志乃は、ワナワナと全身を震わせ、ステージを睨んでいた。

「啓介」

大輔は驚きから、後ずさる。

「そ、そんな…馬鹿な」

一旦、扉を開け、会場から出た大輔は、激しく息をした。

「あれは…」

信じられないものを見て、大輔は、全身に汗をかいていた。

「そんなはずはない…」

腕で汗を拭っていると、

「あるわよ」

誰かが、大輔に話しかけた。

大輔は、声の方を見た。

歩いて近づいてくる女。

「久しぶりね」

すぐには、大輔はわからなかった。

「覚えてない？」

大輔は、大きく目を見開いた。

「馬鹿な…なぜここに…この国にいる！」

大輔は叫んだ。

「なぜって…」

女は笑った。

「国がなくなったからよ」

「！」

「元気にしてた？最後にあったのは…7年前かしら」

「ティア・アートウッド…」

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕがライブの為、訪れた東欧の国。

今はない国で、ティアと出会っていた。

音楽が、盛んでなかったその国で、いろいろ世話になった人だ。

「なぜここに？」

大輔の問いに、せせら笑うティア。

「国が、なくなったって言ったはずよ」

「確かに国は…名前が変わったが、あるはずだ」

「確かにあるわ…でも、もう知ってる者はいない…」

ティアは体を震わせ、

「あれは…違う国よ。愛する人が誰もいない…」

「誰も？」

「音楽のせいよ…」

「音楽…」

「弾圧されたのよ。あなたたちのような音楽を、聴いてたから…資本主義の音楽なんて…聴いていたから！」

ティアは、大輔に近づく。

「限られた娯楽しか、許されなかった私たちに…あなたたちは、数多くの情報を送りつけてきた。一方的に！」

ティアの瞳は真っ直ぐに、大輔を見つめる。

「その一つが音楽だった…あたしたちは、熱中したわ。この国にない自由なものを、感じたから…。あなたたちは、知ってるかしら？あなたたちが、何気なく聴いている音楽が…地下で、革命のテーマになったり、生きる力になっていたことを…」

言葉は続く。

「あたしたちは、音楽を聴き、明日への希望を抱くようになった…」

ティアの表情が変わる。

「それを、国は許さなかった！その思いが、いつ革命や暴動に、つながるかわからない…」

「危惧した国は…音楽を聴く人間を、徹底的に取り締まり、罰を与えた」

ティアは天を仰ぎ、

「誰も助けてなんて、くれなかったわ。みんな捕まり、酷い拷問を受けた」

「そんな話は知らない…」

大輔が呟いた。

ティアは大輔を睨み、

「そうよ！あなたたちはそうなの！自分たちで、勝手に情報を流し、自由や楽しさ…良いところだけを見せておいて！その結果なんて気

にしない」

「あたしたちがどうなろと、気にもしないわ」

ティアは大笑いした。

涙を流しながら…。

「大輔さん！」

扉がいきなり開き、会場の中から、鋭い声が飛んだ。

サックスの音で埋めつくされた空間を、一瞬で切り裂いた。

「その女と何話してるか、わからないけど…あたしたちの目的は、あいつよ」

志乃の声で、はっとした大輔は、会場に入り、ステージを見た。

「そんな女、無視して…行くわよ」

志乃は、ステージに向かう。

大輔たちも慌てて、後を追う。

チラッと、ティアを見た。

ティアは、ニヤッと笑みを浮かべていた。

ステージ上に上がる志乃たち。

KKは、そんなことは気にせず、サックスを吹き続ける。

もう演奏ができないステージ上のミュージシャンから、楽器を借りる。

「いいのか？」

ステージを傍観するティアのそばに、ジャックが来た。

「いいんじゃない」

ティアは、口元に笑みを浮かべ、

「ちょうどほしかったんだから…」

ステージ上で、ギターを手にした大輔は、足が震えてきた。

直に音を聴くと、凄さがわかる。

意識が、持っていかれそうだ。

昔、啓介のそばにいたことがあるが、

比べものにならない。

これは、長時間保たない。

大輔は、志乃の身を案じた。

マイクを握り締め、

志乃はカウントを取る。

1，2，3…。

このサックスを、かき消さなければならない。

とっさに、大輔が弾いたリフは、

ハードロックの名曲。

ディープ・パープルのＢＵＲＮ。

凄まじい爆音が、会場を覆い尽くす。

志乃のシャウトが、こだまする。

観客がこちらを見た。

（いける！）

志乃や大輔が確信した、その時。

ティアは、クスッと笑った。

「壊れちゃえ…」

KKのサックスの音を、消し去る爆音を奏でながら、

大輔は思った。

(ほら…明日香さん…俺は、啓介さんの穴を埋められたんだ)

大輔はさらに、激しくギターを弾いた。

すると…体に何かが、巻き付いてきた。

「何だ!」

大輔は思わず、声に出した。

何かが体に絡みつく。

「うわあっ!」

他のメンバーも声を上げた。

大輔が、後ろのメンバーを見ようと、振り返った。

その時、

志乃のシャウトが、絶叫に変わった。

狂ったように、泣き始めた。

「志乃…」

弾きながら、志乃のもとに近づこうとした大輔は、

片膝をついた。

「始まった…」

ジャックとティアは、ステージの様子を見、呟いた。

「浸食が…」

志乃の心の奥から、染みでたもの…。

（お姉ちゃん…）

裸の百合子。

そして、だんだんと暗闇から姿を現す。

啓介。

二人は絡み合う。

百合子は志乃を見、フッと笑うと、

啓介とキッスをした。

（いやーーーーっ!!!）

小さな子供となった志乃が、絶叫する。

いや…

お姉ちゃんとなんて…。

いや、

いや、

いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや。

志乃涙を流しながら、

堕ちていく。

憎かった。

殺したかった。

お姉ちゃんを…。

あたしの愛する

男を奪った女。

あたしを選ばなかった…

男…。

みんな…

憎かった。

絡みつく…サックスの音が…

志乃の全身を包んだ時、

志乃の心は、秘めていた思いとともに、

堕ちていった。

「志乃…」

ギターを持ったまま、大輔は倒れた。

他のメンバーも、気を失っていた。

手を伸ばす大輔の目に、

サックスを吹き続けるＫＫと、

崩れ落ちる志乃が映る。

「志乃…」

目がぼやけ、視界が真っ白になる。

意識が消える瞬間…

大輔の目の前に、啓介がいた。

その向こうに、

マイクを持った明日香が…。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ…。

そうか…。

俺は、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのステージにいるのか…。

明日香が、大輔の方を見て、微笑む。

今まで…

夢だったんだな…。

何だ…。

俺は、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕにいるじゃないか…。

よかった…。

明日香を見つめながら、

大輔は、夢の中に墜ちていった。

「ＫＫの音は、心の傷に話しかける。深い傷をもつ者程、墜ちやすい」

ジャックは、耳栓を確かめた。

これがなければ、自分とて危ない。

「これでほしかったものが、手にはいったわ」

ティアは、ステージを見つめながら、

「ＫＫと演奏ができるバンドと…全面に出て、バンドの顔となる」

「歌姫という…傀儡」

崩れ落ちた志乃と、

大輔たちが立ち上がる。

「さあ！始めなさい」

ティアが、ステージに近づく。

「今、全米で流れているあなたたちの曲！」

志乃は、マイクを握りしめる。

「ＫＫを加え、新たなるステージへ！」

志乃たちは、演奏を始める。

ＫＫのサックスが、演奏に参加した。

それは、とても素晴らしい音だった。

音だけを、感じることができたら…。

真実の答え

久々に、明日香はダブルケイの店に出ていた。

バンドは今、雇っていない。

しかし、里美の人柄の良さで、店内は、お客でいっぱいになっていた。

活気はあった。

明日香は、カウンターに入る。

今日は、何年も前から、来ている常連さんも、顔をだしていた。

明日香の顔を見て、驚きの声を上げる。

「久々だね～明日香ちゃん」

「お久しぶりです。青木さん」

「名前、覚えてくれてたんだ」

お客の喜ぶ顔に、明日香は微笑み、

「だって…あたしが、ここに来る前から、いらっしゃってますから…」

「恵子ママの時代…からだもんなあ」

青木は、カウンターから振り返り、店内を見回し、

「客層も変わったしな…」

「そうですね…。あたしが知らない方も、多くなりました…」

明日香も店内を見、

「ですけど…それだけ、今のママが、頑張っていると、いうことなのでしょうけど」

「久々に、明日香ちゃんのトランペットが、聴きたいなあ…」

「今、バンドがいませんから…」

明日香は、店の奥のステージを見た。

ドラムセットなど、昔のままだ。手入れは整っている。

「俺さ…。明日香ちゃんの、初ステージ見たんだぜ」

明日香は、ステージを見つめた。

初ステージはここだった。

扉が開いた。

入ってきた3人に、明日香は驚き、笑顔になった。

「よおっ」

武田、原田に阿部。

かつて、恵子とともに、この店の由来になったバンドを組んでいたメンバー。

ステージに、明かりがともった。

武田がカウントをとり、原田が旋律を奏でると、

明日香は、トランペットのマウスに、口づけをした。

阿部が、しっかりと音を引き締める。

曲はバイバイブラックバード。

あまりにも、軽快な演奏に導かれて、二階から、香里奈が降りてきた。

里美が手招きして、空いてるカウンター席に促す。

香里奈は、久々の母の演奏に、じっと聴き入っていた。

営業時間が終わり、お客が帰った後。

店内には、もう関係者しかいなかった。

まだ店内にいた香里奈に、里美は言った。

「明日学校でしょ。早く寝なさい」

「はあい」

香里奈は、カウンターから立ち上がった。

「和恵はもう寝てるの？」

明日香の問いかけに、

「とっくに寝てる」

ステージ横の扉を開けようと、ノブを握った香里奈は、振り返った。

「ママ！」

「何？」

香里奈は少し思い悩むと、

「何でもない…おやすみなさい」

「おやすみ」

香里奈は里美たちにも、挨拶すると、扉を開け、中に消えていった。

「今日のことじゃないの？」

里美の言葉に、明日香は頷き、

「香里奈には、きちんと話をするわ」

二人の会話を聞いている三人。

「そう言えば…なぜ…ここに？それも、三人で…」

明日香の問いかけに、

テーブル席で、ビールを飲んでくつろいでいた三人は、グラスを置いた。

阿部はジャケットのポケットから、一枚の紙切れを取り出した。

「これを見てな」

それは、新聞の切れ端だった。

「俺たち…この記事を見て、気になってな…」

「ネットを検索したら、ＫＫの文字が…」

阿部は立ち上がり、明日香の方を見た。

「明日香ちゃん…この記事のやつは、啓介なのか？」

明日香は阿部から、少し視線をそらす。

「啓介だと思います…確認はできていませんけど…」

「事故で死んだんじゃなかったのか…」

明日香は首を横に振り、

「遺体は見ていません」

「なんだって！？」

原田と武田が立ち上がる。

里美は腕を組んで、カウンターにもたれている。驚かず、ただ話を聞いている。

「交通事故で、アメリカの病院に運び込まれたらしいんですが…。その時、あたしもアメリカにいたんですけど…あたしはニューヨーク。彼はカリフォルニアでした…」

明日香の言葉だけが、静かに響いた。

「あたしたちはレコーディングをしていました…。その合間に、啓介だけが、知り合いのライブに呼ばれて、カリフォルニアに向かったのです」

明日香は、淡々と話す。

「大きなチャリティーコンサートだったので…有名なアーティストがたくさん出ていました…。そのコンサートの移動途中に…」

「うそおっしゃい！」

明日香の言葉を、里美が遮った。

「もういいでしょ…あんたは頑張ったわ」

里美はカウンターから出て、明日香に近づき、

「もうかばう必要もないのよ」

「里美…」

「あんたは言いにくいでしょ。あたしが言うわ」

里美は阿部たちの方に、顔を向け、

「カリフォルニアでコンサートがあったのは、本当だけど…啓介さんは、一人ではなかったわ」

「さ、さとみ！」

狼狽える明日香を無視し、里美は言葉を続ける。

「天城百合子もいた…生まれたばかりの赤ん坊を連れて」

「やめて！」

明日香は絶叫する。

しかし、里美は言葉を続ける。

「そこで、コンサート終了後、三人は車で移動中に…事故にあう。」

明日香は手で顔を覆った。

「百合子さんは即死。啓介は重傷…赤ん坊の和恵だけは、奇跡的に無傷だった」

「明日香。あんたは事故を知り、すぐに駆けつけたけど…重傷だった啓介さんは…病院からいなくなっていた…」

「百合子さんが何故、カリフォルニアにいたのはわからない。しかし、啓介さんと、いたのは事実。そして、二人の間に子供ができたことも事実」

阿部たちは驚き、言葉がでない。

「当時、百合子さんの両親は亡くなっており…姉妹は、親戚の家に世話になっていた」

「親戚は、高齢であり…突然百合子が亡くなり…赤ん坊までいる。百合子は働いていたから、収入があった。それがなくなり…まだ中学生だった志乃の面倒を見てるのに、赤ん坊までは、見れないと言った」

里美は目を瞑り、

「だから、あんたは…」

一度言葉を切り、

「和恵を養女に迎え、育てることにしたのよ。子供の為、周りにうそをついて…」

「あの子には罪がないから…」

明日香は呟いた。

阿部は、そんな明日香にかつての姉と姿をダブらせっていた。

「事故で亡くなったと周りに言ったところで…妹である志乃は、真実を知っていた」

明日香は、里美の言葉の後を続けた。

「だから…彼女は独立する為、バンドに入り…早い時期にデビューしたの…生きていく為に…」

里美は明日香を見、

「あんたがそうさせたんでしょ！」

里美が叫んだ。

「志乃の為に、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕを脱退して…志乃をバンドに入れるようにもっていった…」

里美は泣いていた。

「どこまで、お人好しなのよ」

「でも…ほっとけなくって…ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕなら、志乃ちゃんを任せられるから…」

「そうしたことで、あんたは…ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕにも、志乃にも恨まれているのよ」

「それでも、彼らは成功し…有名になれたわ」

明日香は微笑んだ。

そんな明日香を見て、里美はイライラしたのか…

タバコに火をつけた。

「まあ…あんたらしいけどね…」

「そんな事実が、あったのか…」

阿部は、席についた。

「はい」

明日香は頷いた。

「で、これから、どうするんだい？」

阿部の問いに、明日香は、

「啓介に会いに行きます」

明日香は力強く、

「あの人の妻として…そして、家族として」

けじめ

湯船に、半身を沈めながら、

里緒菜は、美奈子の言葉を繰り返していた。

（お前の気持ちだろ！）

お前の気持ち…。

あたしの気持ち。

深い湯船に、全身をつけた。

里緒菜は、目を閉じた。

しばらくして、里緒菜は立ち上がると、風呂場を出た。

バスタオルで体をふき、パジャマに着替えると、

急いで、自分の部屋に戻った。

同じ部員だから、連絡先は知っていた。

携帯をかける。

９時前。

バイトは、終わってるはずだ。

しばらくコールが続く。

里緒菜は、睡を飲み込んだ。

でてほしい…。

今、でてくれないと…。

次は、かけれないかもしれないから。

留守番に変わった。

里緒菜はそのまま、ベットに倒れ込んだ。

緊張が抜けた。

どうしょう…。

と、

悩んでいたら、携帯が鳴った。

慌てて、里緒菜は携帯を取る。

着信を確認して、

「もしもし…ナオくん…。遅くに、ごめんなさい」

里緒菜は一呼吸おくと、

「あなたに話があるの…今から会えない？」

里緒菜は、直樹の返事をきくと、

出かける準備をした。

直樹はバイト先まで、電車で通勤していた。

電車を、ホームで待っていると、

携帯が鳴った。

電車が来たため、一度は携帯を切り、乗ろうとしたが、

慌てて降りた。

着信を確認すると、里緒菜からだった。

来週の舞台の件だろうか…。

かけ直す。

「どうしたの？」

里緒菜は、今から会えないかと、きいてくる。

（何だろ？）

と思いながらも、

「いいよ」

とこたえた。

里緒菜の家の近くを、電車は通る。

直樹は、途中下車した。

改札を降りると、

目の前に里緒菜がいた。

「こんばんは…」

里緒菜の少しぎこちない挨拶に、

「どうしたの？こんな時間に…」

少し訝しげに、直樹は里緒菜を見た。

「謝らなくちゃ…ならないことがあるから…」

二人は歩きだした。

あまり栄えた駅じゃないから、すぐに…真っ暗な人気のない場所に出る。

川添の土手…。

駅の反対方向にいくと、高校がある。

明日香や里美が、通った高校だ。

里緒菜の家は、ちょうど反対側にあった。

風がきつい。

里緒菜の髪を、舞い上げる。

直樹は川面を見つめながら、里緒菜の言葉を待った。

里緒菜も、川面を見つめた。

周りの住宅の明かりをうけて、反射していた。

里緒菜は…

ゆっくりと口を開いた。

「この前…」

直樹は、里緒菜を見た。

整ったきれいな横顔は、まだ川面を見つめている。

「香里奈とナオくんのこと…応援するっていたけど…」

おもむろに、里緒菜は口を開いた。

月が川面に映り、揺れていた。

「だめみたい…。応援してなかった…」

無言の直樹。

「ごめんなさい…」

里緒菜は、拳を握りしめ、

「応援なんて…応援なんて…できなかった…」

涙が、

里緒菜の目から流れた。

「ずるいんだよ…あたし…」

直樹は、ゆっくりと首を横に振った。

里緒菜は苦笑し、

「ずるいよ…うそばっかり」

里緒菜は、少し歩き出した。

直樹に背を向けて。

「でも、これじゃ…だめなの…」

「香里奈も、ナオくんも大切だから…」

里緒菜は振り返り、直樹を見、

全身を直樹の方に向けた。

「あたし…」

里緒菜は、満面の笑顔を見せた。

せいいっぱいの笑顔。
かなわない願い。

「あたし、ナオくんのことが好きです」
里緒菜は、心からそう思っていた。
あなたが好きと。
ただそれだけ。

直樹は一瞬…驚いたが、
すぐに、真剣な表情になった。
きちんと姿勢を正すと、直樹は深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。俺は…」
直樹の言葉を、里緒菜は止めた。
「わかってるから！いいの…」
「如月さん…」

「逆に…その答えじゃなかったら、怒ってた」

里緒菜は、くるっと一回転すると、

また直樹に背を向けて、歩き出した。

顔を、見せる訳にはいかなかった。

涙が溢れていた。

見せる訳にはいかない。

「今度の劇…がんばろうね」

「うん」

直樹は頷く。

「でも…台本変えたの？」

「変えてないわ。最初のままよ」

そう。

かなわなくても、

最初の気持ちは、変わらない。

「こんな遅くに呼び出して、ごめん」

里緒菜は、振り返った。

直樹と少し離れたから。

暗がりとこの距離。

顔がよく見えないはずだ。

「こんなところで悪いんだけど…お別れしましょう」

もう限界だった。

「また明日…学校で。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

里緒菜は手を振ると、走り出した。

涙がまた…止まらなくなっていた。

涙を見せたくなかった。

直樹に、変な心配をさせたくなかった。

何とも言えない気分のまま、
直樹は帰途についた。
何もできなかった。
しかし、
やるべきでもない。
今、抱いてる気持ちは、
同情や憐れみだ。
愛情ではない。
恋愛は、同情や憐れみでするものじゃない。
特に、
勇気を持って告げた人には。
真剣な心、気持ちは、
大切な人だけに捧げるものだ。
ダブルケイのある駅から、一つ向こうに、直樹の最寄り駅があった。

電車を降りて、すぐ…駅前に、直樹が今住んでいる家があった。

家の玄関先に、誰かいた。

直樹に気づくと、

「よお」

軽く手を上げた。

「和也…」

待っていたのは、和也だった。

「和也…」

直樹は、和也に近づいた。

「どうしたんだ？一体…」

和也は家を見上げ、

「久々に…見たくなったのさ」

「突っ立ってないで、中に入れよ」

直樹は、ドアを開けた。

促されて、和也は中に入った。

そこは店だった。

カウンターに、テーブル席。

小さな小料理屋だった。

「綺麗にしてるな…」

和也は感嘆した。

カウンターもテーブルも…

食器類も…

何もかもが、綺麗に掃除され、片付いていた。

まるで、今でも営業をしているような…錯覚に陥る。

もう何年も、営業していないのに。

和也は、店内を歩いた。

ここが始まりだった。

和也の母と父が始めた…

初めての店。

「ちょっと荷物置いてくる」

直樹は、奥の階段を登っていった。

和也は、カウンターに座った。

思い出が蘇る。

父親がカウンターと、厨房で料理をし、

母がホールを忙しく、動きまわる。

小さな和也は、カウンターに座り、その様子を眺めていた。

あの頃は、永遠だと思っていた光景が、

今は…遠い昔のことだ。

「お待たせ」

階段を降りてきた直樹の声で、

和也は、現実に戻った。

「上行こうか」

直樹が誘ったが、

和也は首を横に振り、

「ここでいいよ」

和也はカウンターに座りながら、店内を見つめている。

直樹がカウンターに入り、お茶を出そうと、冷蔵庫を開けた。

「いいよ」

和也は、そう言ったけど、

直樹は、お茶の入ったペットボトルを開けた。

グラスを2つだし、お茶を注ぐ。

直樹は、グラスを手渡した。

和也は、一口飲んだ。

「これは…つくってるのか」

直樹は、ペットボトルをしまいながら、

「お茶ぐらい、自分で沸かすよ」

直樹は冷蔵庫を閉めると、カウンターから出た。

「何かあったのか？」

「いや…ちょっとな…」

和也は、直樹から視線を外した。

直樹は少し距離をおいて、お茶を飲む。

しばらくして、

和也は、持っていたグラスを置くと、立ち上がった。

「すまないな…こんな時間に押しかけて…」

「何言ってるんだ。もともとお前の家だろ。俺が今、借りてるだけだ」

「それも…俺のせいだろ。俺が高校を変えたから…」

「和也」

直樹は真剣な顔で、和也をにらんだ。

和也はフッと笑うと…、

「ちがったな…。お前の勝手だったな…」

真剣な目で、直樹を見た。

「直樹…」

「何だよ」

和也は直樹を見ずに、きいた。

「速水とは、上手くいってるのか…」

「あ、ああ…まあなあ」

顔を真っ赤にして、口ごもる直樹。

和也は目をつぶった。

「直樹」

「何？」

和也は、直樹に微笑んだ。

「大切にしろよ」

「ああ…大切にしてる」

和也は、ドアに向かって歩きだした。

「帰るわ」

「和也…」

ドアの前で、和也は立ち止まり、振り返った。

「もし…ここに…戻りたいと言ったら…怒るか」

直樹は呆れたように、

「お前の家だろ」

「今は…」

和也は、店内を見回した。

「今も、お前んちだ」

直樹は言い切った。

和也は苦笑する。

「直樹…」

「何だ」

「家賃はいらないぜ。いつも言ってるが…こんなに綺麗にしてくれているのに…」

「俺が借りてるんだから、当然だ」

「しかし…友達だぜ」

「友達だから、こういうことは、ちゃんとしないと」

「ったく…」

「けじめだ」

「ばかが…」

和也は笑う。そして、頭をかくと、

「じゃあ、直樹。おやすみ」

「和也…」

笑顔を直樹に向けながら、和也は、ドアを開けた。

「おやすみ」

直樹の言葉を背にして、
和也は歩き出した。
彼の大切なものを確認して。

学校から帰ると、
ダブルケイに、久々の音が戻っていた。
明日香がいるということで、阿部たちだけでなく、昔の音楽仲間が集まっていた。
久々に里美がドラムを叩き、明日香がトランペットを吹き、知らない女の人が、歌っていた。
ギターは
何とゆうだ。
「先生!?」
香里奈は驚いていた。
さっき、学校で会ったのに…。

演奏が終わり、ゆうが香里奈に気づいた。

「速水。遅いなー！さては、寄り道でもしてたか？」

確かに、恵美と祥子とたこ焼きを食べにいったけど。

里緒菜と直樹は、部活だった。

一昨日のことがあったから、直樹は送ろうとしてくれたが、

香里奈は断った。

明日香の、もう襲わない…大丈夫という言葉と、

格闘技をやってる恵美が、いてくれたから…。

というよりも、

多分

自分から、近々行くことになる予感がしてたから。

恐くはなかった。

「香里奈ちゃん。大きくなったわね」

ステージで歌っていた女が、満面の笑顔で近づいてきた。

香里奈は、首を傾げる。

「あっ！覚えてないか…俺の妻だ」

ゆうは、香里奈の様子に気付き、説明した。

「あなたが小さい時に、何度か会ってるのよ」

幸子は、香里奈の顔を覗き込んだ。

「小さい頃は、明日香さんそっくりだと思ったけど…大きくなったら、お父さんに似てきたわね」

幸子は、同意を求めるように、ゆうの方を見た。

「目元なんて…啓介さん、そっくり」

一人頷くゆうに、香里奈は詰め寄る。

「父を知ってるんですか！？」

「そりゃあ～知ってるわよ。あたしが、尊敬する歌手の弟だから…」

「尊敬する歌手…？」

香里奈は、誰かわからなかった。

「和美おばさんのこと…言ってなかったかしら」

明日香が、香里奈にそばに近寄ってくる。

「ママ…」

明日香は、香里奈に微笑んだ。

「香里奈…大事な話があるの」

「大事な話？」

明日香は頷くと、

「少し外に出ましょう」

明日香と香里奈は、二人で店を出た。

和恵は、里美が相手をしていた。

明日香は出るときに、里美に目で合図を送っていた。

店を出て、明日香は山道を歩いていく。

香里奈は後を追う。

５分程登ると、

墓地があった。

そこに眠る人物。

それは、香里奈のお祖母ちゃん…

速水恵子の墓があった。

もう日が、沈みかけていた。

今日最後の輝き…夕焼けがきれいだ。

墓地は、誰もいなかった。

明日香は、墓に手を合わせる。

「ママは多分、知ってたわね…啓介のこと…」

香里奈も手を合わせる。

「あなたの息子が…生きてたってことを」

明日香の言葉に、香里奈は驚いたが、

衝撃はなかった。

やっぱり…

生きていた。

でも、

明日香の口から、直接きくと、重みがあった。

明日香は振り返り、香里奈の方を向いた。

「香里奈…あなたのお父さんは、生きています」

強い風が吹いた。

「例え…それがどんな形であっても」

明日香はそう言うと、

また恵子の墓に、視線を落とした。

香里奈は理解していた。

生きていたことは、うれしい。

しかし、それはあまり喜ばしい状況じゃないことを。

「あなたは知ってるか…わからないけど…今、アメリカの音楽界で、
問題が発生しているの」

「問題…？」

明日香は頷き、

「音のドラッグーといわれる音源が、ネットで配信され…数多くの事件が、発生している」

「音の…ドラッグ…麻薬？」

「最初は、そんなもの…噂だけのものだと思っていたは…みんなね」

夕陽が落ちていく。

「でも…あるライブで異変が起きた…。ライブ中、観客の何人かが暴れだしたの」

香里奈は黙って、きいている。

「死傷者もでたわ。それは、あるバンドが演奏している時に起こった」

明日香の体を、夕焼けが赤く染めている。

沈む前の一番の輝き。

明日香は、香里奈を見つめた。

「そのバンドの名は…ＫＫ…ダブルケイよ」

「ダブルケイ…」

香里奈は呟いた。

「そのバンドが演奏すると、必ず死傷者がでるから…会場を貸さないところも、でてきたけど…見たいという人々の数は、増え続けているの」

明日香は、恵子の墓の方に向いた。

「ママ…あたし。啓介を止めに行きます。ダブルケイは、ママと健司さんたちのもの…」

明日香の脳裏に、思い出がフラッシュバックする。

「それを汚すなんて…あたしは、許せない」

そう言う明日香の横顔を、香里奈は、ただ見つめていた。

明日香は香里奈を見、

「香里奈…ママはまた、アメリカにもどるね」

「ママ…」

「ごめんね…いつもそばにいなくって…」

香里奈は、首を横に振った。

「平気だよ。ママはいつも頑張ってるんだから…。それに、里美おばさんが、いつもいてくれるし…」

「里美にも、迷惑かけてるわね」

明日香は、恵子の墓に礼をすると、歩き出す。

「帰りましょう。香里奈」

「うん」

香里奈も、恵子に礼をすると、明日香の後を追った。

「香里奈」

「何？ママ」

「今回は、和恵を…日本においていくわ。何があるかわからないから」

明日香は、下に見えるダブルケイを見つめ、

「和恵を頼んだわよ」

「大丈夫！任せてよ」

明日香は微笑み、

そして、

誓った。

この子たちの為、頑張ろうと。

受け取ったバトン

次の日、明日香はアメリカへと旅立った。

泣きじゃくる和恵を何とか、なだめて。

向こうの日本人学校に通っていた和恵を、転入させようか悩んだけど、

しばらくは、ダブルケイで、里美が面倒を見ることにした。

香里奈は、普通に学校に通う。

そんな日々が、何日か続いた。

町を歩くと、アメリカデビューした志乃の歌声が、溢れていた。

向こうでのチャートアクションも好調で、

シングルはトップ２０に、いきなり食い込んでいた。

向こうでのライブ中、失神者が続出していた。

香里奈は、志乃の曲に、

妙な違和感を感じていた。

目立たないが、

微かに音がしていた。

意志がある別の…

表面には聴こえない…

聴こえる演奏の奥の方で、

何とも言えない絶望とともに…。

明るく、激しいダンス曲なのに…

どうしょうもない悲しみが、隠されている。

香里奈は、嫌な予感がした。

「速水さあん」

昼休みになると、必ず屋上で、ランチするのが当然になっていた。

香里奈、恵美、祥子、

直樹に、和也。

そして、里緒菜がいた。

演劇の発表は、明日だった。

もう準備は、すべて用意できていた。

楽しそうに、話すみんなから離れ、

里緒菜は、手摺りから、景色を眺めていた。

「どうしたんだ?如月」

そんな里緒菜に気づき、和也がそばに来た。

「別に…何でもないわ」

和也は、里緒菜の横顔を確認して、

「吹っ切れたみたい…だな」

和也も視線を変え、景色を眺める。

里緒菜は、少し驚いたように、和也の横顔を見た。

少し微笑むと、

「ええ」

明るく返事をした。

「あのさ…お前にききたいんだけど…」

「何？」

里緒菜がきいた。

「お前と俺は、近いから…きくけど…俺の魅力って、何だと思う？」

「魅力？」

「モデルをやってるからか…それとも、親戚に金持ちがいるからか…」

里緒菜は首を捻り、

「モデルは有名だけど…親戚のことは、知らないんじゃないの…あたしと違って」

「全面に出してなくても…今…俺が、のほほんと、余裕を持っていられるのは…そういうのが、バックボーンとして、あるからじゃないんだろうかってな。そういうのが、無くなったら…俺はどうなるんだろうか…」

和也は振り返り、

香里奈と楽しそうに話す直樹を、見た。

「あいつは強いよ…。俺は、あいつに支えられている。もし、あいつはいなかったら…」

「あたしも、香里奈たちに支えられてるわ」

「もし、俺が…時祭の一員じゃなかったら…」

和也の言葉に、里緒菜は肩をすくめた。

「友達だから、みんないっしょにいるのよ」

里緒菜は、体を和也に向けた。

「もし、藤木くんが、何ももってなくても…友達は友達よ」

里緒菜は、香里奈を見、

「あの子たちは、そんなこと関係なく、友達でいてくれる」

「もし、俺がすべてを失っても…？」

「少なくても、ナオくんはそうでしょ？」

和也は、直樹を見た。

「そうだな…」

何があっても、直樹は友達でいてくれる。

「何かあったの？」

里緒菜が心配そうに、和也の顔を覗き込んだ。

「何でもないよ…でも」

和也は、里緒菜に微笑み、

「ありがとう」

和也は、みんなの方に戻る。

「何…里緒菜と話し込んでたんですかあ？」

祥子がちゃかす。

「大した話じゃないよ…俺よりさ！直樹！あまりいちゃつくなよ」

和也は焦りながら、誤魔化すように、大きく笑った。

「いない…」

アメリカに戻った明日香は、レコード会社や、音楽仲間の情報から片っ端から、ＫＫのいそうな所を探したが、

見つからない。

何日も、探してもいるが。

最後に、志乃たちが訪れた会場も訪ねてみたが、

その周りのテントにも、人はいなかった。

まったく、手がかりがなくなった。

ここしばらく、ＫＫがライブを行った記録がない。

途方にくれていると、

携帯が鳴った。

サミーからだ。

「明日香。啓介が、今どこにいるかわかったぜ」

「どこ？」

「明日香、お前の弟子で…最近この国に来た…」

「志乃ちゃん？」

「そう！そこにいる。志乃とこだ…確か、バックは大輔たちだよな」

サミーは、ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕのメンバーを知っていた。

「表向きは、全面にでていないが…ライブでは、吹きまくっているらしい」

サミーは興奮して、

「それより異常なのは、ライブの数だ。１日６回以上…ほとんど毎日だ。あいつらが、いくら体力があるといっても…いつまで保つか」

明日香は、携帯電話を着ると、

ネットに接続し、ライブの予定を見た。

今日は、ニューヨーク。

次の予定は、未定となっていた。

明日香は、軽く舌打ちすると、

ニューヨークへ戻る為に、空港へ向かった。

香里奈は、驚いていた。

あまり音楽に、興味を持たないようにしている香里奈でも、

その宣伝、広告、

テレビ等のオンエアの量は、凄まじかった。

そこら中で、志乃の姿を見ることができた。

異常な程に…。

アメリカでのデビューアルバムは、リリースの予定延期が、続いていた。

人気が出てるのに、アルバムが出せない。

レコード会社は、催促しているが、

バンドは、狂ったようにライブだけを続けた。

それとともに、まだ気づいてはいないが、

ライブ後の地域で、犯罪率が上がっていることを。

ライブの終わった会場は、必ず暴れる者が、何人も出ていることを。

主要なアメリカの都市を、ある程度制覇した志乃たちは、

次のターゲットを、日本へと向けた。

「今は、大雑把でいいわ」

ティアはステージの裾から、観客席を眺めていた。

「音が悪すぎる…これじゃあ、ＫＫの音が、伝わり難いぞ」

ジャックは、耳栓を確かめながら、会場の音響の悪さに毒づいた。

ティアは肩をすくめ、

「今、これくらいでいいのよ」

「しかし…」

ティアは、ニヤッと笑うと、

「一斉に狂ったら、面白くないじゃない。じわじわがいいのよ」

ライブが終わり、志乃たちがステージを降りる。

ヘトヘトになって、帰ってくる大輔たち。

その後ろから、志乃が歩いてくる。

観客が、見えるところまでは、普通に歩いているが…見えないところに来ると、

いきなり、そばにある壁に手をつき、激しく息をする。

「おい、大丈夫なのか？」

その様子を見ていたジャックが、ティアに言った。

「さあ～」

ティアは、横目でちらっと見たが、そのまま会場から歩きだす。

「別に、倒れてもいいじゃない。変わりは、いくらでもいるわ」

「しかし…あれ程の歌手だぞ」

「あれくらい…見つけられる。歌手になりたいやつなんて、いっぱいいるわ」

ティアは、平然と歩いてくるＫＫに微笑んだ。

「ただ歌いたい。歌が好き…有名になりたい…って、バカは世界中にいるわ。だけど…」

ティアは、ＫＫに走り寄った。

「彼は、一人だけよ」

ジャックは、ティアとＫＫを見ながら、耳栓を取った。

「音楽は、使い捨てか…」

ジャックはタバコを取り出し、口にくわえた。

「まあ…金になればいい」

火をつけ、煙を吐き出した。

アメリカの音楽シーンは、騒然となりながらも、
誰も文句は、言わなかった。
あまりの狂信的な人気と、狂信的なファン。
志乃を聴きにいく人々に、注意を促したロックシンガーが、
自宅近くで襲われるという事件が起こったのだ。
それは、一度だけではなく…。
通報で、駆けつけた警察の発砲。
それは、銃をもったファンとの、銃撃戦にまで発展した。
ティアは、その事件を伝えるテレビを見て、せせら笑った。
「もっとやり合ったらいい」
ティアは、テレビに映るファンも、警官も睨んでいた。
「あたしたちの国は、もっと撃たれているわ」
ティアの隣で、無表情にテレビ画面を見つめるＫＫ。
ティアはそっと、ＫＫの手に自分の手を添えた。
「あなたは、何も気にしなくていいの」

ティアは、ＫＫの肩にもたれた。

「ただ、サックスを吹くだけでいいの」

ＫＫは、何もこたえない。

ただ画面を、見つめ続けるだけだ。

明日香が、ニューヨークに着いた時には、もうコンサートは終わっていた。

真っ直ぐに、サミーのスタジオへと向かう。

スタジオは、騒然となっていた。

何人か、明日香が知っているミュージシャンがいた。

明日香が、スタジオに入ると、一斉に近づいてくる。

「明日香…あれはなんだ…？」

「あの音は…」

「あれは、人間が出したら、ダメな音だ」

「その場にいたら、危険だと感じ…みんなで逃げたよ」

ちゃんとした耳を持つミュージシャンは、本能的に危険を感じたらしい。

「明日香…」

ミュージシャンの輪の中から、サミーが出てきた。

「あれは多分…啓介だ…感覚はちがうが…音色は、やつのものだ…」

サミーの体は、震えていた。

「恐ろしい…恐ろしい音だ…」

「サミー…」

「だけどな…明日香…」

サミーは震えながらも、笑っていた。

「恐ろしいくせに、また聴きたいと思ってる…俺の耳が…俺の体が…聴きたいと…」

他のミュージシャンもみんな、頷く。

サミーは明日香を見つめ、

「それが…恐ろしい」

口は笑いながらも、目の奥は怯えていた。

「明日香…かかわるな…やつに…。わかってるはずだ…」

サミーは、明日香を見つめ、

「お前では、啓介に勝てないと…」

日差しがこぼれる中、

香里奈は、体育館に向かった。

今日は土曜日。

そして、里緒菜と直樹たちの発表会が、ある日だった。

香里奈は、恵美と祥子と一緒に、会場に入った。

広い体育館は、三分のニが、もうすでに人で埋まっていた。

3人は、真ん中より少し前の席に座った。

「結構入ってるなあ」

恵美は、周りをキョロキョロと見回した。

「そうだね」

祥子が、相づちをうつ。

香里奈は、体育館に入ってきた和也の姿を見つけた。

和也も、香里奈たちに気づいた。

目が合ったが、

和也は、一番後ろの席に座った。

体育館に、劇が始まるアナウンスが流れた。

離れて座る和也を、訝しげに見ている香里奈に、気づいた祥子。

「もう始まるわよ。香里奈ちゃん」

「ああ…」

香里奈は、前を向いた。

ゆっくりと幕が上がり、

劇が始まる。

舞台の上に、

互いに背を向けた…

里緒菜と直樹。

これは、互いに惹かれあいながらも、

すれ違う恋人たちの物語だった。

互いに動かない二人。

やがて、

伏せみがちな瞳のまま、

里緒菜が振り返る。

「あたしはただ…あなたを見つめていたかっただけ…」

約1時間半に渡る劇は、終わった。

里緒菜と直樹が演じる二人は、

ハッピーエンドを迎えた。

「これが…こたえか…」

和也は、席を立った。

現実とは違い…

役は役。

きっちりと役を演じきった里緒菜に、拍手したかった。

劇が終わったら、幕を引き、役者は、舞台から降りなければならない。

「そうだよな…」

和也は歩きながら、舞台に手を上げた。

（俺も、降りなければならない）

和也の思いは、決まった。

「よかったね」

「感動したあ」

祥子と恵美が、楽しそうに、今見た劇の感想を言う。

そんな中、

香里奈だけは、無言で席を立ち、歩き出す。

「ちょっと香里奈ちゃん！」

「どこ行くんだ？」

香里奈は、二人に振り返り、

「ごめん…あたし…先、帰るね」

「里緒菜に、会わないのか？」

恵美の言葉に、香里奈は頷き、

「ごめん…」

「飯田くんもいるよ」

祥子が言ったが、

香里奈は、体育館を出ていった。

外に出ると、

香里奈は、胸を押さえた。

胸の奥が、酷く痛んだ。

里緒菜と直樹…。

二人は、演技に見えなかった。

特に、里緒菜。

激し過ぎる気持ちのぶつけ合いは、

演技に思えなかった。

香里奈は、その演技に魅せられながらも、

激しい嫌悪感に、おそわれていた。

それが、嫉妬だと…

香里奈は、気づかなかった。

「やればできるじゃん」

舞台を降りた里緒菜に、美奈子は微笑んだ。

「部長のおかげです」

里緒菜は、頭を下げた。

「やめろよ。そんなこと…お前は、役者の才能があるんだから…」

美奈子は照れたように、鼻の頭をかいた。

「里緒菜！」

体育館の舞台袖に、祥子と恵美がやって来た。

「祥子、恵美！」

「よかったよ！あんた」

「最高！」

「来てくれたんだ！ありがとう。二人！」

3人は、ひとしきり抱き合った。

「香里奈は？」

里緒菜の問いに、二人は目を見合わせ、

「来てたんだけど…」

「先に帰っちゃった…」

3人の会話を聴いていた直樹は、

3人の輪に入ってきた。

「速水さんは、帰ったの？」

祥子は頷き、

「うん。何か…よくわかんないけど…」

「気分が悪そうだった…」

2人の言葉をきいて、

「そうか…」

直樹は、心配そうに、つぶやいた。

その横で、里緒菜は……直樹の横顔を見つめていた。

数多くのライブを、こなした志乃たちは、

すぐに、日本へと向かう飛行機に詰め込まれた。

まるで、荷物のように。

激しく息をしながら、席に押し込まれた志乃は、ただ宙を見つめ、

つぶやいた。

「香里奈…」

「わかってるはずだ！お前では、啓介に勝てないと」

サミーの言葉に、明日香は悲しく微笑んだ。

「そうかもね…」

「お前と啓介の音は、対照的だから…うまく融合する。だから、啓介はお前と組んだはずだ」

明日香は、視線を前に向けた。

「そうだったわね…」

「お前じゃ…飲み込まれるだけだ！」

「それでも！」

明日香は叫んだ。

「あたしは、行かなくちゃならない。啓介の妻だから」

「明日香…」

「今は…あの人に勝てる歌手は、いないかもしれない…だけど、あたしはやらなければならないの」

明日香は振り向き、サミーを見つめた。

「ありがとう、サミー…。でも、あたしが止めなきゃ…」

「明日香…」

「あたしには…あの人が、苦しんでいるように思うの…だから、絶対…行かなきゃ…」

明日香は微笑みながら、スタジオを後にした。

日本に着いた志乃たちは、ティアとジャックたちとともにいた。

空港の雑踏の中、

志乃は、人混みに紛れることに、成功した。

ライブが終わってから、飛行機に乗って降りるまで、しばらく時間があった。

ＫＫの音の呪縛から、少し逃れることができた。

無理なライブを、重ねたことにより、
ボロボロになった体の痛みが、正気に戻していた。

志乃が、いなくなったという報告は、
ティアとジャックのもとに、すぐ届いた。

「何!?」

驚くジャックとは逆に、
涼しい顔のティア。

「どうする?」

ジャックは、ティアを見た。

ティアは鼻で笑い、

「別にいいじゃない」

「だけど、ボーカルはいるだろ」

「あんな壊れかけの人形…別にいらないわ」

ティアは、そのまま歩きだす。

ジャックはため息をつくと、

「やれやれ…」

何とかなるかと、自分を納得させ、歩き出した。

全力で、タブルケイに走って帰った香里奈は、

そのまま二階に上がった。

「おかえり」

仕込みをしていた里美の前を、疾風のように走り過ぎた香里奈。

里美は、首を捻った。

気になったが、仕込みから目が離せない。

「何かあったのかしら…」

つけていたラジオから、臨時ニュースが流れた。

「今日未明…アメリカから帰国した歌手の天城志乃さん…２０歳が、空港内で行方不明になりました。その為、本日予定していたコンサートは、急きょキャンセルされることになりました。関係者が語る

ことには…」

里美は、眉をひそめた。

「行方不明…？」

いきなり、

店の扉が開いた。

「すいません。速水さんいますか？」

入ってきたのは、直樹だった。

「あら、飯田くん。香里奈だったら、上よ」

里美の返事に、二階に上がっていいのか…戸惑う直樹。

「ただいま！」

近くに、遊びに行っていた和恵が、帰ってきた。

直樹を追い越す。

「和恵ちゃん！香里奈、呼んで来て！」

里美は、和恵に告げた。

「はあい！」

素直に返事して、和恵は二階に上がっていく。

「お姉ちゃん！」

しばらくして、香里奈が降りてきた。

直樹と目が合い、

バツが悪そうに、香里奈は目をそらした。

「速水さん…」

香里奈は、直樹を見ないようにしながら、

「外いこうか」

香里奈は、裏口に出た。

直樹も続いた。

外に出ると、すぐに直樹はきいた。

「速水さん…どうかしたの？一人で帰って…」

「別に…ちょっと、体調が悪かっただけ…」

香里奈は、視線を合わせずに、こたえた。本当の気持ちを、知られる訳にはいかない。

「大丈夫だから…」

「どうかしたの？」

「どうもしないよ」

目を伏せる香里奈。

直樹は一歩、香里奈に近づいた。

ビクッとして、香里奈は一歩下がった。

直樹は足を止め、

「俺が…何かした？」

「何してないよ…」

時間が止まった二人。

沈黙が続く中、

カザッと、何かが倒れる音がした。

二人は、音のした方を見た。

人が倒れていた。

香里奈には、それが誰か…すぐにわかった。

「志乃ちゃん！」

思わず叫んで、走り寄った香里奈が、抱き起こすと、傷だらけの志乃の顔があった。顔色も悪い。

直樹は店に入り、急いで里美を呼びに行った。

外にでた里美は、志乃の姿に驚いた。

「志乃ちゃん！」

志乃は何とか、目を開け、

「里美先生…」

そして、

香里奈を認め、

「香里奈ちゃん…」

ゆっくりと微笑んだ。

「志乃ちゃん…どうしたの？」

香里奈の声に、反応しながら、志乃は手を伸ばし、

香里奈の頬に触れた。

「おかしなものよね…日本に帰って…逃げたけど…ここしか、いくところが…思い浮かばなかった…」

志乃は店を見上げ、

「もう来ることはないと…思っていたのに…グハッ！」

志乃は、血を吐いた。

里美は急いで、救急車を呼んだ。

「志乃ちゃん！」

志乃は、香里奈に笑いかけ、香里奈の手を握った。

「あたし…歌では…誰にも負けたくなかった…世界一になりたかった…でも…」

話すたびに、血がでてくる。

「なれるはずがなかった…．あたしは、酷い女…」

志乃は、香里奈を見つめ続ける。

「あたしのお姉ちゃんが…死んだのも、あなたのせいじゃないのに！香里奈ちゃんのせいにした…」

「志乃ちゃん…」

「あたし…初めて嫉妬したの…香里奈ちゃんの歌に…あたしとは、レベルが違うと…」

志乃の目に、涙が溢れた。

「だから…あなたに歌うなと言ったの…。かなわないから…」

「志乃ちゃん…」

「あなたの歌が、好きだったのに…ごめんね…」

志乃の手に、力が入る。

「香里奈ちゃん…もう歌っていいの…。あたしのことは気にせずに…自由に歌っていいの…」

遠くから、救急車のサイレンが近づいてくる。

「あなたの歌は、最高よ。誰にも負けない」

救急車が止まった。

「あなたのお父さんにも…だから…歌って、香里奈…」

救急隊員が、タンカーを持って、現れた。

「けが人を運べ」

「香里奈ちゃん…歌って…聴かせてほしい…あなたの歌を…」

タンカーに乗せられても、

救急車に乗るまで、

志乃は、手を離さなかった。

消えていく救急車を、見えなくなるまで、見送った香里奈。

完全に見えなくなった後……そばにいた直樹の胸の中で、泣き崩れた。

店を閉めて、病院まで付き添った里美。

意識を失っている志乃は、治療を終え、

今は、ベットに横たわっていた。

身寄りがない志乃。

里美は医者に呼ばれ、診察室にいた。

身元引受人は、里美となっていたからだ。

医者は、ディスクから振り返り、厳しい表情を向けながら、

「過労です。体が衰弱していますが…何日か休んだら、体力は回復するでしょう」

里美は、ほっと胸を撫で下ろした。

しかし、医者の厳しい表情は、変わらない。

「ただし…」

「ただし…？」

里美が聞き返した。

医者は視線をそらし、
ディスクに向かった。

「先生…」

医者は、レントゲン写真を見つめ、

「声帯が、ボロボロになっています。あまりにも、激しく、酷使し続けたからでしょう…これはひどいです」

「先生…どういう意味です…」

「治りますが…もう以前のように、歌うことはできません。普通の会話程度は、支障はないでしょうが…」

「先生！何とかならないのですか！」

里美が叫んだ。

「この子は、歌手なんです！」

医者は、首を横に振り、

「ここまで…声帯がボロボロでは…どうしょうもないです」

「里美おばさん！」

里美が病院から帰ると…営業をしていない、暗い店内に、香里奈と直樹がいた。

里美が、扉を開けた瞬間、香里奈が駆け寄ってきた。

「志乃ちゃん…大丈夫なの？」

里美は頷き、

「しばらく休んだら、元気になると思うわ」

「よかった…」

香里奈は、ほおっと胸を撫で下ろした。

里美は直樹を見、

「飯田くん。遅くまでいてくれて、ありがとうね。もう大丈夫だから」

直樹はその言葉をきき、素直に頭を下げ、

「じゃ…帰ります」

店を出ようとする直樹を、香里奈が止めた。

「飯田くん！」

直樹は振り返った。

「今日はごめんなさい」

直樹は、頭を下げる香里奈に笑いかける。

「謝ることはないよ」

直樹は、扉を開けた。

「じゃあ…失礼しました。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

もう一度、香里奈に頭を下げると、直樹は帰ってしまった。

次の日、

テレビは大々的に伝えた。

志乃の引退を。

驚く程、早い動きだった。

テレビの中で、大輔と他のメンバーの会見が、始まった。

大輔が話し出す。

「突然の不幸な病気により、志乃は、歌えなくなりました」

数多くの記者が、大輔たちの前に座る。

「しかし、悲しむことはない」

大輔は、テレビカメラを真っ直ぐ見つめ、

「あなた方は…この世に、どれ程の歌手が、生まれているかご存知ですか？毎週必ず、どれ程のヒット曲が生まれているのか！毎週、絶対にナンバー1の曲は、できるのです」

大輔は微笑み、

「しかし…皆さんは覚えていますか？1ヶ月前のナンバー1を！一年前のヒット曲を！そして、それを歌っている歌手を！」

大輔の目が、妖しく光る。

「我々がほしいのは、今だけのナンバー1歌手ではなく、必ず決まるナンバー1ではなく…永遠に残る歌手。流行をこえた存在！」

大輔は立ち上がり、

「残念ながら…志乃は、なれなかった」

大輔は両手を広げ、

「志乃だけじゃない！今いる、ほとんどの歌手がなれはしない！」

テレビを見ていた里美は、違和感を感じていた。

「大輔…」

画面に映る大輔の表情…目つきは、

里美の知る大輔では、なかった。

大輔は両手を広げながら、

「我々は、次のレベルの歌を、あなた方に聴かせることができる。志乃さえも、忘れさすような声を！」

記者の中から、質問が飛ぶ。

「誰か…新しいボーカルが、もう決まってるのですか？」

大輔は頷く。

「それは誰ですか？」

「しかし…志乃さんが倒れて、すぐに新しいボーカルを発表するなんて…不謹慎じゃないんですか？」

記者たちは頷く。

大輔は席に座ると、鼻で笑った。

「音楽は、感傷でするものではない」

「そんなに自信があるんでしたら…歌手は誰です。有名な人ですか？」

「今のシーンにはいない…」

「新人…ですか？」

「新人…世に出てないという意味なら。しかし、彼女は生まれながらに、歌手だ」

「誰なんです」

「安藤理恵…」

大輔の呟きに、

記者がざわめく。

「河野和美」

記者たちは、その名に驚いた。

二人とも、世界中で成功し、

日本人で、数少ない成功した歌手だ。

今は亡き…伝説のシンガーたち。

「彼女たちの血縁者ですか?」

「だとしたら…もう1人いますね。速水…」

「速水明日香…」

大輔は、憎々しく呟いた。

「そうだ!速水さんがいますね」

記者の言葉に、大輔は激しく反応し、

音をたてて、席を立った。

「速水明日香以上ですよ。彼女の娘は…」

「速水さんの娘!」

一斉に声が上がる。

「そう!我々の新しいボーカルは、速水香里奈だ!」

それは、誰も予想にしていない名前だった。

勿論、本人も。

大輔の会見を、近くで眺めていたティアは、

ニヤッと笑った。

「これで逃げれない…わね？」

ティアは、そばに立つＫＫの方を見た。

ＫＫに返事はない。

「あなたの音に耐えれるのは…あなたと同じ血をもつ者だけ」

ティアは、ＫＫにそっと寄りかかり、

「これで…最終段階に入る」

ＫＫは、そんなティアを無視するかのように、ティアから身を離すと、

その場から、歩きだした。

「ＫＫ！」

ティアは、後を追いかけるしかできなかった。

昼間の会見だった為、
当然、香里奈は見ていなかった。
しかし、
どこからか、情報は回る。
携帯電話からだろうか。
二限目の授業を終えた香里奈のもとに、
その内容は伝わった。
「速水さん！あなた…志乃ちゃんのかわりをするの？」
あんまり面識のない、他のクラスの女の子が、教室に飛び込んできた。
香里奈は首を傾げた。
「何のこと？」
「え？…さっきテレビで…」
香里奈の反応の悪さに、女生徒はたじろぐ。
「どういうこと？」

逆に、女生徒に香里奈はきいた。

女生徒の話をきいて…驚いたが、

納得した。

動きだしたのだ。

父が。

あたしを呼んでいる。

事態は飲み込めたが…まさか、テレビで言うとは。

香里奈は…次に、どうしたらよいのか、わからなかった。

ＫＫの足取りを追っていた明日香は、

いち早くネットで、そのことを知った。

最初から、志乃は捨て駒だったのだ。

日本で有名である彼女を使って…、

狙いは、香里奈だったのだ。

急いで、日本に戻らないといけない。

もし、啓介に対抗できる者がいるとすれば、

香里奈だけだ。

しかし、

音楽から遠ざかっている彼女を、サポートするものがいない。

啓介と香里奈は、音楽家としたら、性質は同じだ。

今、利用され、使われるわけにはいかない。

最高の原石を壊すだけだ。

明日香は、日本に帰る便を探した。

「どういうことなの？」

放課後。

屋上に集まった香里奈たち。

祥子が、香里奈に詰め寄った。

「わ、わからない…何が何なのか…」

香里奈は後ずさる。

「天城志乃は、知ってたの？」

金網にもたれた里緒菜が、きいた。

香里奈は頷く。

「でも、もう何年も会ってなかった…」

香里奈は、ちらっと直樹を見た。

少し離れたところにいる直樹は、黙っていた。

「今大人気だった志乃が、引退ってだけで、騒ぎになってるのに…」

「新しいボーカルが、決まったなんてことになったら…」

祥子と恵美の言葉を受けて、里緒菜が続ける。

「少なくっても、大騒ぎになるわ。学校には来てないみたいだけど…あんたの家は、危ないんじゃない」

香里奈ははっとし、

「うちに電話してみる」

携帯を取り出し、ダブルケイにかける。

なかなかでない。

やっとつながった。

「あっ！里美おばさん」

携帯の向こうから、激しい騒音が聞こえる。

「香里奈！あんた、しばらく家に帰ってきたらダメ！凄いマスコミの数！」

里美は扉の鍵を閉めながら、

「今日は、営業もできないわ」

里美は裏口に走る。

向こうも鍵をかけないと。

「亜希子おばさんに、連絡したから…今日は、もう一つの家に泊まりなさい」

電話を切った香里奈は、ため息をついた。

「家…マスコミで、いっぱいみたい」

「速水さん…」

直樹が心配そうに、香里奈を見た。

「大丈夫！今日は、店じゃなくって…他の家に帰るから…」

「他に家なんてあるの！」

祥子と恵美が、思わず声を荒げた。

香里奈は薄ら笑いを浮かべながら、頷いた。

「昔…小さい時、ちょっとだけ…住んでたの。ママとパパ、あたしの三人で…」

「へえ～」

感心する二人。

「その方がいいわね」

里緒菜も頷くと、

「あまり目立たない方がいい」

香里奈はまた、ため息をつくと、

「何で…こんな苦労しなくちゃならないのよ」

香里奈は、下に置いていたカバンを手に取った。

「もう帰る」

香里奈は、歩きだした。

どうせ家は、店と反対方向にあるため、みんなとは方向が違う。

「香里奈!」

去っていく香里奈を、里緒菜が呼び止めた。

振り返る香里奈。

里緒菜は、香里奈をじっと見つめ、

「あんた…歌…やるの?」

香里奈は足を止め、

「あたし…」

口ごもる。

「志乃さんの代わりとかじゃなくて…自分が、音楽をやる気になったの？」

「あたし…」

香里奈は、視線を落とした。

音楽をやる…。

考えてなかった。

でも…。

歌って…。

志乃の言葉。

腕を見ると、思い出す。

血を吐きながら、香里奈をつかんだ…

志乃の力を。

香里奈は、里緒菜の目を真っ直ぐ見返した。

素直になろう。

自分の心に。

香里奈は頷いた。

「音楽やるわ」

香里奈の言葉は力強い。

拳を握りしめ、

「楽器とかできないけど…歌はできる。歌える…歌いたい！」

香里奈は叫んだ。

里緒菜は腕を組み、微笑んだ。

「香里奈の歌。楽しみにしてる」

「期待しといて」

香里奈は前を向き、歩きだした。

「送るよ」

直樹が後を追う。

香里奈は思った。

歌いたい。

志乃の言葉で、香里奈は解放された。

それは、香里奈の目覚めの瞬間だった。

K

マンションの前まで来た。

「じゃあ、帰るね」

直樹は、バイトに行かなければならないのに、駅から離れたマンションまで送ってくれた。

「飯田くん！」

帰ろうとする直樹を、香里奈は呼び止めた。

振り返る直樹。

「送ってくれてありがとう…」

直樹は苦笑し、

「当然のことだよ…一応彼氏なんだから」

「あ、ありがとうは、それだけじゃなくて…」

香里奈は少し照れ、視線を外しながら、

「いつもありがとう」

少し驚く直樹。

「どうしたの？」

直樹は心配そうに、香里奈にきいた。

いつもと雰囲気が違う。

「あ、あたしたちって…付き合ってるに…まともなこと…デートとかもしたことないじゃない…」

直樹の驚きは、終わらない。

「襲われたり…騒動になったり…」

「でも、それは速水さんのせいじゃないし…」

「だから…あ、あのさ…」

香里奈は口ごもる。

「え、え…」

しばらくして、

「もおっ！」

地団太を踏むと、香里奈は真剣な顔で、直樹を見、

「気をつけて帰ってね。ナオくん」

それだけ言うと、マンションに走って逃げた。

直樹は、しばらく放心状態になった後、
歓声を上げた。

ドアの前に、亜希子はいた。

「わざわざすいません！」

香里奈は駆け寄る。

「久しぶりね。香里奈ちゃん」

亜希子は、笑顔で迎えた。

「あたしが、店に入らなくなって…もう7年くらいになるかしら」

「あたしがまだ…小学生でしたから…」

亜希子は、啓介の母一恵子の妹だった。

一時期、ダブルケイを手伝っていたが、
歳が歳なゆえに、7年前に引退していた。
今は、家庭で家事に専念している。

「たまに来て、掃除はしてるんだけど…」

香里奈は、鍵を受け取った。

ドアを開け、中に入る。

記憶の中と、まったく様子は変わっていなかった。

家の中を、懐かしそうに見渡す香里奈の横顔を、

亜希子は見つめ、

「詳しいことはわからないけど…香里奈ちゃん…気をつけてね」

香里奈は頷いた。

「大丈夫です！何とかなります」

亜希子も、家の中を見回した。

居間にあるソファ。

あそこに座っていた姉である恵子と、

まだ小さかった啓介。

そして、

啓介と明日香。

小さい香里奈。

香里奈が、振り返る。

「おばさん」

亜希子は、はっとした。

振り返った香里奈は、今の香里奈だった。

「本当にありがとうございました」

亜希子はフッと笑い…その後、微笑んだ。

「いいのよ。香里奈ちゃん」

亜希子の視線の向こうに、何枚かのＣＤがあった。

「ここに入れば、あなたのおばちゃんたちが、守ってくれるわ」

亜希子は、ＣＤラックに近づき、二枚のＣＤを取り出した。

「よければ、これ…聴いてあげて」

香里奈に差し出した。

「これは…？」

「あなたのおばちゃんたちのアルバムよ」

「おばちゃんたち…」

香里奈には、二人のおばちゃんがいた。

二人とも会ったことはないが、明日香からきいていた。

速水恵子と、

安藤理恵。

どちらも歌手だった。

渡された二枚は、

恵子のダブルケイと、

安藤理恵のＬｅｔ　Ｍｅ　Ｌｏｖｅ　Ｍｅだった。

二人の歌手。

亜希子が帰った後、

香里奈はそっと、ＣＤをかけることにした。

二人の女が歌う物語を。

「どういうことなんだ！」

会長室で、受話器を握り締め、光太郎は叫んでいた。

「歌手がいきなり、引退するとは…契約がちがう」

志乃のアメリカデビューのバックアップと、広告料に、スポンサーとして、莫大な資金を投入した時祭グループは、もとを取り返す前に、

志乃の引退により、大損をするかもしれなかった。

それだけではなく、

跡取りとして考えていた孫の香里奈を、世間にさらすことになった。

レコード会社も、戸惑っているようで、まともな回答がかえってこない。

受話器を叩ききった光太郎は、舌打ちした。

その時、

扉が開いた。

「失礼します。お呼びでしょうか？」

会長室に入ってきたのは、

和也だった。

和也の顔を見た瞬間、光太郎は、烈火の如く怒った。

「お前は一体何をしている！香里奈とは、どうなったんだ！」

和也に詰め寄る光太郎。

和也は無表情で、光太郎を見つめ、

「別に、何もしておりません」

その答えに、怒りを露わにする光太郎。

「香里奈を、口説けと言っただろ！」

「言われましたが…無理です。また、する気もございません」

「何だと！貴様！」

光太郎の剣幕を無視して、和也は言葉を続けた。

「会長と速水さん…いえ、速水明日香さんとの関係を調べさせて貰いました」

「何ぃ！」

「籍は、入れてらっしゃらないが…会長の娘さんですね」

光太郎の表情が変わる。

「公にはなっていませんが…家の者は、みんな知ってましたよ」

和也は姿勢を正すと、

深々と頭を下げ、

「親戚である香里奈さんを、落とす気にはなれません…すいません」

「き、貴様…」

「命令を、きけないからには…覚悟は決めてきました」

「覚悟だと」

「はい」

和也は、深々と頭を下げ、

「今まで、お世話になりました」

光太郎は鼻で笑い、

やがて、

爆笑した。

「何を言っている。お前たち親子は、この会社がほしいんだろ！お前たちの店を壊した、この会社が！」

今度は、和也が笑った。

「もう…いりませんよ」

「何！」

「本当は、最初から…いらなかったんです」

「本気で言ってるのか！」

「はい！」

和也は、はっきりと返事した。

「お前のモデルの仕事だって、私のコネがほとんどだぞ。そのすべてを、失うことになるぞ」

「覚悟の上です」

「今住んでるところも、私が…」

光太郎の言葉を待たず、

「でていきます」

「和也！」

「お世話になりました」

和也は、光太郎から離れると、扉へと向かった。

「お前たちは、すべてを失うんだぞ！」

和也は、光太郎に背を向けたまま、

言った。

「なくしたら、またつくればいい！他人にすがったり、奪おうとするのではなく！」

和也は、少し振り返った。

「私たちは、生きています。生きている限り、何でもできます」

そう言うと、

和也は廊下に出た。

少し立ちすくみ、息を吐く。

歩きだした足が、軽いことに驚いた。

生きていく責任は、重くなったが、
それでも、やっていける心は、十分にあった。

最初から、こうすればよかったのだ。

マンションに着いた和也は、家で待つ律子に説明した。

「いやよ！」

律子は、金切り声を上げた。

「あたしたちは、あの男にすべてを奪われたのよ！だから、あいつからすべて奪うまでは絶対に、ここを動かないから！」

狂ったように、叫び続け、

「何てことを！この親不孝者！」

ついには、その辺にあるものを、律子は和也に投げつける。

しばらく、じっと目をつぶり、

和也は避けることもせず、立ち続ける。

やがて、

投げるものがなくなり、激しく肩で息をする律子に、和也はゆっくり近づいた。

まだ物を投げようとする律子を、和也は抱き締めた。

「ごめん…母さん…」

「ううう…」

呻く律子。

和也は強く抱き締め、

「もう帰ろう…父さんのところに…」

「父さん…」

「すべてを失ったわけじゃない。俺がいるし…父さんの店に帰ろう」

律子は泣いた。

これまで、我慢していたもの－すべてを吐き出すかのように。

もう復讐に、縛られることはない。

泣き崩れる母を、

和也はただ、ずっと抱き締めていた。

静かで、やさしい時は終わった…。

気づいた時は、音楽は終わり、

時は過ぎていた。

もうこんな時間。

香里奈は座り込んでいたソファから、立ち上がり、

制服を着替えようと、タンスを開けた。

普段使っていない為、香里奈の服はない。

あるのは、恵子と明日香の服だけだ。

明日香の昔のジーンズをはこうとした…

キチキチだ…。

「ママ…細すぎ…」

Tシャツは…

大丈夫だ。

香里奈はもう一度、ＣＤをかけた。

恵子の歌が流れる。

ごはんは、亜希子が用意してくれていた。

香里奈は、味噌汁を温めながら、恵子の歌に合わせて、鼻歌を歌う。

愛や恋は、はっきりとはわからない。

でも、

歌声から、うれしさや悲しさや、切なさを感じることができた。

淡い気持ちだ。

英語の為、はっきりと歌詞はわからないが…

気持ちはわかった。

そう言えば、

里美おばさんが言ってた。

歌詞をそのまま伝えるより、言葉に込める気持ちが一番大切だと。

みんなが、歌詞カードを持ってるわけではない。

歌手は、気持ちを伝えなければならない。

歌詞の内容よりも。

香里奈が、ごはんを食べ終わった瞬間、家の電話が鳴った。

驚き、

ためらう。

（誰？）

里美なら、携帯にかけるはずだ。

亜希子おばさん…。

亜希子は、携帯を知らない。

恐る恐る受話器を取った。

「はい」

受話器の向こうで、

クスクスと笑い声が聞こえた。

「どちらさまで…」

「あなた…香里奈さんね」

受話器越しでも、声の相手がにやりと笑っているのが、わかった。

女の人だ…。

でも、話し方はきれいだが、

どこか…日本人とは違う。

香里奈は直感的に、そう感じた。

「はじめまして。私はあなたのお父さんのマネージャーをしている者よ」

ティアは、笑みがはなれなかった。

「どうして…ここの番号が…」

「あら。お父さんの家でしょ…知ってるわよ」

「な、何の用ですか！」

思わず、声が上ずる香里奈。

ティアはまたクスクス笑うと、

「お父さんからの伝言よ。明日の夕方、イエローホールで、コンサートがあるから、来てほしい…とのことよ」

「あ、明日！何、勝手なことを言ってるんですか！」
「お父さんに会いたくないの？じゃあ、待ってるからね」

一方的に、電話を切られた。
「ったく…何なのよ」
受話器を置くと、香里奈はソファに座り、そのまま、横に倒れた。
どうしたらいいのか…。
明日香は、今アメリカにいる。
里美も、マスコミ対策で忙しいはずだ。
「どうしたらいいのよ…」
しばらく、じっとしてる。

やがて、
体を起こすと、テーブルの上に置いていた携帯を、手に取り、おもむろに電話をかけた。
相手は里緒菜だ。

しかし、

「出ないよ」

香里奈はまたソファに、倒れ込んだ。

後は、祥子や恵美。

あまり…相談には向いてない。

それに、答えはわかっていた。

香里奈は、携帯を見つめていた。

一つのメモリーを。

直樹の番号だ。

電話をかけにくい。

あまり心配をかけたくなかったし、少し恥ずかしかった。

彼氏といっても、まだ実感はなく…

ただいつも…心には浮かぶけど、

何でも話せる存在になるには、テレの方が大きかった。

香里奈はため息をつくと、携帯をテーブルに置いた。

とにかく…

いかなければならない。

香里奈は心の底では、決意していた。

その時、携帯が鳴った。

受話器を置き、

ティアは妖しく微笑んだ。

その様子を横で見ていたジャックは、腕を組ながら、

「…で、どうなったんだ?」

「さあ…来るんじゃないの」

ティアは笑いながら、テーブルに置いてあったワイングラスを、手に取った。

ティアたちは、ホテルの一室にいた。

高級ホテルではないが、

大輔が手配してくれた。

レコード会社はまだ、戸惑っており、

ＫＫを認めていなかった。

しかし、

来日したＫＫを見て、レコード会社の重役の一人は、息を飲んだ。

「速水さん…」

ＫＫは、その言葉に反応を示さず、重役の前を素通りした。

昔からいる一部のレコード会社の社員は、速水啓介を知っており、

それが、志乃のいなくなったバンドを、何とか認めている理由だった。

ティアは、グラスに口をつけた。

「来ても来なくても、いいの」

ティアは、ジャックを見た。

「ＫＫの音があればね」

ティアは窓のカーテンを開け、
そこから見える街並みを眺めた。
夜だというのに、女性が一人でも歩ける街。
ティアは鼻を鳴らし、
「何て気楽な国…」
安全が当たり前の国。
それが、
当然の国。
「吐き気がするわ」
ティアは、カーテンを閉めた。

「はい！」
香里奈は慌てて、電話に出た。

「夜分、遅く…ごめん」

電話の相手は、直樹だった。

「あんなことがあったから…気になって…大丈夫だった?」

香里奈は、きちんとソファに座り直した。

「うん…大丈夫」

「やっぱり…店には、帰れなかったんだろ」

「うん。でも、昔住んでた家があったから」

香里奈も直樹も、少し間があいてしまう。

「マスコミは来てないの?」

「ここは大丈夫…」

少し香里奈は考え、

「でも…」

「でも?」

直樹は聞き返した。

香里奈は息を整え、

「今、電話があった…」

「誰から?」

「お父さんのマネージャーから…」

「お父さん…?」

香里奈は、この前の襲われた事件を説明した。

「あれも、志乃ちゃんのことも…みんな、お父さんが関係していたの」

香里奈の言葉に力が入る。

「今回のバンドに入る話もみんな…お父さんが、関係していたの」

「速水さんのお父さんは…なく」

「そう…亡くなったと思っていた。でも、生きていた」

香里奈は、目をつぶった。

「速水さん…」

香里奈は目を開け、

「あたしは…お父さんに会わないといけない…」

流れる恵子の歌声が、香里奈に絡み付く。

直樹の声が、香里奈に勇気をくれる。

ただ話すだけでも。

「なぜ、こんなことをしてるのか…お父さんに、きかなくちゃならない」

しばらく、じっときいていた直樹は、

ゆっくりと口を開いた。

「そうだね。そうしなくちゃいけないね」

直樹は、言葉を一つ一つ考えながら、

「俺は…両親と話した記憶があまり、ないんだ…だから」

恵子の歌うマイフーリッシュハートが、切なく部屋を包む。

「わからないことがあったら、直接きいたらいい。生きてるんだったら、家族だったら、親子だったら、直接ぶつかった方がいい」

「うん」

香里奈は頷いた。

「ナオくん。今度のコンサートに呼ばれてるの」

「いつ？」

「明日の夕方」

「俺もいくよ」

「ダメ。一人で行きたいの」

香里奈の決意に、

直樹は受話器越しに頷き、

「わかった。でも、会場までついていく」

直樹の口調が、強くなる。

「速水さんを守りたい」

香里奈は、直樹の言葉が、

「ありがとう」

うれしかった。

明日、香里奈は父に会う。

もう気持ちは決まった。

直樹が携帯を置くと、
すぐにまた、携帯が鳴った。
直樹は電話に出た。
「直樹」
相手は、和也だった。
「和也」
「話がある。お前には悪いんだけど…」
直樹は微笑み、
「帰ってくるんだろ。この家に」
「直樹！？」
「わかってたよ。お前が、帰ってくることは…」
直樹の言うことに驚き、
戸惑う和也。
「べ、べつに、出ていけというわけじゃなくて…」

「わかってるよ。部屋はあるし、大丈夫だ。お前とおばさんが、いつでも戻れるようにしていたしな」

「それで、一階を綺麗にしてたのか！」

和也は、思わず声を荒げた。

「食材とかは、ないけど…やる気だったら、いつでも開けれるよ」

「直樹…」

「言ってなかったけど…たまに、何人か昔のお客さんが、訪ねてくるんだぜ」

「そうなのか…」

和也は、感慨深いものを感じていた。

「いつ戻ってくるんだ？」

「明日、明後日には…」

「そうか…待ってるよ」

「お前の都合はいいのか？」

「ああ。明日は、少し出かけるけど…速水さんと…ちょっと…」

「速水」

和也はつぶやいた。

少し間をおいて、

和也は、直樹に話し始めた。

「直樹。あの子を、守ってやってくれ」

いきなり、和也の声のトーンが変わったから、

直樹は、少し驚きながら、

「うん。わかってる」

「実は…俺とあの子は、親戚なんだ」

「ええ！」

その言葉には、

直樹も思わず、声を上げた。

「俺の母さんの兄さん…時祭会長の娘が…速水明日香」

「会長の娘さん！？」

「明日香さんの娘が、速水香里奈…なんだ」

「そうだったのか！」

直樹の驚きの声を、かき消すように、

和也は、真剣な強い口調で話す。

「彼女は、いろんな陰謀に巻き込まれそうになっている。俺は、何もできなかった…。だけど、お前ならできる。彼女を、守ってやってくれ」

「心配するな！絶対守るよ」

直樹の強い口調に、和也は携帯越しに頷いた。

「ありがとう」

和也は、礼を言った。

それは、血のつながった者たちが…これ以上、不幸になってほしくなかったから。

時祭という大企業の都合に、これ以上、

誰も、不幸になってほしくなかった。

和也は、直樹なら香里奈を守れると、信じていた。

次の日、

小さな荷物を持って、律子と和也は、久々に戻ってきた。

我が家に。

荷物を置き、カウンターに座った律子は、しばらくは……ただじっと店内を眺めていた。

和也は、そのそばで、律子を見守っていた。

どれくらい時がたっただろうか…。

じっと座って、動かない律子の目に涙が流れた。

「母さん…」

「ここは…変わってないのね。まるで、時が止まってるみたい」

律子は立ち上がり、カウンターの中を見た。

「綺麗にしてある…」

「直樹が、いつも掃除してくれていたみたいだ」

「そう」

律子は微笑み、店内を歩き出した。

「ちっとも変わってない…」

「ああ。変わってないよ」

「お父さんが、待っててくれたのかしら…」

「ああ…待ってたんだよ」

「和也」

律子は、和也を見た。

「お母さん…やってみようかしら」

律子は微笑み、

「お店を」

「そうだよ。やった方がいい」

和也は、頷いた。

「もう何年もやってないから…ちょっと準備に、時間がかるかも」

「手伝うよ」

和也は嬉しかった。

母の笑顔を見るのは、何年ぶりだろう。
この笑顔があれば、何でもできる気がした。

授業が終わり、
香里奈は、大急ぎで教室を飛び出した。
「香里奈ちゃん！」
祥子が呼び止めた。
「どこいくんだ？」
いつのまにか、恵美が香里奈の前にいた。
「お前。朝から、様子がおかしかったぞ」
「そ、そうかな…」
香里奈は、目をそらした。
「今日、コンサートあるわよね」

里緒菜が、徐に席を立った。

そして、香里奈の前まで歩いてきて、がっと香里奈の腕をつかむと、

そのまま、連れて行く。

「ちょ、ちょっとお！」

反対側を、恵美がしっかりカードする。

香里奈は、拉致された。

その様子を見ていた直樹は、彼女たちの後を追った。

香里奈が、連れていかれたのは、いつもの屋上だった。

「香里奈！あんた、何か隠してるでしょ？」

里緒菜が、詰め寄った。

「べ、別に…」

香里奈はまた、目をそらす。

「あんたは、態度に出やすいの」

恵美も詰め寄る。

香里奈は後ずさる。

「べ、別に…何でもないよ…」

「香里奈！」

里緒菜が凄んだ。

「速水さんは、コンサートに呼ばれてるだ」

屋上の扉を開け、直樹が入ってきた。

「ナオくん…」

里緒菜が、つぶやいた。

「あんたには、関係ない！これは、あたしたちの問題だ！」

恵美が叫んだ。

「香里奈ちゃん！コンサートなんて、行く必要ないよ」

祥子が言った。

「行かなくちゃならないだ」

直樹の前に、里緒菜が立つ。

「どうして？」

直樹は、真っ直ぐ里緒菜を見据え、

「そこに、速水さんのお父さんがいるから…」

直樹の言葉に、

「ええーっ！」

恵美と祥子が声を上げた。

「香里奈ちゃんのお父さんって…死んだはずじゃ…」

「生きていた。だから、会いに行かなくちゃならない」

「香里奈！」

里緒菜が、香里奈の方を見た。

香里奈は、こくりと頷いた。

「多分、会場はマスコミなどで、すごいことになってると思う」

直樹は、香里奈と3人の間に入り、

「もし、その会場に、みんながついてきたら…みんなに、迷惑がか

かるかもしれない。速水さんの友達だとわかったら、何をきかれるか…わからない」

「香里奈…」

恵美と祥子は、香里奈を見た。

「ごめんなさい…あたしもわからないんだ。どうなるのか…」

香里奈は、少しうなだれながら、話す。

里緒菜は、直樹の方を向いた。

「ナオくんは、ついていくんでしょ？」

直樹は頷き、

「会場の入り口まで…入れるところまでは」

里緒菜、はため息をつくと、

「わかったわ。いってらっしゃい！」

里緒菜は、出入り口の扉に歩き出す。

「里緒菜！」

香里奈が叫んだ。

里緒菜は立ち止まり、振り返った。

「もうとめない。だけど、ちゃんと明日は、学校に来て」

「うん！」

香里奈は頷いた。

「香里奈…本当に大丈夫か？」

恵美は心配げだ。

「携帯ずっと、握り締めてるから。何かあったら、すぐに電話してね」

祥子が…。

みんな、心配してくれている。

香里奈は、その気持ちを力にして、

頑張ることを誓った。

学校から、電車を乗り継ぎ、

イエローホールのある地下鉄の駅で降りた。

地上にでると、ものすごい人並みに、香里奈は驚いた。

こんな人混み…。

夏の花火大会以外、知らなかった。

「こっちだ」

直樹が示す方は、会場の裏口だった。

人混みは、香里奈を知らない。

ネットで、流出した写真は別人だったし、

直樹と二人でいる為、カップルで、コンサートを見に来たようにしか見えない。

広い会場の周りを探し回り、やっと香里奈たちは、

関係者用の通用口を見つけた。

二人は頷き合い、

通用口に近づく。

しかし、ガードマンが二人を止めた。

「何の用だ?」

「えっと、ぼくたちは…」

直樹が、何か言おうとしたとき、ガードマンは、香里奈の顔を覗き込んだ。

胸のポケットから、１枚の写真を取り出し、

香里奈の顔と、交互に見比べる。

香里奈が写真を見ると、

見たことのない自分の写真だった。

「失礼しました。どうぞお入りください」

香里奈は、ガードマンに促される。

ついていこうとする直樹は、止められた。

「ここからは、関係者以外は立ち入り禁止です」

冷たい言葉だった。

店内の電気を付け、カウンター内の食器をチェックしていた和也は、

奥の棚にあるテレビに、気づいた。

「まだつくのか？」

カウンターを出て、テレビの横に置いてあるリモコンを手にとり、電源を入れた。

「只今、会場の外は、大勢のファンが詰めかけています」

テレビはすぐについた。

「人気歌手、天城志乃さんの突然の引退…そして、新しいボーカリストの発表により、ファンの間では賛否両論が飛び交っています」

「コンサート…」

和也は、画面を見つめた。

「天城志乃さんが、所属するバンドはもともと、世界中で、有名なバンドでした…そこに天城さんが参加し、彼女は、有名になりました」

レポーターのバックには、志乃の写真を掲げ、

コンサートに反対しているファンの姿も、映っている。

「しかし、昔からのファンに言わせますと。天城さんいない今のバンドこそが、もともとの姿であると」

カメラが動き、会場の周りを映す。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕと書かれたボードを持つものもいる。

「まだ未確認ですが…現在のメンバーには、今、世界中を騒がしている人が、参加しているという情報があります」

レポーターが、何かを受け取った。

「只今、入った情報によりますと、新しいボーカリストが、会場に入った模様です」

「繰り返します。たった今、新しいボーカリストが、会場入りした模様です！」

「速水…」

和也がつぶやいた。

「会場が今、開きました！人が、なだれ込んでいきます！」

「和也」

二階にいた律子が、降りて来た。

「直樹くんはまだ、帰って来ないのかい？」

和也は、テレビを消した。

「母さん…」

和也は、消えたテレビ画面を見つめ、

「ちょっと出かけるよ」

「どこにいくの？」

「直樹を、迎えに行ってくる」

和也はそう言うと、店を飛び出した。

走りながら、携帯をかける。

「あなたに、頼みがある！」

「何の用だ？お前とは、縁を切ったはずだ」

和也は、携帯に向かって叫んだ。

一人…会長室にいた光太郎は、窓の外を見ながら、電話を取った。

夕陽が沈み、夜が訪れる。

「あなたのお孫さんの話です！お孫さんを、助けたくはないですか！」

受話器の向こうで、和也が叫んだ。

「孫か…」

光太郎は苦笑すると、

目をつぶり、

「お前の…好きにしろ」

呟くように言うと、電話を切った。

少し間をあけて、

光太郎は、徐に受話器を取り、電話をかける。

「すいません…時祭ですが」

用件を一方的に、話すと、光太郎は、受話器を置いた。

再び窓に向かい、街並みを見下ろしながら、

胸ポケットから、写真を取り出した。

「千春…」

あどけない笑顔を見せる…

出会った頃の少女の女。

光太郎は、写真をまたポケットにしまうと、

「私たちの孫を、助けてやってくれ」

この窓の向こう、

遠く離れた場所にあるはずの、

会場を見つめた。

関係者専用入り口の前で、立ち尽くしていた直樹の携帯が鳴った。

「和也…何かあった?下の店は、よくわからないから…」

「そんなことは、後でいい!お前、今…速水といっしょか!」

和也の声が、荒げている。

走っているからだ。

「今、離された。俺は、関係者の通路に入れなかった」

「そこにいろ。動くなよ」

和也は、地下鉄の階段を上がると、

会場までの人混みをかき分けながら、走る。

もう開場しているはずだが、チケットを手に入れられない人が、大勢いるのだ。

「和也！」

人混みの向こうで、大きく手を振る直樹。

「直樹！」

和也は、全力で走る。

「どうしたんだ？こんなところまで…」

直樹の言葉を遮り、

「時間がない。行くぞ」

和也は、関係者専用出入り口の前にいるガードマンに、

「このコンサートのスポンサーをしている、時祭コーポレーション

の者です」

和也は、まだ返していなかったＩＤカードを見せた。

「本社から、連絡がきているはずですが…」

ガードマンは訝しげに、入口にある電話をかけた。

しばらくして、

ニコニコした顔で、

「お二人様ですね。どうぞ、お入りください」

「いくぞ」

和也は、直樹に予備のＩＤカードを渡すと、中に促した。

「ああ…」

直樹が、出入り口に入った途端、

凄まじい歓声が上がった。

その歓声さえ、

切り裂くような…

サックスのブロウが轟いた。

「直樹！この音を聴くな。音を意識するな」

直樹は、体を震わした。

何か異質なものが…体に入ってくるような感覚。

「うわさではきいていたが…」

和也は、額の汗を拭った。

「これは…」

二人は、通路を歩きながら、

「音のドラッグ…と言われている」

「音のドラッグ…」

「欲望が強い者、心が病んでる者の…心を蝕むようだ」

「この音が…」

「普通の精神のやつは、すぐには、効かないらしい」

和也は、直樹に微笑み、

「お前は、大丈夫だよ」

「和也」

和也は直樹を見、

「俺も大丈夫だ…お前のおかげで」

「和也…」

「急ぐぞ」

二人は、ステージに向かって走った。

「あら。遅かったわね」

ステージの横まで来た香里奈を、見つけたティアは、嫌みぽく微笑んだ。

ティアの後ろを、バンドのメンバーが通る。

ステージへと向かうのだ。

その中に、ＫＫがいた。

虚ろな瞳の癖に、なぜかギラギラしていた。

香里奈は、ＫＫの横顔を見送った。

「あなたは、途中で参加したらいい。あなたの好きな曲を、歌ったらいいわ。彼らは、何でも合わしてくれるから」

会場は、拍手とブーイングが激しかった。

ティアは、笑いが止まらない。

「こういうバカな観客の方が、壊れやすい」

ＫＫは、観客の反応はお構いなしに、

サックスをくわえた。

音が溢れ出た瞬間、

会場が揺れた。

ＫＫのサックスが、次々にフレーズを叩き込む。

ブーイングしていた観客の何人かが、いきなり奇声を上げると、

拍手をしていた賛成派に、殴りかかった。

少し混乱するオーディエンス。

周りの興奮状態を、目の当たりにし、

唖然とする香里奈。

「どうして…」

ティアは、鼻を鳴らすと、

香里奈を見、

「さすが娘ね…。この音を聴いても、何ともないなんて」

ティアや、他のコンサートスタッフは、特殊な耳栓をしていた。

でないと、狂いそうだ。

「それとも…」

ティアは、香里奈を見つめ、

「これを聴いて、何も感じない奴は…音楽に対する感性がないか…本当のバカか…」

香里奈は、ステージの袖から、じっと観客席を見ていた。

暴れる人。

泣く人。

頭を抱え、うずくまる人。

ただ魅せられる人。

そして、

時がたつとともに、

涎をたらし、倒れ込んでいく。

「こんなの…」

香里奈は、ティアの方を向いて、

「音楽じゃない！」

ティアを睨んだ。

ティアは、ニヤリと笑い、

「これも音楽よ。音楽は人を興奮させ、狂わせるもの」

「ちがう！もっと楽しくて、感動するものよ」

ティアはせせら笑い、

「浅い音楽しか、聴いたことがないのね」

「浅くなんてない！少なくても、志乃ちゃんの音楽は、みんなを幸せにしていた！」

香里奈は叫んだ。

「志乃…」

ティアは眉をひそめ、

少し考えて、

「ああ…あの壊れた人形ね…忘れてたわ」

「壊れた人形…」

「そうよ。ろくに使えない…人形」

「志乃ちゃんを…ひどい」

「ひどい？」

ティアは、大声で笑った。

「あんな程度の歌しか歌えない…使い捨ての流行り歌手…人形で十分よ！時期が過ぎたら、捨てるだけ。何日かしたら、新しいお人形が、歌手として発売されるわ。それを、みんなが買うだけ。壊れた…古い人形は、捨てるだけよ」

「ちがう！人形なんかじゃない！」

香里奈は、ティアに詰め寄った。

「みんな歌が好きで、ただ歌って…自分の気持ちを、伝えたり…みんなの気持ちを代弁したり、落ち込んだ時、元気になるように…歌ってるの！」

「詭弁ね」

ティアは、観客席に視線を移し、

「大部分は、ただ有名になって、金がほしいだけよ。ビジネスよ。この世の中すべては、お金で動いてるのよ」

香里奈は、ティアをじっと見据え、

「じゃあ。あなたは何の為に、音楽に関わっているんですか？」

「あたし？」

ティアは、香里奈を見ずに、

「あたしは、すべてを壊すため…さっきのあなたみたいに、綺麗事をいうバカなやつらを…壊すこと」

「壊す…」

「音楽に関わってるやつは…みんな、嫌いなの」

ティアは、香里奈に視線を移し、

「だから」

ティアは、香里奈に微笑みかけ、

「あなたも、大嫌いなの」

クスクスと笑った。

「さあ！さっさと行きなさいよ。あなたの好きな音楽と…父親のもとに」

「あなたは間違ってる」

香里奈は、ステージに歩き出す。

「間違ってる？あたしがあ」

香里奈は振り返り、

「間違ってないかもしれない…でも」

香里奈は、前を向いた。

「それが、すべてじゃない」

眩しいほどの照明が、

まるで太陽のように、降り注いでいる。

香里奈の登場とともに、演奏が終わる。

観客は驚き、

まずはＫＫを見、

次にステージに上がった香里奈に、目がいった。

香里奈は学校帰り…

場違いの制服のままだ。

アリーナから、２階、３階まで満席だ。

圧倒的な人の迫力に、

押しつぶされそうになる。

拳を握り締め、

香里奈は、久しぶりに、マイクの前に立った。

大きく息をする。

人々の視線がすべて、香里奈に向く。

「曲は？」

ギターを抱えた大輔が、香里奈に近づき、耳打ちした。

香里奈は、呟いた。

「リトル・ドリーム・…」

志乃の初期の曲であり、

彼女が初めて…歌詞を書いた曲だった。

「ＯＫ」

ぶっきらぼうに、大輔は頷いた。

ギターのカッティングから、

曲が始まる。

香里奈はさらに、
拳をぎゅと握り締めた。

空港に降り立った明日香。
やっと…日本に戻ってきた。
荷物を受け取る時間も、もどかしい。
急いで、手続きを済ませると、
明日香は、携帯の電源を入れた。
「もしもし…里美。今、日本に着いたわ」
タクシー乗り場に、向かいながら、
「香里奈はどうなったの？」
タクシー乗り場は、混んでいた。
少しいらつく。
「コンサートに行ったって！」

タクシーの数は多い。

次々に、乗り込んでいく。

「どうして、止めなかったのよ」

やっと明日香の番が来た。

「あの子が、勝手に行ったって！？」

タクシーが前に止まり、ドアが開いた。

乗り込んだ明日香。

「イエローホールまで」

運転手に、行き先を告げる。

「え？」

動き出したタクシーの中、

明日香は、驚きの声を上げた。

曲のイントロを聴きながら…。

この曲は、イントロが長い。

志乃が、観客を煽る姿が、香里奈の脳裏に浮かんだ。

ＫＫがサックスに、口を付ける。

香里奈は、マイクから離れた。

歌が、始まるはずだった。

「このおおお！」

香里奈は、叫びながら、ＫＫに近づく。

そして…

マイクは、サックスや歌をひろうはずだったが、

もの凄い雑音を会場に、響かせた。

サックスが、ステージの床に転がり、

KKは倒れていた。

「あんた…何やってるんだよ！」

激しく肩で息をしながら、香里奈は叫んだ。

拳を握り締めたまま。

会場内、

すべてが凍り付いた。

誰もが、今…目にしたことが、信じられなかった。

突然現れた…新しいボカールらしい学生が…

ステージ上で、

いきなり走りだして、

思い切り、殴ったのだ。

バンドメンバーを…。

信じられない出来事に、

演奏は止まり、

会場は、静まり返った。

「演奏が止まった…」

アリーナ席に出た直樹と和也は、静まり返った会場に驚いた。

「速水さん…」

直樹は、ステージ上にいる香里奈の姿を認めた。

直樹は再び、関係者用の通路に戻った。

「直樹！」

和也は、直樹の後を追った。

香里奈は、激しく肩で息をしながら、

「あんた…何やってんだよ！…これが、音楽家のやることかあ！」

香里奈は、ＫＫに近づこうとした。

「何やってるの！あの娘を捕まえて！」

ステージの袖から、ティアが叫んだ。

その声がスイッチとなり、

再び観客が騒ぎ出す。

ステージに、カードマンが何人か上がってくる。

香里奈を、捕まえる。

「離せ！話があるんだ！」

香里奈は無理やり、ステージから降ろされる。

「どうして！死んだふりなんかしてたあ！」

二人に、羽交い締めにされながら、

香里奈は、連れて行かれる。

観客から、凄まじいブーイングが飛ぶ。

ステージに、いろんな物が投げられる。

「帰れ！」

「引っ込め」

野次に向かって、香里奈は叫ぶ。

「これは、親子の問題だ！あなたたちには、関係ない！」

ステージから、消える前、

香里奈は絶叫する。

「男だったら、逃げるな！」

観客席は、収拾がつかなくなった。

ただ狂ったように騒ぐ。

無法地帯になった。

「あんた、何てことを！」

ティアは、香里奈に平手打ちを喰らわした。

「コンサートが、むちゃくちゃだわ」

香里奈は、羽交い締めにされながらも、ティアを睨んだ。

ティアはもう一度、平手打ちを喰らわそうとした。

香里奈は、目を逸らさない。

ティアは、手を振り上げた。

その瞬間。

「香里奈さん！」

直樹が、その場に飛び込んで来た。

直樹は、香里奈を捕まえているカードマンに体当たりをし、殴り倒した。

「何？」

ティアたちが、呆気にとられている間に、

直樹は、カードマンから、香里奈を引き離した。

「直樹！避けろ！」

ステージ袖の控え室に、和也も飛び込んできた。

手には、通路に置いてあった消火器を持って。

和也は、ティアたちに向かって、ノズルを引いた。
白い液体が、煙となって、周りを包む。
「和也！」
「行くぞ！」
直樹は、香里奈の手を引いて走る。
和也は、消火器を置くと、二人の後を追う。
通路にある消防ベルを片っ端から、押しながら、
置いてある消火器を次々に、ノイズを開けていく。
ベルの音と、白い煙がアリーナに流れてくると、
観客は、パニックに陥った。
「あいつらを捕まえて！」
ティアが叫ぶ。
ジャックが、控え室に入ってくる。
「何があった？会場が、パニックになっているぞ」

「そんなのは、ＫＫが吹けば収まるわ！」

ジャックは肩をすくめ、

「吹いたらな…」

ティアはステージを見た。

ＫＫがいない。

驚くティア。

「もうサックスを持って…向こうから、降りたぜ」

ガードマンの一人が、控え室に入ってきて、

「駄目です！観客が、そこら中で暴れていて、捕まえることができません」

ティアは、そこに置いてあった機材を蹴飛ばすと、

ジャックの方を向いて、

「まあいいわ…」

ティアは、観客席を見た。

暴動に近い。

「不審者を簡単にいれ…このようなパニックになったのは、会場のセキュリティーに問題があった…と発表して」

ティアは、観客席を見つめながら、

「まあ…いいわ」

ジャックは隣に立ち、

「いいのか？」

ティアは笑い、

「こんな素敵なものを見れたんだから…」

ジャックは、肩をすくめた。

「素敵ね…」

「できれば、みんな壊してほしいわ」

ティアはしばらく、パニック状態の観客を眺めていた。

「すごいことに、なってるぞ」

一般の出口から、出た香里奈たちは、会場を振り返った。

逃げ出す人々は少なく、

ほとんどが、会場で暴れている。

「あの音を聴いて、おかしくなってるんだ。仕方がない」

和也は、少しかかった粉を払う。

遠くから、サイレンの音が聞こえてきた。

「警察か…行くぞ」

和也と直樹は、地下鉄の階段向かって走ろうとする。

「速水さん…」

香里奈は足を止め、会場を見上げていた。

「速水さん！」

直樹が叫ぶ。

「急げ！」

直樹は、香里奈に走り寄り、再び手を取った。

香里奈は、会場を振り返りながら、走り出す。

地下鉄の階段を、降りきった頃、

サイレンは、近くで止まった。

警察が着いたのだ。

香里奈たちは、改札を通った。

その場を離れる為に。

タクシーに乗り込んだ瞬間、

里美から、イエローホールの一件を説明された明日香は、

行き先を変えた。

「まったく…誰に似たんだか…」

明日香は、カウンターに座りながら、

ワイルドターキーをロックで飲んでいた。

「さっき、香里奈から電話があった…無事みたい。飯田くんといっ

しょだし、大丈夫だわ」

里美が、カウンターの奥から出てきた。

ダブルケイ。

久々に、明日香は里美と2人でいた。

和恵は、もう2階で寝ていた。

明日香は、ワイルドターキーの入ったグラスを、里美に手渡した。

里美は受け取り、

「さっきの話…」

里美は、明日香の前に立ち、

「あたしに、影響されたと言いたいわけ?」

明日香はクスッと笑うと、一口飲んだ。

「それにしても…ステージで、啓介さんを殴るなんて…」

里美も一口飲む。

苦さに、少し顔をしかめる。

「やっぱり…あたしに似てないわ」

明日香は、グラスを傾ける。

「何よ。あんた、この前…暴漢をやっつけてたじゃない」

里美が睨む。

「あれは護身…粗暴とはちがうわ」

「どうせ、あたしは粗暴ですよ。確かに、香里奈は…昔のあたしに似てるところが……影響を与えたのかしら…」

里美はため息とともに、また一口飲んだ。

「里美…」

明日香は、グラスを置いた。

「何…？」

明日香は、里美を見つめ、

「ありがとう。里美には、感謝してるわ」

明日香の言葉に、里美は目を丸くし、

顔を真っ赤にした。

「何よ…いきなり…」

「あんたがいるから…あたしは、この店を留守にできる。香里奈を任せて、安心できる」

「ばかあ」

里美は、カウンターにもたれ、

「あたしも、ここにいるから…幸せなのよ」

「里美…」

「あんたは、世界中のファンの為に、音楽で幸せを与え…あたしは、香里奈といっしょに暮らすことで、女として、血はつながってないけど…母親の幸せを得ているわ」

里美は、明日香を小突き、

「お互いさまよ」

明日香は微笑み、

「もう一杯飲む？」

グラスを突き出した。

「あたしは、他のやつを飲むわ」

里美は顔をしかめた。

それを見て、明日香は笑い、

里美も笑った。

新しいグラスで、

二人は乾杯した。

パニックになった会場を背にして、

KK…

いや、

啓介は、歩いていた。

「うう…」

いきなり、頭を押さると、啓介は呻きながら、通路の壁に手をつけた。

「ここは…」

頭がはっきりとしない…

霞がかかっているような感覚。

「何やってるんだよ！」

知らない女が、殴る映像が浮かぶ。

啓介は、その場に崩れ落ちた。

「俺は…どこにいるんだ…何をしてた…」

思い出せない。

「あ、明日香…」

啓介の頭に、明日香の顔が浮かぶ。

「明日香…俺は…」

「ＫＫ！」

遠くから、ティアが近づいてくる。

啓介は目を細め、ティアを見る。

光の中から現れたティアが…

「啓介…」

笑顔で向かってくる。

「ゆ、ゆ、百合子…」

啓介には、天城百合子に見えた。

「うわあああああ！」

絶叫とともに、

啓介の精神は、また落ちていった。

ライブハウスに、ゲストで呼ばれていた啓介は、
出番を終え、アルトサックスをケースにしまう。

「お先に。お疲れ様」

知り合いのバンドメンバーに、挨拶すると、外に出た。

「啓介さん」

ドアを開けると、
一人の女性がいた。

「天城さん…」

啓介は少し驚いた。
そこにいたのは、天城百合子だった。
百合子は、笑顔を浮かべ、

「ライブ見ました。さすが啓介さんですね。感動しました」

「ありがとう。でも、どうしたの…こんな所まで」

「この前、ダブルケイに行ったときに…今日このライブに飛び入りすると聞いて」

「そんな話したかな…」

啓介は、首を傾げながら、歩き出した。

百合子は、微笑みながら、

啓介の隣を歩く。

「あたし…ちょっとストーカー入ってるかも…」

百合子の言葉に、

啓介は、目を丸くした。

「ストーカー?」

「はい!」

元気よく返事する。

「誰の?」

啓介の問いに、

百合子はクスクス笑い、

「啓介さんの」

「え！？」

思わず声を上げた。

百合子は、少し前を歩き、振り返った。

「限定ですけど…」

そう言う百合子の表情が、啓介には気になっていた。

啓介は頭を振ると、

百合子を追い越した。

「冗談はやめてくれ」

「冗談じゃないです」

ダブルケイにいる時と違う百合子の態度に、

啓介は、少し冷たい態度で応対した。

「啓介さん」

啓介はある日、気付いた。

百合子の横顔が、どこか似ていることに…

目もとが…

恵子に似ていた。

いたずらぽく見つめるとき…不満げなときの表情が…

雰囲気が…そっくりだった。

そんな理由で、百合子に惹かれていた。

好きとかじゃなくて…

母親の面影に、惹かれている。

そんな自分を、戒めながらも、ダブルケイ以外で演奏する時は、

必ず見に来る百合子に、

啓介は、逃げられないものを感じていた。

「天城さん」

啓介は、前を歩く百合子に声をかけた。

「何です？」

啓介は、百合子を追い越し、

「あまり…付きまとわないでほしい。迷惑だ」

突き放そう、突き放そうと思うたびに、

逆に運命の糸が、

体に、巻き付いてくる気がしていた。

啓介は、近づくティアの姿に怯えた。

「こっちに来るな！」

「どうされました？」

ティアは、しゃがみ込んで、啓介の顔を覗き込んだ。

「ＫＫ…」

心配そうなその表情が…

再び、啓介は記憶の中に沈んだ。

陰がある、艶めかしいこの肢体は…

絡みつくようだった。

「啓介さん…」

背中越しに、百合子が囁く。

「あたし…音楽の才能がないらしいんです…」

「才能…」

百合子は、体を啓介に向けた。

人差し指で、横になっている啓介の腕を撫でる。

「あなたの明日香さんや、香里奈ちゃんが、あるのはわかるんですけど…」

百合子は、体を密着させる。

「志乃は、どうしてかしら…。あたしの妹なのに」

百合子は、啓介の耳元に唇を寄せる。

「ずるいと思いません…」

「志乃ちゃんが…」

啓介は、くすぐったそうに、顔を背けた。

「違いますぅ」

百合子は逃がさない。

「あなたの奥さん…」

啓介の体に、百合子が絡みつく。

「あなたの妻で、美人で、歌手で…人気があって…」

「百合子…」

「ずるいわ…少しぐらい、幸せがなくなればいいのに…」

百合子は、妖しく微笑んだ。

「そ、そんな話…」

パニクる啓介に、

百合子は顔を近づけ、

「知らないはずです」

啓介を見つめた。

「言ってないから」

啓介は、ハンドルを握り締め、

「どういうことだ！」

「だって…」

百合子は、視線を前に戻し、

言ったら…産ましてくれなかったでしょ」

「当たり前だ！」

啓介は叫んだ。

百合子は笑い、

「あたし…音楽の才能がないんです…だから」

百合子は、赤ん坊の頭を撫で、

「ほしいんですよ…才能が…」

「…」

啓介は絶句する。

「あたしの思い…啓介さんの才能…」

百合子は愛しそうに、赤ん坊を撫でる。

「この子は…志乃や香里奈をこえるわ」

「百合子…この子は…」

啓介の戸惑いに、

「信じられない？だったら、調べたらいいわ！どこでも行ってあげる！」

啓介は子供のことより、

百合子の思いと、表情と、

執念に、身を震わしていた。

「啓介さん…」

百合子は、赤ん坊を撫でる手を止め、

「あたし…ちょっと…残念に思いましたわ」

百合子はいやらしく笑い、

「男の人って…どんなに愛する人がいても…裏切るんですね」

「あたしが、誘ったから?何度も断ったのに…」

百合子は、啓介を見つめ、

「だけど…」

百合子は、さらに顔を近づけ、耳元で囁く。

「裏切ったことには、変わらない」

そう言うと、百合子は大声で笑った。

「ははは!」

笑い声は止まらない。

「百合子…一体何が目的なんだ!」

百合子は、笑いを抑えると、

「言ったでしょ…才能がほしいって…」

百合子は、赤ん坊の顔を覗き込んで、

「この子を、明日香さんに見せたら…どう思うかしら?」

「それが、目的か…」

「あたし…音楽に愛されたかった…でも、愛されなかった」

百合子は、前を睨む。

「なのに！あたしの周りはみんな、愛されてる！どうして！」

「百合子…」

「許せない！許せない！才能があって、幸せなんて！」

啓介は、ハンドルを切った。

車が急に反転する。

社内が激しく揺れる。

「きゃー！」

百合子が叫ぶ。

車は先程と、反対を走り出す。

「どこいくの！」

明日香にいきなり、会わす訳には行かない」

啓介は、アクセルを踏みしめ、

「ちゃんと話してから」

「戻ってよ」

百合子は、ハンドルを隣から、無理やり、切ろうとする。

「もどってよ！」

「駄目だ！」

赤ん坊を挟んで、車内で、啓介と百合子はハンドルを持って、争う。

車は、ジグザグに走る。

百合子は思い切り、力を入れる。

「今さら…」

百合子は叫ぶ。

「もう裏切った癖に！」

車は、道を外れ…

「ＫＫ…」

ティアは、啓介を揺り動かす。

「裏切った…」

啓介が呟く。

通路の向こうから、ガードマンたちが走ってくる。

「早く医務室に！」

ガードマンが、啓介を抱えようとした瞬間、

啓介はそれを制した。

「大丈夫だ」

啓介は立ち上がり、歩き出す。

「ＫＫ！？」

心配そうなティアを、横目で見ると、

啓介は苦笑した。

壁の向こうの観客席の騒ぎの中、啓介はゆっくりと歩き、

会場を後にした。

直樹と和也は、香里奈をマンションの前まで、送った。
ダブルケイはまだ、危険かもしれなかった。

「ありがとう…」

香里奈は、オートロックを外す。

「…じゃあ、俺たちは帰るね」

「うん…気をつけて」

香里奈は、手を振りながら、扉の中に入った。
香里奈が、奥のエレベーターに乗るのを確認して、
直樹と和也は、歩き出した。

「和也…ありがとう」

「何だ?別に大したことはしてないぜ」

「お前が、来てくれなかったら、助けられなかった」

直樹は足を止め、

頭を下げようとした。
和也は足を止めず、歩き続ける。
「和也…」
「なあ、直樹…」
少し前で、和也は足を止めた。
振り返り、直樹を見た。
「店、やることにしたよ。しばらく、母さんを手伝うつもりだ」
「そうか！よかった」
直樹の喜ぶ顔に、
和也は微笑み、
「ありがとうな。直樹」
和也は、すぐに前を向いて、照れたように歩き出した。
「和也！」
直樹は走る。
和也の隣に並び、

二人は駅まで歩く。

例え、二人の間に言葉が少なくても、

二人の絆は、強かった。

部屋に入った香里奈は、

緊張の糸がほどけたように、そのまま…ソファに倒れ込んだ。

そのまま、眠ってしまった。

しばらくして、誰かが部屋に入ってきた。

「あら…風邪引くわよ」

香里奈に、毛布をかけてあげた。

おいしそうな匂いに、香里奈は目を開けた。

それは、久々に嗅いだ匂いだった。

懐かしく、大好きだった匂い。

これは…。

「ママ！」

香里奈は、飛び起きた。

「目が覚めた？まだ寝てても、よかったのに」

台所にいる明日香は、振り返った。

「もう少ししたら、できるからね」

疲れてるはずが、匂いをかいだら、

お腹が、すいてることに気づいた。

「先に、着替えてらっしゃい」

香里奈は、制服のままだった。

「はあい」

香里奈は、返事をすると、ソファの上で、制服を脱ぎだした。

明日香は、そんな娘の姿に、クスッと笑った。

「そんな脱ぎ方…飯田くんの前では、ダメよ」

明日香の言葉に、

香里奈は、顔を真っ赤にさせ、

「そんなことしないよ！」

明日香は、また笑った。

「ママ…」

「どうしたの？」

「ママ…あたし…」

香里奈の声のトーンが低い。

明日香は、鍋を煮込みながら、

「今日のこと？」

「あたし…コンサートを台無しにしちゃった…」

香里奈は、自分の手を見つめ、

「パパを殴っちゃったし…」

香里奈の手が、震えた。

「勢いで、大変なことしちゃった！」

明日香は、鍋の火を消した。

「でも…志乃ちゃんのコンサートなのに…あんな利用するようなこと！許せなかった」

香里奈は叫んだ。

明日香は、鍋をテーブルに置くと、皿にいれる。

「それに、パパだって！」

「はい。できたわよ」

明日香は、お盆に皿をのせ、香里奈の前まで運んでくる。

それは、香里奈の好きなビフシチューだった。

「お腹すいてるでしょ。食べなさい」

明日香は、後ろから、立っている香里奈の両肩に手を置き、ソファに座るように促した。

香里奈は、しぶしぶソファに座ると……いただきますと手を合わせてから、

シチューを食べる。

明日香は微笑み、

「そうね…あなたのやったことは、その場にいたお客さんには、失

礼だったかもしれないわね。だけど…」

明日香は、お水をコップに注ぎ、香里奈の前に置いた。

「あのコンサート自体が、危険だったから…」

香里奈は、スプーンを止めて、

「でも…その後、ものすごい騒ぎになったでしょ…」

「そうね…。でも、あれくらいで済んだのは、よかったわ。すぐに、警察がきたから、騒ぎもおさまり、怪我人も、ほとんどが軽傷だったから」

香里奈はすぐに、シチューをたいらげた。

「おかわりは？」

香里奈は頷く。

明日香は、お皿を持ち、シチューを入れにいく。

今回のことで、世間に彼らの危険性がわかったから、無闇に動けなくなるはずよ」

明日香は、おかわりを香里奈に渡すと、ソファに座った。

「あの音は、麻薬みたいなものだから…長い時間聴いていたら、危

険だった」

明日香は手をのばし、

香里奈の髪を撫でた。

「だから…あなたのお陰で、みんな助かったのよ」

明日香は、香里奈に微笑みかけた。

「ママ…」

明日香は、立ち上がると、

「今日はここに泊まるわ。お風呂、沸かすね」

「和恵は…」

「和恵のことは、里美に任してる」

「ママ…」

香里奈は、何か言いかけて、言葉を止めた。

明日香は、そんな香里奈をじっと見つめ、

「そうね…このことも、きちんと話せないとね…」

明日香は、再びソファに座り、

香里奈の目を見て、

「和恵のことだけど…きちんと、説明したことはなかったわね」

唇を噛みしめ、

「和恵は…あたしと啓介の…」

明日香は、少し視線を香里奈から外し、

その向こうにあるＣＤラックを見つめた。

「の間に…」

「ママ！」

香里奈は、ソファから立ち上がり、

明日香の視線を塞いだ。

「あたしは、ママを愛してる。そして、和恵も愛してる。大切な妹だから」

「香里奈…」

「ママはどうなの？」

香里奈は、じっと明日香を見た。

明日香は、香里奈の瞳の中を覗いた。

そして、微笑むと、

「勿論、香里奈も和恵も愛してるわ」

明日香は立ち上がり、

「二人とも、大切な娘だもの」

香里奈も微笑み、

「それで十分だよ。ママ」

香里奈の脳裏に…赤ん坊の和恵を抱いた明日香の姿が、蘇る。

「あなたの妹よ」

小さな香里奈は、いきなりできた妹が、

ただただうれしかった。

明日香の腕の中を覗き込み、まだ目が見えない和恵に、話しかけた。

「はじめまして、あたしがお姉さんだよ」

「ママ…」

「なに？」

「ママは…」

香里奈は、さっきとは違い、

拳を握りしめ、明日香を見た。

「ママは…パパを…今のパパを愛してるの？」

明日香は、何の迷いもなく、即答した。

「愛してるわ」

「あんな酷いことをしてるのに！？」

「そうね…酷いことをしているわね」

「それなのに、どうして？」

明日香はソファから離れ、少し歩くと、

香里奈の向こうにあるＣＤラックから、一枚のＣＤを取り出した。

それはマリーナ・ヘインズのアルバム。

明日香と出会う前の…学生だった頃の啓介が、参加している。

音が流れる。

「香里奈…」

明日香は、香里奈の方に振り返った。

「あたしには…今の彼の音が、泣いてるように聴こえるの」

香里奈は、そのアルバムを聴くのは、初めてだった。

枯れた、説得力のある女の歌声に、

甘く太い…啓介の音色。

「違う…」

香里奈は呟いた。

会場で、隣で聴いた音と、明らかに違っていた。

「悪いことをしてるのが、家族の一人だったら…」

音に聴き入っていた香里奈は、はっとして、

明日香を見た。

明日香はやさしく微笑み、

「家族だから…止めないと」

「家族…」

「例え、長い間離れていても…家族は家族よ」

明日香は、ＣＤを聴きながら、

「家族の問題は、家族が向き合わないといけないの。香里奈は…パパが嫌い？」

香里奈は、少し戸惑ったが、

真剣な表情になり、

「正直、許せない…ところはあるけど…」

明日香は、やさしく見守っている。

「嫌いじゃない…」

そう言ってから、香里奈は頭をかき、

「実際よくわからない」

「それでいいのよ」

明日香は、キッチンに戻り、お茶を入れる。

「あなたは十分に、頑張ったわ」

お茶を香里奈に、手渡し、

「後は…ママに任せて。ちゃんとやめさせるわ…あんなこと…」

「うん」

香里奈は頷く。

「あっ！お風呂、沸かすんだった！すっかり忘れてたわ」

バスルームに、消える明日香の後ろ姿を見ながら、

香里奈は、お茶を一口すすった。

「あちっ！」

お茶は、予想以上に熱かった。

レクイエム

テレビは大々的に、コンサートでの騒ぎを報じた。

ここ何十年、なかったコンサート会場での暴動は、

セキリュティーの問題や、

音楽そのものの公演に関して、議論された。

かつて、７０年代。

ジミー・ヘンドリックスが危惧した…

ロック等のコンサートに、若者がいき、その場で暴れ、騒ぎ、

ストレスやパワーを発散することにより、

世間に対する運動や暴動が、減るだろうと…。

事実、

ここ何十年もの間、

日本では、若者による暴動は起きてはいない。

コンサートやライブ会場でいう…鳥かごの中でだけ、

羽ばたいていたのだろうか…。

今回の騒ぎは、

だだ騒ぐだけではなく、

止めに来た警察に、何万人が殴りかかるという事態に陥った。

すぐに騒ぎは、治まったわけではなく、

観客ではなく、警官やガードマンに怪我人が続出していた。

ＫＫたちの危険性を、報道したテレビ局に、

何千人もの人が、押し寄せるという事件が発生した。

「このような事態になったことは、大変な問題であり、今の若者の…一部の過激すぎる表現が…」

朝の報道番組で、中年のコメンティターが意見を述べている時、

突然起こった。

「逃げて下さい！」

生放送本番中のスタジオに、誰かの声がこだました。

メイン司会者やゲストのタレントが驚き、

戸惑う中、

スタジオになだれ込んできた人達。

「何だ！取り押さえろ！」

スタッフが叫んだ。

しかし、

無理だった。

なだれ込む人の数が、止まらない。

慌てて逃げる出演者たち。

何千人が一斉にテレビ局に、押し寄せたのだ。

それだけの人々を抑えるセキリュティーは、テレビ局にはない。

その混乱は、テレビを通じて、お茶の間に映し出された。

「警察を呼べ！」

スタッフが叫んでいた。

同時刻…

近くにある2カ所ある警察署にも、

何千人もの人々が押し寄せていた。

革命家でも、過激派でもない…

普通の人々。

日本は、世界で一番、危機管理ができていない。

ある人物がいっていた。

その気になれば、どこにも入れる。

会社でも、国会でも、テレビ局でも、

掃除のアルバイトにでもなれば、

えらい人の近くにいけると。

そして、何百人が一斉に、

前触れもなく、堂々と中に入ろうとしたら、

それを止める術はないと。

「ねえ…知ってる？」

安ホテルの一室で、テレビを見ていたティアは、一通り笑ってから、ジャックの方を見た。

「この国って…今まで一度も、民衆による革命によって、国ができたことがないらしいの」

「へぇー」

ジャックには、興味がないみたいだ。

「民衆が、国を動かしたことがない…奴隷の国なのよ」

ティアは、タバコをくわえると、

「よく世界中にあるじゃないカーニバルとか…有名な…。あれは、奴隷が1年に1回だけ、騒ぐことを許された日が、はじまりらしいわ」

ジャックは欠伸をする。

「この国なんて、その典型よ。夏だけの祭り」

ティアはクスッと笑い、

「今もそうね。正月だとか、誰かが優勝したときや…普段も、コン

サート会場やライブハウス、仕切られたストリートという名の安全地帯」

ティアは煙を吐く。

「暴れる場所も、発散する所も決まってるから…セキリュティーは甘くなる」

テレビの画面は変わり、

別の地方のスタジオが映り、

そこでも大慌てしている。

「公共施設を襲うのは、一部の人間だけ…テロリストも少数…」

ティアはにやりと笑い、

「まさか…民衆が革命を起こすとは、想定してない」

「革命か…？これが、ただ頭がおかしくなってるだけだろ」

ジャックは、また欠伸をした。

「でも、楽しいじゃない」

「この前、コンサートに来た人数だけじゃないな…」

「群衆意識に…祭感覚。すべてが、狂ってるわけじゃないけど…お

もしろ半分で参加している」

「確かに何千人もいたら、捕まえられないよな。それも、普段捕まえる方の警察を、ターゲットにしてるしな」

「まさか…最初に襲われるとは思わない」

ジャックはティアを見、

「まさか…指示したのか…」

ティアはタバコをふかし、

「ちょっとね…」

「どうやった？」

「ＫＫのホームページに登録している者に、一斉にメールしただけよ」

「何と？」

「次にコンサート予定の、中路山音楽フェスティバルが…警察とテレビ局の圧力で、中止になりそうだと」

「そんなことしたら…足がつくぞ」

「構わないわ。別にバンドがなくなってもいいし、この国に長く…いる必要もないし」

ティアは、灰皿にタバコをねじ込むと、

「あたしたちはただ、音楽を聴かせてるだけ…。薬をばらまいてるわけでもない」

「しかし…」

「もし、音がおかしいといわれても…それを確証して、犯罪に認定するまで時間がかかるわ」

ティアはクスッと笑い、

「音が犯罪になれば…どうなるかしら?世界中のビジネスのやり方が、変わるわよ」

「まあ…金にはならないな」

ジャックも、タバコを取り出した。

「だから、今のうちに…」

「お前は、この国に革命でも起こさせたいのか?」

ジャックの問いに、

ティアはテレビを消し、

「狂えばいいのよ。こんな脳天気な国。あの国の属国の国なんて」

ジャックはタバコを、ティアの前の灰皿に捨てると、

「俺は、金になればいい」

そのまま、ドアに向かう。

外に出ていく時、ジャックは振り返り、

「この国の次は、どこにいく？」

ティアは、消したテレビ画面を見つめながら、

「脳天気な国よ」

「探しとくよ」

ジャックは苦笑すると、ドアを閉めた。

次のＫＫが、ライブする予定である…中路山ロックフェスティバルは、あらゆる利権と、ファンの狂気的な運動になり、

開催されることになった。

警察や機動隊が、会場を包囲しながらであるが…。

チケットは売り切れており、

何十万人が、会場に詰めかけることになっていた。

テレビＣＭ、ネット…

駅や街頭に、

フェスティバルは告知され、

音楽ファン以外の話題も、独占していた。

ＫＫのメインスポンサーである時祭グループは、今回のフェスティバルをもって、ＫＫから手を引くことを、決定していた。

多大なる利益を上げたが、これ以上は、イメージを悪くする恐れが強かった。

時祭光太郎は、先日のコンサートの騒動を伝える新聞を、無造作にディスクの上に、ほり投げた。

ため息をつき、席を立つと、窓まで歩いた。

外を眺めていると、携帯が鳴った。

光太郎は携帯を取り、番号を見て、ふっと笑った。

「なんだ?」

光太郎は、電話に出た。

「ちょうどいい…私も話があった」

光太郎は振り返り、ディスクの上を見つめた。

「お姉ちゃん、元気？」

和恵は、明日香と手をつなぎながら、スーパーからの買い物の帰りだった。

「元気よ」

明日香は、和恵に微笑みかけた。

「いつ、うちに帰ってくるの？」

「もうすぐよ」

数は少なくなっていたが、ダブルケイ前は、まだ何人かのマスコミが張っていた。

「ママ…」

和恵が、明日香の後ろに回った。

明日香は前を見た。

ダブルケイに通じる坂道の入り口に、一人の男の子がいた。

マスコミ関係ではない。

学生みたいだ。

男の子は頭を下げた。

「速水明日香さんですね」

男の子は、明日香に近づいてくる。

「あやしい者ではありません。香里奈さんの同級生で…」

男の子は、明日香たちの前で止まった。

「時祭光太郎の甥です」

男の子は、和也だった。

「時祭…父の…」

「はい」

和也は頷き、

「藤木和也と申します。明日香さんとは、いとこになります」

明日香は、和恵の頭を撫で、

「大丈夫」

微笑んだ。

和也は二人の様子を、やさしく見つめた。

「で…あたしに何か、用かしら?」

明日香は和也を見た。

「はい」

和也は頷き、

「ここでは何ですから…」

近くの茶店に促そうとした。

「少し、待っててくれる?」

明日香は和恵を、ダブルケイに先に返した。

和也は、その場で待つことにした。

「あたしに話って…」

明日香は、コーヒーを一口すすった。

和也は、明日香の前に座り、

「あなたが…今度開催される中路山ロックフェスティバルに参加したいと、おききしたものですから」

「誰からきいたのかしら？」

和也は、明日香から、目の前のコーヒーを見つめ、

また視線を、明日香に戻した。

「おじさんからです…」

「父から？」

和也は、コーヒーを手に取り、

「今回のフェスティバルは、時祭グループも参加しています。いろんな情報が、入ってきます」

一口コーヒーをすすり、

「もう参加メンバーは、決まってますが…何とか参加できないかと、いろんなところに、働きかけていらっしゃると」

和也は、明日香を見、

「なぜ…お父上に、直接頼まないのですか？」

明日香は苦笑した。

「あたしは、あの人ともう関係ないから」

明日香は、カップを置くと、

「あなたが、香里奈と同級生なのは、驚いたわ。これからも、香里奈をよろしくね」

明日香は、和也に微笑んだ。

「だけど…」

明日香は伝票を取り、

「今回の件は、父やあなたには、関係ないのないことよ」

席を立とうとする明日香。

「待って下さい！」

和也は叫んだ。

「俺は！香里奈さんを監視する為に、無理やり、香里奈さんと同じ高校に、通わされました」

明日香の動きが止まった。

「そんな俺を支える為に…親友の直樹は、同じ学校に通ってくれています。祖父と離れ、バイトしながら、生活費や家賃を払って！」

「飯田くん？」

「俺は、そんな直樹に何も、返してやれません」

和也は、明日香を見つめ、

「だから…直樹の彼女である香里奈さんの為に…親戚である、あなた方の為にも」

和也は叫ぶ。

「何か、してあげたいんです！」

明日香は、再び席に戻った。

「ありがとうございます」

和也は頭を下げると、

「フェスティバルの参加予定アーティストの一組が、この前の騒動を恐れ、キャンセルしてきました」

和也は、フェスティバルの予定表を取り出し、

「その為、プログラムが一部変わります」

フェスティバルは、ステージが2つあった。

「B会場の、5時からスタートのアーティストが抜けることになります。この同時刻…A会場で、ライブをスタートするのが…KKです」

「ありがとう」

明日香は頭を下げた。

「あ、頭を上げて下さい。世界的にも、有名なあなたに、出て頂くんですから…本当はきちんと、契約しなければならないんですが…」

「時間がないんでしょ」

フェスティバルは5日後だ。

「ギャラとかはいらないわ…有り難う」

明日香の言葉に、

和也は頭を下げた。

「いえ…有り難うなんて…こちらこそ」

「やることができたわ…。こちらも、準備を急ぎます」

明日香は席を立ち、

「和也くんだったわね…」

「はい」

明日香は微笑み、

「香里奈たちをよろしくね」

「はい」

「今日は、会えてうれしかったわ」

明日香は、レジに向かう。

「和也くん」

ふと足を止め、明日香は振り返った。

「父にも、有り難うと伝えておいて下さい」

「はい！」

明日香は頭を下げ、やさしい笑みを残し、店から出た。

すぐに明日香は、携帯を取り出し、

電話をかけた。

「サミー。何とか出れることになったわ」

「そうか！よかった」

電話の向こうで、サミーは喜んでいた。

「サミー。ところで、みんなの予定はどうなの？」

「ただいま…」

和也は、店の扉を開いた。

「おかえりなさい」

「おかえり」

律子の声の後に、直樹が続く。

「直樹…」

和也は驚き、

「お前…バイトは？」

直樹はキャタツに乗り、天井近くを、ぞうきんで拭いていた。

「ああ、今日は休んだよ。明日、店開けると、律子さんが言うから…大掃除だ」

「お前…」

直樹は、キャタツから降りて、和也の顔を見、

「何か、いいことあった？」

「え？」

驚く和也に、

直樹は、キャタツを動かしながら、

「表情が明るいから…」

和也を笑い掛け、

「まるで、重い荷物を降ろせたような…清々しい表情だ」

和也は目をつぶり、

呟いた。

「かなわないな…」

目を開けると、

「俺も手伝うよ」

「じゃあ…母さん、仕込みするから、後はよろしくね」

律子から、モップを受け取り、和也は床を掃除する。

新たなる旅立ち。

今、始まったばかりだが…和也たちはこの上なく、幸せだった。

店に久々に笑みと、暖かさが戻ってきた。

問題点

「これは、大変なことになりましたよ」

学校内、

職員室で、議論が交わされていた。

ディスクの上に、置かれた新聞。

そこに書かれた記事。

「本校の生徒が、このような事件に、かかわっていたとは…」

「信じられませんわ」

「大体…先日、マスコミが押し寄せた時に、きちんと注意していたら…」

「即刻、この生徒を呼び出して…」

「その必要は、ないでしょ！」

色めき立つ先生たちの中…一人、冷静に様子を見ていたゆうが、音を立てて、席を立った。

「この生徒には、何の問題もありません。ただ巻き込まれただけです」

ゆうの強い口調に、他の先生たちは黙る。

みんな、及び腰なのだ。

「牧村先生…。しかしですな…」

議論の中心にした教頭が、口を開いた。

「このような事態に、本校の生徒が、かかわっているということは…」

「巻き込まれただけの生徒に、どんな問題があります」

「しかしですな…学校の評判というものが…」

「この生徒は、牧村先生のクラスでしょ」

ゆうは、他の先生の様子を見て、ため息をついた。

そして、

「何か、学校に迷惑がかかるようでしたら…私が責任を取ります」

と言った。

つまり、こういうことなのだ。

面倒なことには、関わりたくない。

誰かの責任にすれば、楽になる。

「失礼します」

授業が近い為、

ゆうは職員室を出ようと、ドアを開いた。

「うん？」

ドアの前に、誰かいた。

「如月さん…」

里緒菜は、うつむいていた。

「職員室に、何か用？」

ゆうが、道を開けようとしたら、

里緒菜は手を振り、

「いえ、違うんです！」

ゆうは、肩をすくめると、

廊下に出て、歩き出す。

「先生！」

慌てて、里緒菜が後を追いかける。

「か、香里奈…速水さんのことで、何かあったんですか？」

里緒菜は、ゆうの横に並んだ。

「聞いてたのか…」

「はい…」

里緒菜は頷いた。

ゆうは失笑すると、

「何の問題もないよ」

「でも…先生が責任を取ると…」

ゆうは、足を止めた。

そして、里緒菜の方を向いた。

「教師にとって、一番大切で、守るべきは、生徒だ」

里緒菜は、少し驚きながら、ゆうを見た。

「学校の名誉とか、評判とかではないよ」

「先生…」

ゆうは微笑み、

「例え…その為に、学校をやめなければならなくなっても、本望だ」

ゆうは前を向いた。

「教師は、学校の為ではなく…全生徒、一人の生徒の為に存在してるんだよ」

「でも、先生が…」

里緒菜の言葉を、遮るように、

授業が、始まるチャイムが鳴った。

「ほら。授業が始まるぞ」

ゆうは、もう一度笑顔を見せると、

次に授業をする教室に向かって、歩き出した。

里緒菜は、そんなゆうの背中をただ…見送った。

昼休み。

いつもの如く、香里奈たちは、屋上にたむろしていた。

「あれ?藤木くんと飯田くん…お弁当なんだあ」

弁当を、パクついていた祥子は、少し離れた所に座る二人の手元に、気づいた。

祥子は、二人の弁当を覗き込み、

「それも…おかずとかいっしょだあ!」

必要以上に、大声を出す祥子に、直樹は苦笑して、

「和也のお母さんにつくってもらったら…」

「ああ…俺たち、いっしょに住んでるんだよ」

和也は、エビフライをくわえながら、こたえた。

「えええー!」

祥子と恵美が、声を張り上げた。

「か、香里奈ちゃんは、知ってたの?」

そばで、特大サンドイッチと格闘している香里奈に、

祥子がきいた。

サンドイッチを頬張りながら、

香里奈は、首を横に振った。

顔をしかめ、一気に飲み込みと、再びサンドイッチを手に取る。

「よく噛まないと、よくないよ＞ｅｍｊ：１４５＜じゃなくて…」

祥子は、身をよじらす。

「何で知らないのよお」

「ううう…」

香里奈は、サンドイッチをくわえながら、

首を捻る。

「香里奈ちゃん…」

祥子は、情けなさそうに、呟いた。

直樹はクスッと笑い、

「香里奈さんは、いろいろ大変だったから…伝えるのが、遅くなっただけだよ」

屋上の扉が開き、里緒菜が入ってきた。

「りゆおなあ！」

香里奈は、サンドイッチを頬張りながら、里緒菜に声をかけた。

「遅かったじゃない」

恵美は、おにぎりを手にしながら、里緒菜に言った。

「ちょっと確認を…」

里緒菜は、フェンスにもたれかかった。

「確認って？」

祥子がきいた。

里緒菜は、香里奈に視線を移し、

「４限目前に、職員室に行ったとき…聞いたのよ」

「何を？」

恵美たちの注目が、里緒菜に集まる。

香里奈はキョトンとして、サンドイッチを食べながら、里緒菜を見る。

里緒菜は、ため息をつくと、

「この前のコンサートについてよ」

「コンサート…」

和也は、呟いた。

直樹は、真剣な顔になる。

「ちょっと問題になってたけど…この件は、何かあったら、牧村先生が責任を取るということで、治まったわ」

「別に、学校は関係ないだろ」

和也は、弁当箱を置いた。

「マスコミが、学校に来たから…問題になって、報道されるのがこわいのよ」

「けっ！いやだね」

恵美は唾を吐いた。

「香里奈ちゃんのせいじゃないのに…」

祥子は、香里奈を見た。

香里奈は、サンドイッチが喉に詰まったらしく、紅茶を流し込んでいる。

祥子は、ため息をついた。

「香里奈！」

里緒菜は香里奈を見、

「今までのことは、別にすんだことだから、いいけど…これから、どうするの？」

香里奈は、ふぅと息をはくと、里緒菜を見た。

少しの沈黙。

「里緒菜ちゃん…。か、香里奈ちゃんは、もう、あんなのには、かかわらないわよ…ねえ」

祥子は慌てて、里緒菜と香里奈の視線の間に、割って入る。

「今回の騒ぎはもう…あんた一人で、止められるレベルじゃないわ」

里緒菜の口調は厳しい。

「この前も、ナオくんや藤木くんに、助けに来てもらわなかったら…どうなっていたか」

何も話さない香里奈を、里緒菜は睨む。

「里緒菜ちゃん」

祥子は、里緒菜に近づく。

里緒菜は、祥子を無視し、

「ここで誓って…」

香里奈の前に行く。

「もう二度と、あんなことにかかわらないと」

マットの上で、座る香里奈を、里緒菜は見下ろした。

「里緒菜…」

香里奈は、やっと口を開き、おもむろに立ち上がった。

香里奈と里緒菜は、お互いの目を見つめる。

しばらく、じっと様子を見ていた直樹は、

静かに口を開いた。

「この騒動を、止められるのは、速水さんだけだ…」

「ナオくん…」

里緒菜は、直樹の方を向く。

「これは…ただの騒動じゃない…。音という目に見えない…おそろしいものとの闘いだ…」

直樹は、会場の通路で聴いた音を思い出していた。

「音のドラッグと言われるくらい…凄い音だったけど…」

直樹は、目をつぶった。

瞼の裏に浮かぶ…

あの輝いた歌声。

公演で会った…

あの女の子。

「でも、速水さんの歌にはかなわないよ」

直樹は目を開け、

「ぼくには、わかる」

そう言い切った。

「俺もそう思う」

和也は、もたれていたフェンスから離れ、ドアに向かって歩き出す。

「この問題は、社会問題になっているが…根本的には、親子の問題だ」

和也は、ドアのノブをつかむと、振り返った。

「俺はそう思う」

ドアを閉め、

和也の姿が消えた。

香里奈と里緒菜は、和也を見送った後、再び顔を見合わせた。

「ったく…あいつは…」

直樹は、和也が忘れていった弁当箱を片付ける。

「あいつは…」

文句を言いながらも、片付けを終えると、

直樹は、香里奈と里緒菜に、近づき、

「問題はないよ…」

直樹は里緒菜を見、

「でも…やっぱり心配はあるけど」

香里奈を見た。

そう言うと、弁当箱を抱えながら、二人の間を通り抜け、直樹はドアへと歩いていく。

里緒菜は、その後ろ姿を見送った。

「里緒菜…」

香里奈は口を開いた。

「ありがとう。でも…あたしはやらなくちゃいけない」

里緒菜は仕方なく笑うと、

「行くときは、ちゃんとあたしたちに言ってよね」

里緒菜の言葉に、香里奈は深く頷いた。

「うん」

その様子に、祥子と恵美はほっと胸を撫で下ろした。

中央国際空港。

待合室に、２人の男と女がいた。

男は４０前後。
女は２０代前半。

「ニューヨーク、よかっただろ」

男は、感嘆のため息をついた。

「はい。あんな近くで見れるなんて…感動でした」

女は、愛想笑いを浮かべた。

男は気付かず、

「そうだろ。あそこは、会員制で～日本人は入れないだよ」

男は、自慢げに話し続ける。

「特別にコネで、見ることができたんだよ」

「あんまり、音楽が分からないあたしが、感動しましたもの」

「マイケル・ガット、トーマス・ミラー…ジョン・マクドナルド…
世界一流のミュージシャンを間近に見れたなんて、しあわせだよ」

男は、女の肩を叩き、

「君は幸運だ。彼らは、めったに日本に来な…」

男の動きが止まる。

目の前を通り過ぎていく一団に、

目を見開き、あんぐりと口を開ける。

「課長…」

女は、動きの止まった男の横顔を覗いた。

「そんなばかな…」

空港内を、颯爽と歩く一団の先頭、

白髪の老人は、携帯を取り出し、

徐に電話をかけた。

「明日香か？」

老人はサミーだった。

「今、日本に着いた。みんなもいっしょだ。どこにいけばいい？」

激しいシャワーの音。

滝のように降りしきる。

大量の湯気が、

ガラスを曇らせる。

「ＫＫ」

ガラスの向こうから、声がした。

蛇口を閉め、シャワーを止めると、啓介はバスタオルをつかみ、バスルームを出た。

「ＫＫ。会場で、リハーサルの予定がありますが…いかがしましょう？」

ティアの言葉に、

啓介は鼻を鳴らすと、

テーブルに置いてあったグラスに、手を伸ばした。

もう氷が溶け、水のようになっていた。

「新しく、お作りしましょうか…」

「頼む」

啓介は、グラスを渡すと、ベットに座った。

ティアは、小さな冷蔵庫から、氷を取り出すと、新しいグラスを2つ用意し、

そこに氷と、ワイルドターキーをそそいだ。

「リハには、参加しない…大輔たちだけで、やってくれ」

ティアから、グラスを受け取ると、啓介は一口飲み、

顔をしかめる。

「どうかしましたか?」

ティアは、ワイルドターキーのボトルを見、

「お口に、合いませんでしたか?いつも、これをお飲みになられていたので…」

啓介はフッと笑い、

「違うよ…ただ…」

グラスを傾け、

「好きな酒は、変わらないらしい」

「ＫＫ…」

ティアは、啓介の横に座ると、そっと、

啓介の手の甲に、手を重ねた。

「心配するな…」

啓介は、ティアの顔を覗き込み、微笑んだ…。

「俺はもう…」

グラスの中の氷を揺らし…一口飲む。

「戻れない…」

「ＫＫ…」

ティアは、少し不安そうな表情を浮かべる。

啓介の微笑み、

手の暖かさが…

先日までの男とは、違っていた。

女の勘が、告げていた。

この男は、いずれ離れていくと…。

しかし、

それは、許せないことだった。

ＫＫなしでは、ティアの望みはかなわない。

ティアは、啓介の頬に触れた。

香里奈に殴られたところ。

その痛みが、ＫＫを変えていく。

「ＫＫ…」

ティアは、その場所に口づけをして、

そのまま…啓介の胸に両手を添えると、

ゆっくりと、ベットへと啓介と倒れていった。

明日香が、所属するレコード会社の地下。

そこにあるスタジオ内で、

明日香と…アメリカのトップクラスのスタジオミュージシャンが、

集まっていた。

レコード会社の関係者たちは、色めき合い、

所属アーティストたちも、覗きに来ていた。

世界中の数多くの名盤に参加し、多くのアーティストにその音を求められる……

Ｍｒ．Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｓｏｕｎｄと呼ばれる者達。

彼らが一同に揃い、日本にいることは、奇跡だった。

そして、

さらに、見学者を驚かせたのは、

明日香の音だった。

トランペットにつけたワウ・ワウ・ペダル…。

かつて、ロックフェスティバルに参加する為に、

マイルス・ディビスが導入し、

エレキギターのようなサウンドをだす為に、使った道具。

明日香はスタジオの中…吹きまくっていた。

その様子を、見ていたサミーは…ずっと、苦虫を噛み潰したような顔に、なっていた。

３０分程…吹きまくった明日香は、マウスから、口を離すと、

流れる汗を拭った。

「どう？サミー」

明日香は、サミーの方を向いた。

サミーは肩をすくめ、

「お前のことだ…悪くはねえさ…。だが…気に入らねえ」

サミーは、明日香を睨み

「これは、お前の音じゃねえ」

首を横に振ると、

「お前の音は、もっと繊細で、暖かく…その癖、力強い音だ」

明日香は黙って、

サミーの言葉をきいている。

「なのに、今の音は…ただ大きいだけだ！ワウ・ワウは、お前には似合わない」

「サミー。だけど…」

「いつもの音じゃ、啓介と混じり合ってしまうことは、わかっているが…」

サミーは、首を横に振り、

「お前の音じゃない」

明日香は、ワウ・ワウをつけたトランペットを見つめ、

「啓介の音から、みんなを守る為には…これしかないの」

「邪魔する為の音楽か。ケッ！」

サミーは、スタジオを出た。

「明日香…」

他のミュージシャンが、明日香を心配そうに見る。

明日香は微笑みかけ、

「練習を続けましょう」

再びトランペットに、口づけをした。

香里奈は一人、マンションに帰ると、ソファに座り…ぼおっとして

いた。

何も考えていないはずが…

いろんなことが、頭に思い浮かんだ。

ステージ。

小さい頃は…

ダブルケイで。

記憶は薄れているけど…親子で行ったアメリカ。

ニューヨークの小さなライブハウスで、香里奈は歌っていた。

みんなの笑顔。

それは、覚えていた。

この前のコンサート…。

夢中で、覚悟して、上がったけど、

ステージの広さは、覚えていた。

高い天井に、多くの人たち。

「歌いたかったな…」

香里奈は呟いた。

最近まで、何も興味を持てない…無関心な人間だと、自分で思っていたけど、

違った。

好きなことは、わかっていたのに、

無理やり、嫌いにしてたから…、

何も興味を、持てなかったのだ。

志乃の言葉。

歌って。

その言葉が、香里奈の心の壁を壊した。

今まで、せき止めていたものが、

一気に溢れそうだ。

香里奈は立ち上がると、

ＣＤラックから、一枚のＣＤを取り出した。

ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕ。

明日香と啓介のバンド。

聴きたくても、聴きたくなかった音。

香里奈は、ＣＤをかけた。

Ｙａｓａｓｈｉｓａ。

それは、伝説のシングルだった。

この曲が、明日香の始まりであり、

世界中に、知られるきっかけになった曲だった。

啓介たちとのバンドヴァージョンと、

明日香と和美だけのシンプルなアコースティックヴァージョン。

香里奈は感動した。

こんな風に歌いたいと、

初めて、素直に思った。

かつて、

恵子はこれを聴き、

自分をこえた明日香に、涙した。

そして、

今、

これをこえたいと、

香里奈は思った。

世代をこえ、

今、音がつながっていく。

香里奈は、今やっと…歩きだせるのだ。

ダブルケイの営業が終わり…カウンター席で、一人タバコを吸う里美。

明かりを消したステージ。

見つめながら、もの思いにふける。

ゆっくりと、扉が開いた。

「ただいま」

明日香だった。

「おかえり…。今日は、帰らないと思ってた」

明日香は少し、疲れた様子だった。

「和恵がいるからね。できるだけ、目が覚めたときに、そばにいてやりたいから」

明日香は、カウンターに座った。

里美は立ち上がり、カウンターの中に入る。

「飲む？」

「頂くわ」

里美は、いつものお酒をつくる。

ワイルド・ターキー。

２つのグラスを見て、

「あんた、飲めないんじゃ…」

明日香の言葉に、

「一杯ぐらい、つき合うわ」

里美は、グラスを明日香に差し出した。

明日香は苦笑して、受け取ると、

「乾杯」

静かに、グラスを合わせた。

「明日ね…コンサート…」

里美が、呟くように言った。

「うん…」

明日香は、グラスを見つめる。

少し無言で、時が過ぎる。

里美は、カウンターの中から、明日香を見つめ、

やがて、

ため息をつくと、カウンターから出て、明日香の隣に座った。

「明日香…あんたは、変わったわ」

里美は言った。

「対決とかするんじゃなくて、啓介さんがいるところに行って、直接話したらいい！香里奈みたいに、気持ちをぶつけたらいい！」

里美は叫んだ。

しかし、

明日香は、静かに立ち上がると、扉に向かって、歩き出した。

「明日香！」

里美は、後を追おうとしたが…酔いがまわっていた。

思うように歩けない。

「明日香！」

里美を、無視するかのように、明日香はダブルケイを出た。

真夜中の薄暗い照明と、

月明かりの中、

明日香は佇んでいた。

恵子が眠る墓地。

こんな山の中の墓地に、

夜中、来る人はいないと思われるが、

防犯の為、明かりは付いていた。

それに、まだ上の方にも、何軒か民家はあった。

明日香は、恵子の墓を見つめ、

「ママ…。あたし…こわいの…今更だけど…」

明日香は少し…無理やり微笑んだ。

「啓介と向き合うのが…」

風が強い。

明日香の髪が、風になびく。

「絶対生きてると…信じて、今まで来たけど…」

明日香は考えていた。

こういうとき…ママなら、何て言うかしら…。

「アメリカでも、探したけどね…いざ、生きてると知って…確実に、会えると分かっていても…」

明日香は目を閉じ、

「こわいの。生きていたのに…今まで、会いに来なかったということは…もう、あたしに会いたくないのかもしれないと…」

明日香は目を開け、

ゆっくりと言葉を紡ぎ出した。

「でもね…ママ」

明日香の頬を、涙が流れた。

「そんな考えじゃ…ダメなの」

明日香は泣き顔で笑い、

「明日。どういう結果になろうと…あたしは、啓介に会うわ」

出陣

土曜日。

フェスティバルは、朝早くから始まっていた。

会場は、ダブルケイから山を越えた隣の県の

さらに南に、海側の山の麓だった。

電車でも、特急で2時間半はかかる。

「速水さん！」

普通土曜日は休みだが、今日は午前中だけ、授業があった。

片付けをしていた香里奈に、直樹が声をかけてきた。

香里奈は直樹を見、微笑んだ。

「終わったねえ…帰ろうか」

「香里奈ちゃん！」

「香里奈！」

祥子や恵美も、そばにやってきた。

「行くのか？」

恵美がきいた。

香里奈は首を横に振り、

「よ、よく考えたらね…あたし、呼ばれてないのよ。今回は」

香里奈は舌を出し、

「それにチケットも持ってないし…」

香里奈は笑った。

「香里奈ちゃん…」

三人は、香里奈を見る。

香里奈は、三人を見ずに、カバンを持ち、

「帰ろうか」

思いっきりの笑顔を見せた。

「どっちでもいいけど…後悔は、しないように」

４人のそばを、里緒菜が通った。

「里緒菜ちゃん」

里緒菜は振り返り、

「あたし。用があるから、先に帰るね」

里緒菜は、教室を後にした。

「何、あの態度」

恵美は、里緒菜の後ろ姿を睨んだ。

「ちょっと、冷たいわ」

祥子も頷いた。

直樹だけが、無言でいた。

「帰ろうよ」

香里奈は笑顔で、そう言うと、

みんなは教室を出た。

「素直じゃないな」

廊下を早足で歩く里緒菜。

その前方に、壁にもたれかかった和也がいた。

里緒菜は、ちらっと和也を見ると、

「別に」

一言だけ残して、そのまま階段を降りていった。

和也は、その後ろ姿を見送った。

「藤木くん」

祥子が、声をかけた。

和也が振り返ると、香里奈たちがいた。

「和也…」

直樹は、和也に近づく。

和也はフッと笑うと、直樹の肩に手を置いた。

「帰ろうか」

直樹は、少し考えた後、

軽く頷いた。

「……ねえねえ！昨日のテレビなんだけどね」

話題を変える為に、祥子が口を開いた。

４人は、歩きだした。

直樹と和也の前を、香里奈たちが談笑する。

直樹は、香里奈の横顔を見つめた。

まっすぐ、マンションに帰った香里奈は…リビングに入って、

ぎょっとした。

里美がいたのだ。

「おかえり」

「た、ただいま…」

驚く香里奈に、里美は微笑み、

「昼ごはん、つくったから…着替えたら、食べなさい」

「う、うん」

香里奈は慌てて、隣の部屋にいこうとして、

ソファの角につまずいた。

「慌てない」

里美は、料理をテーブルに運びながら、ため息をついた。

着替えを済まし、

ソファに座ると、もう…ちらし寿司が用意されていた。

「うわあ」

感嘆の声を上げると、

「久々だ！」

香里奈は、手を合わせ、

「いただきまあす」

と、箸を持った。

里美はキッチンから、香里奈の様子を見守る。

「ごちそうさまでした」

香里奈が、箸を置くのを待って、

里美は、キッチンから出た。

「あんた…行く気でしょ」

「え？」

お茶を飲もうとした香里奈の動きが、止まる。

「あんたの考えなんて、すぐわかるんだから」

そして…里美は、あるものを手に取ると、香里奈の横に置いた。

「これは…？」

それは、古びた楽器ケースだった。

「これを…明日香に渡してほしいの」

「ママに…？」

里美は、ケースを開けた。

そこには、トランペットが納められていた。

里美は懐かしそうに、トランペットを見つめ、

「これは…あなたのお爺ちゃんが、使っていたもの…そして、明日香が受け継いだトランペットよ」

香里奈は、トランペットに触れた。

冷たいはずなのに、

とても暖かく感じた。

里美は、トランペットを見つめながら、

「これは、あの子のｖｏｉｃｅだった…。だけど、啓介さんと離れ、バンドを解散してから…ずっと店にしまってあったの」

里美は、トランペットに触れている香里奈の手の上に、自分の手を重ねた。

「明日香に、届けてあげて…あの子の声を」

「うん」

香里奈は、頷いた。

二人は、そっと手を離すと、

ケースを閉めた。

「里美おばさん」

香里奈は、立ち上がった。

手にケースを持って、

「ありがとう」

里美は微笑み、

「気をつけて、いってらっしゃい」

「いってきます！」

香里奈は、里美に敬礼すると、

風のように、

マンションを出ていた。

香里奈を見送った後、

里美は、深々とソファに腰掛けた。

「まったく…親子揃って…世話がかかるんだから…」

里美は、タバコを取り出した。

マンションの入り口をでて、
最寄りの駅へと歩く香里奈に、誰かが声をかけてきた。
「香里奈さん」
香里奈は、キョロキョロと周りを探した。
駅の入口近くに、いつも笑顔の直樹がいた。
「ナオくん…」
香里奈さんと、あまり言ってくれないから、
最初、直樹だと思わなかった。
「やっぱり行くんだね」
直樹はまだ、制服のままだった。
どうやら、みんなと別れてから、
ずっと駅前で、待っていたみたいだ。
「どうして…」

直樹は、やさしく微笑み、

「これを渡したくって…」

直樹は、一枚の封筒を、香里奈に差し出した。

「これは…？」

「開けてごらん」

香里奈は、封を開けた。

中から、一枚のチケットが出てきた。

「これって…」

「今回のロックフェスティバルのチケットだ。もう完売して、プレミアがついてる」

香里奈は、チケットをまじまじと見つめ、

「どうして、これを…」

「和也が言ってた…今回は、時祭グループが、メイン主催者じゃないから、チケットが手に入らないと」

「時祭？」

香里奈には、聞き覚えのない名前だった。

「だけど…今回の主催者の一人に…彼女の実家が入っている」

「彼女？」

香里奈は、首を捻る。

「チケットの一番下を、見てごらん」

香里奈は、チケットの下の方に書いてある主催者の名前を見た。

「如月……如月って！？」

香里奈は、はっとして、

直樹を見た。

直樹は頷き、

「如月さんの実家だ」

全国チェーンの飲食店を、経営する如月チェーン。

里緒菜の実家の会社だ。

「如月さんから、香里奈さんに渡してくれと…」

「里緒菜が…」

「あの子は…どうせ、とめようが…チケットがなかろうが、行く子だからと」

直樹は、香里奈に少し近づき、

「時間がないんだろ」

香里奈はチケットを握りしめ、深く頷いた。

「行こうか」

駅の中に入ろうとする直樹を、香里奈は止めた。

「ナオくん…ごめん。あたし、一人で行きたいんだ」

「え？」

直樹は、香里奈の顔を見た。

その真剣で、強い決意を持った表情に、

直樹は、納得した。

「わかった…。いってらっしゃい」

直樹は足を止め、香里奈に道を開けた。

「ごめん」

改札の中に、消えていく香里奈を、見送る直樹。

改札を通った香里奈の足が、止まる。

「ナオくん…」

香里奈は、振り返る。

「帰ったら、デートしょうね」

突然の香里奈の提案に、少し驚きながらも、直樹は頷き、

「うん。デートしょう」

「初デートだね」

「そうだね」

「楽しみ」

「俺もだ」

「ナオくん」

香里奈は、手を振る。

「いってきまーす！」

香里奈は一気に、ホームまで走った。

手に、楽器ケースと、

チケットを握り締め…。

今、

香里奈は旅立った。

憧れ

大きく息を吐くと、

明日香は、ワウ・ワウ・ペダルをつけたトランペットを構えた。

こんな場所が、あったのか。

狭い日本に。

何十万人という人々の熱気と興奮が、

チリチリと、明日香の肌を刺激した。

遠く見えるＡステージでは、

啓介たちが、スタンバイしている様子が、わかった。

「いきましょう」

後ろに、控えるトップミュージシャンの方を、チラッと見ると、

明日香は、ステージに向かって、一歩…足を踏み出した。

これ以上はない晴天の空に、

ひんやりした空気が、気持ちよかった。

緊張はない。

明日香は、トランペットを銃の如く、
前に突き出した。
「啓介…」
明日香は呟くと、目をつぶり、
トランペットのマウスに、口づけた。
それは……向こうのステージで、啓介がサックスをくわえたのと、
ほぼ同時だった。

チケットを、入り口で渡すと、
香里奈は、だだっ広い会場に飛び込んだ。
興奮状態の観客をかき分け、
香里奈は、明日香のいるＢステージまで急ぐ。
観客のほとんどは、啓介がでるＡステージに、注目していて、
ｂステージは比較的、空いていた。

何とかステージ近くまで、近づいた時、

明日香が、ステージに上がる姿が見えた。

「ママ…」

香里奈は、明日香を見上げながら、

ステージと観客を遮っているロープを伝い、スタッフ通路へと近づく。

ステージを守るガードマンを尻目に、向こうへ渡る隙を探すが…ない。

香里奈は仕方なく、

堂々と、ロープをくぐることを決めた。

ステージの脇まで来ると、香里奈はロープの下に、潜り込む。

すぐに、ガードマンが止めにくる。

香里奈は逃げずに、逆に…ガードマンの腕をつかんだ。

驚くガードマンに、

香里奈は、耳元で囁いた。

演奏が、始まっていないとはいえ、周りの雑音は、凄まじい。

「あたしを…母の所まで連れていって」

ガードマンは訝しげな表情をしたが、

「あたしは、速水明日香の娘です」

香里奈は、強い意志の瞳を向けた。

香里奈は、一般の人々が入れない関係者だけの…簡易プレハブに通された瞬間、

2つの音の塊が、ぶつかり合った。

観客が、歓喜の声をあげる。

一つは啓介。

もう一つは…。

「ママ!?」

香里奈は思わず、声を上げた。

「これは…」

ガードマンがスタッフに、香里奈の確認をとっていた。

「そんな予定はないと…」

ガードマンたちの話を無視し、香里奈は音にだけに、耳を澄ませた。

「これは…ママの音じゃない…」

香里奈は絶句した。

明日香の音は、普段とまったく違っていた。

「こんなの…ママの音じゃない！」

香里奈は叫んだ。

「そうねぇ…ご、こんなじゃない」

少しかすれた声がした。

「せんせいのおどじゃない」

香里奈は、声の方を見た。

「かりな」

スタッフの中から現れたのは、

少しやすれてはいるが…

「志乃ちゃん…」

紛れもなく、天城志乃だった。

志乃は喉を押さえると、何度か咳払いをした。

「志乃ちゃん…どうして、ここ？」

「もともと…あたしがでるはずのコンサートだから…」

志乃は、ステージの方を見つめた。

壁で、向こう側は見えない。

志乃は、フッと笑う。

香里奈は、志乃の横顔を見つめ、

「体は大丈夫なの？」

志乃は、香里奈の方を見ると、

微笑み、

「おかげさまで…声以外は、大丈夫」

香里奈は、黙り込んだ。

かつては、天性の歌声と言われた声が…。

そんな香里奈に近づき、

志乃は抱きしめた。

「大丈夫。あたしは負けないから」

志乃は、ぎゅっと抱きしめ、

ゆっくりと離れた。

「香里奈ちゃんに、渡したいものがあるの」

志乃は、香里奈の腕をつかむと、

女子トイレに連れて行く。

「あたしの楽屋…今回はないから…」

かすれた声ながら、

志乃は、嬉しそうだった。

紙袋を、香里奈に押し付けると、

「これに着替えて…」

香里奈は、トイレの中に入ると…

着ていたジャケットと、Tシャツを脱ぐと、紙袋内を確認した。

「？」

香里奈は、首を傾げた。

トイレから出てきた香里奈の姿に、志乃は頷いた。

「やっぱり似合ってるわ」

「これは…？」

香里奈は、洗面所の鏡に映る自分の姿を眺めた。

赤いドレス…

真紅のドレス。

志乃は、感嘆のため息をついた。

「昔から思っていた…」

志乃は、香里奈の後ろに立ち、

「あんたは…似てるわ」

「誰に？」

志乃の目が、遠くを見る。

「真紅の歌姫…河野和美。あんたのおばさんよ…」

「か、和美おばさん…？」

香里奈は、会ったことがない。

香里奈が生まれる前の年に、亡くなっている。

「あたしが憧れた…最高の歌手…」

志乃は、ドレス姿の香里奈のうっとりと見つめ、

「あたしが、ファンだったから…明日香先生が、あたしがステージデビューする時に、くれたの」

「ママが…」

「でも…まだ一度も着たことがない…。まだ、あたしには、その資格がないから…」

志乃は、悲しげに笑う。

「志乃ちゃん…」

志乃は、香里奈の両肩を持つと、

体を、トイレの外へ促した。

「香里奈ちゃんは、資格があるわ」

志乃は、ぽんと背中を押す。

「いってらっしゃい。みんなが、待ってるわ」

「志乃ちゃん…」

香里奈は、志乃の方に振り返った。

「さっさと行きなさい」

志乃は笑顔で、香里奈を送り出した。

通路を走っていく香里奈の後ろ姿を、見つめながら、

志乃はため息をつき、壁にもたれかかり、

軽く笑うと、

「チクショウ…」

そう呟いた時には、志乃は泣いていた。

本当は、

あたしが着て、

あたしが歌いたかった。

なのに…。

何が、

歌姫よ。

「あたしは…」

志乃は、そのまま崩れ落ち、

その場で、泣き崩れた。

お客が、こちらを見ていない。

遠く離れたステージの音に、惹かれている。

明日香は、絶望を感じ始めていた。

どんなに吹いても、

誰にも届かない。

初めての感覚だった。

バックのミュージシャンも、冷や汗を流し、焦りを感じていた。

「これ程とは…」

ステージの袖で、サミーは唖然としていた。

何とか、意識を保とうとしなければ、

意識が、持って行かれそうになる。

アメリカで聴いたときより、数段凄くなっている。

成長している。

「啓介」

サミーは、遠くのステージを睨んだ。

「明日香…」

明日香の後ろめたい…

こんな音では勝てない。

苦しそうな明日香を、

サミーには、どうすることもできない。

サミーは、拳を握りしめた。

その時、サミーの横を、

赤い影が、通り過ぎた。

サミーは、横を見た。

そして、

目を丸くした。

「恵子…」

ちらっと見えた横顔は、遠い日に、

サミーが、出会った女に似ていた。

生まれたばかりの啓介を、アメリカまで迎えに来た…

一人の女。

若く美しい女。

香里奈は、楽器ケースを抱え、ステージに上がった。

真紅のドレスをなびかせて。

「ちがう。あれは…」

サミーは、目を凝らした。

香里奈は、激しいリズムに、トランペットを吹き続ける明日香の前に立つ。

明日香は、大量の汗をかき、目をつぶりながら吹いている為、

香里奈に気づいていない。

香里奈は、ステージ横に置いてあったマイクを、拝借していた。

楽器ケースを置く。

マイクを少し叩き、音がつながっていることを確認すると、

大きく息を吸い、

思いっきり、

「あああああああああああああ！」

と叫んだ。

甲高い叫び声が、会場全体を包み、

あらゆる音を凌駕した。

観客は、はっとして、反射的に、

Bステージを見た。

啓介もまた、

その存在に気づいた。

明日香は、目を開けないが、ぴくっと反応はしていた。

しかし、

啓介も明日香も、互いの演奏をやめない。

香里奈は、そんな2つの音の狭間で、静かに、頭を下げると、

歌い始めた。

荒れ狂う啓介のサックスと、
激しい明日香のトランペットを、
無視するかのように、ゆっくりと、言葉を語り出す。
「日本語？」
サミーは驚いた。
曲は知っていた。
サミーは震えた。
「Ｙａｓａｓｈｉｓａだ…」
それは、昔…
和美の残した遺作に、
明日香が手を加え、完成させた曲だった。
静かなバラード。
爆音の中。
香里奈は一人、

バラードを歌う。
やさしく、丁寧に。

「そうだ…」

サミーは、涙を流していた。

「これなんだよ！明日香」

何も、大きな音に対抗するのに、
同じく大きな音で、対抗することはない。
人の耳は、爆音の中でも、大切な音を聞き分ける。
そして、
他の音を、遮断することができる。
美しく、心地よく、
やさしく…語りかけてくる音ならば。
啓介たちの音は凄いが、
語りかけてはいない。

「畜生…俺は言葉はわからないけど…お前らはわかるんだろ…」

サミーは、涙を拭った。

観客の狂ったような騒ぎ方が、少し治まってくる。

そして、

何とも言えないざわめきに変わり、次第に…静かになっていく。

「歌だ…素晴らしい歌だ…」

サミーは、もう拭うことをやめた。

涙はどうせ、

止まらないから…。

今、

香里奈は歌手として、

目覚めようとしていた。

周りの変化に気づき、

明日香は、目を開いた。

目の前に、何万人もの視線を感じる。

しかし、

それは、明日香に向けられたものではなかった。

「香里奈…」

思わず…トランペットを、唇から離した明日香。

マイクを持った香里奈が、

明日香の目の前にいる。

そして、広い会場にいる観客は、

明日香でも、啓介でもなく、

香里奈を見つめていた。

明日香は、演奏をやめる。

バックのミュージシャンも、演奏をやめていた。

香里奈はアカペラで、

やがて、

Aステージから聴こえる啓介の音に合わせて、

言葉を紡ぐ。

啓介の音とやりあうでも、溶け合うでもなく、

包み込むように。

啓介の音はいつしか…

単なる伴奏になっていた。

音のドラッグといわれた、

その音は…

すべての毒素が、香里奈の歌声によって、

消えていく。

香里奈の歌が、終わるとともに、

啓介の演奏も終わる。

会場が、静まり返る。

香里奈は一歩、前に出る。

そして、深々と頭を下げた。

その刹那、

会場は、大きな拍手に包まれた。

明日香は・・・自嘲気味と笑うと、

ゆっくりと、香里奈に近づいた。

「ママ」

香里奈は、満面の笑顔を明日香に向ける。

そして、

足元に置いてある楽器ケースを、明日香に差し出す。

少し驚きながらも、

明日香は、ケースを受け取り、

中から…トランペットを取り出した。

明日香は、今手にしているワウ・ワウ・ペダル付きのトランペットから、マウスを取ると、下に置いた。

そして、

懐かしきトランペットに、マウスをはめる。

「曲は？」

明日香の問いかけに、

「Ｌｉｋｅ　Ｉ　Ｌｏｖｅ　Ｙｏｕ」

香里奈は、明日香に告げた。

それは、志乃と大輔が書いた曲だった。

それは…自分に音楽を教えてくれた先生であり…去っていったバンドメンバーに…

憎悪と寂しさ…

悲しさと、

自分達が、元気にやっているという報告を。

「ＯＫ」

明日香は、一言そういうと、トランペットに口づけをした。

暖かく、包み込むような音。

先程の香里奈と、同じ感触の音。

「これだ」

サミーは、何度も頷いていた。

バックが、明日香に続いた演奏を再開する。

香里奈は歌い出す。

暖かく、

穏やかな風が、吹き始めた。

「俺の…俺達の歌…か？」

ひたすら、ギターを弾いていた大輔の手が止まる。

大輔だけじゃなく、

すべてのメンバーが、動きを止め、

Ｂステージを見つける。

観客も…全員が、向こうのステージを見ていた。

演奏をやめていた啓介は、その様子を見、笑みを浮かべると、

そのまま天を見た。

陽は、落ちかけているが、

どこまでも青い空。

啓介は、ゆっくりと歩きだした。

暖かい音をバックに、ステージを降りる。

遠くで、陽も落ちていく。

もうすぐ夕焼けに変わる。

祭りの後

「ＫＫ！」

ステージを降りた啓介に、ティアが駆け寄る。

「どういうことですか？なぜ、演奏をやめたのですか！」

凄い形相で、啓介に詰め寄るティアに、

「もう終わったんだよ」

啓介はティアを見、

「もう…すべてが終わった」

「な、なに言ってるんです！まだ終わっていません。演奏を続けて下さい」

啓介は、首を横に振り、

「もう…薬の効き目もなくなった…」

啓介は、香里奈たちの音がきこえる方を見た。

「ワクチンができたしね…」

「ははははは…」

ティアは笑い出す。

「ワクチン！？」

頭を押さえ、

大声で笑う。

「こんな音が！こんな生温い音が！ワクチン！？」

啓介は、ただティアの様子を見つめる。

「そうだとしても、そのワクチンというものは、一人だけ！この国以外に、いないわ」

啓介は、視線をティアから外した。

「そのワクチンによって…ＫＫという病原体は、死滅した」

啓介は、ゆっくりと出口に向かって、歩き出す。

「もう存在しない」

「ＫＫ！！！」

ティアは絶叫した。

「死滅した？…だったら」

ティアは、啓介に向かって、走った。

「もう…いらないわ」

振り返った啓介の脇腹に……突き刺さった。

「ティア…」

「あなたが悪いのよ」

冷ややかな笑みを浮かべ、離れるティア。

啓介は、その場倒れ込んだ。

「ティア…」

小さなナイフが、

脇腹に突き刺さっていた。

ティアはまた、大声で笑うと、

一瞬で無表情になり、

「さよなら…啓介」

長い髪を翻し、啓介の横を通り過ぎ、
そのまま、
通路の奥に消えていった。

「やれやれ…」
そばで、その様子を見ていたジャックが、肩をすくねながら、
啓介に近づいてきた。
「女は、こわいね～役に立たなくなったら…ぐさっか…」
啓介を見下ろしながら、
ジャックは、タバコに火をつけた。
「まあ、俺はあんたに儲けさせてもらったし…楽しかったぜ。礼を言うよ」
ジャックは、しゃがみ込み、啓介の顔に、煙を吹きかけた。
「ナイフは、抜かない方がいい」

にゃっと笑うと、

ジャックは立ち上がり、

「あんたのおかげで、音楽にも興味を持てた。まだまだ…金になりそうだ」

ジャックは歩き出す。

「もし、助かったら…また会おう。業界で」

ジャックは手を上げ、そのまま消えていった。

会場は一体になり、

大歓声がわく中、

香里奈の喉の調子が、おかしくなってきた。

もう七曲目だ。

久々に使う喉。

大観衆のため、声を張り上げていた。

咳払いしても、なおらない。

そんな香里奈の肩にそっと、
明日香は、手を置いた。
振り返った香里奈に、明日香は微笑み、
トランペットを下げると、
スタッフが、ステージにマイクスタンドを持ってくる。
明日香は、マイクに向かって、静かに…言葉を語り出す。
透き通った歌声、
真っ直ぐな歌声。
香里奈は横で、歌う母親の姿を見つめ、
ただ聴き惚れていた。
間奏になると、
明日香は、トランペットを吹く。
淡く、

力強く。

繊細な歌声と、力強いトランペットの音色。

その対比が、

明日香というミュージシャンの持ち味だった。

格好いい。

香里奈は心の中で、明日香に叫んでいた。

そして、

心がうずいてくる。

香里奈は、マイクを握りしめ、

トランペットを外し、また歌い出す明日香に合わせて、

香里奈も歌い出す。

二人の声が絡み合い、

夕焼けの空を、駆け抜けていった。

脇腹を上着で隠し、

何とか立ち上がろうとするが、痛みで動けない。

顔をしかめて、呻いていると、

「啓介さん…」

大輔が、ステージから降りてきた。

他のメンバーもいる。

「あのお…演奏は…」

大輔たちは、啓介の状態に気づいていない。

啓介は笑顔を見せ、

「終わりだ…」

少し立ち上がった。

決して、表情に出さない。

それにステージ袖は、電気がついてなく、暗かった。

下に落ちている血痕も、見えないはずだ。

「啓介さん?」

様子が、おかしいと気づいて、近づこうとする大輔を、
啓介は制した。
「お前たちは！いくところがあるだろ」
大輔は驚き、
「俺たちは」
「ＬｉｋｅＬｏｖｅＹｏｕは、もうないんだよ」
啓介は、大輔を見た。
「啓介さん…」
悲しく微笑む啓介の姿に、大輔は足を止め、
顔をしかめると、
涙を流した。
「失礼します」
深々と頭を下げると、大輔は通路に向かう。
他のメンバーも、次々に頭を下げ、消えていく。

全員が、いなくなった時、

啓介は壁にもたれ、

そのまま崩れ落ちた。

「明日香…」

そう呟いて。

遠くで、香里奈の歌声が聴こえた。

遠退いていく意識。

啓介は、倒れていく。

もう手で、支える力もない。

そのまま眠るだけだ。

そう思った瞬間……

啓介の体は、誰かに受け止められた。

華奢な体だが、

暖かく、

懐かしく、
愛しい。
「やっとたどり着いた」
啓介の薄れた視界の中に、飛び込んできたのは…。
「明日香…」
顔を、涙でいっぱいにした明日香だった。
「もう大丈夫だから…今、救急車を呼んだわ」
明日香は、啓介を支え、
「さっき、大輔に会ったの。あなたの様子がおかしいと…」
それを聞いて、啓介はフッと笑った。
「あいつ…」
「あまり…しゃべらない方がいいわ」
「明日香…俺は…」
「今はしゃべらないで」

「俺は…俺は…酷いことをした…」

「啓介…しゃべらないで」

「お前を…裏切った…」

「…」

「お前を裏切った！」

明日香は目をつぶり、

「そうね…酷いことをしたわ」

「明日香…すまない」

「何が酷いって…あたしに何も言わず、姿を消したこと！」

明日香は、啓介を抱きながら、

「勝手に消えたことよ！」

「明日香…」

「あたしたちは、家族なのよ！一人で背負わないで」

「俺は…裏切った…。お前に…お前たちに…許されるはずもない」

「許すも、許さないも…」

明日香の瞳は、涙を止めない。

「あたしはまだ、何もきかされてないわ！」

明日香は叫んだ。

「夫婦なの！家族なの！恋人なの！そして」

明日香は、啓介を少し離し、

啓介の顔をのぞいて、

「大切な人なの」

思い切り微笑んだ。

大勢の人が、走ってくる音がした。

「明日香…」

啓介の体から力が抜け、

いきなり重くなる。

「啓介！！」

明日香が絶叫する。

通路から、救急隊員が飛び込んできた。

明日香から、啓介を引き離すと、

救急隊員は、上着を脱がせた。

出血が酷い。

「タンカーを！」

急いで、啓介をタンカーに乗せると、

「急げ！出血が酷い」

「啓介！」

タンカーで運ばれる啓介に寄り添い、

明日香は走った。

もう…啓介の意識はなかった。

通路を走りながら、

「啓介！」

明日香は、何度も叫んだ。

遠くで、夕陽が沈んでいく。

香里奈は、最後の照り返しを、眩しそうに見つめながら、

最後のフレーズを、歌い終わろうとしていた。

啓介が去ったステージは、次のバンドの準備をしていた。

人々の笑顔と歓声…。

そして、

拍手の中、

香里奈は、深々と頭を下げた。

今までの人生で、

これ程、人に喜ばれたことを、自分は…したことがあっただろうか。

ドラムが、最後のフレーズを叩いた。

「ありがとー！」

香里奈は、心の底からの感謝の気持ちを叫んだ。

思い切り手を振りながら、香里奈はステージを降りた。

また戻ってこよう。

香里奈は、そう決意した。

「香里奈！」

ステージの袖に戻ってきた香里奈を、

サミーは、思い切り抱きしめる。

「え？」

見知らぬ黒人のお爺さんに抱きしめられ、

香里奈は戸惑う。

「俺だ！覚えてないのか！小さい頃に、何度も会っただろ」

もちろん英語だ。

香里奈に、わかるはずがない。

「香里奈」

通路から、志乃が姿を見せた。

「志乃ちゃん！」

香里奈は、サミーの腕の中からすり抜け、志乃に駆け寄った。

「Ｏｈ、Ｍｙ　Ｇｏｄ」

サミーは、頭を抱える。

その様子を見て、志乃が笑う。

「志乃ちゃん…ありがとう」

志乃は、ドレス姿の香里奈を眺め、

「よかった。最高だった」

志乃は微笑んだ。

アンコール！

アンコール！

アンコール、アンコール、アンコール！

香里奈が、去ったステージに、アンコールの声がこだましていた。

「香里奈…」

志乃は、香里奈に微笑み、

「いかないと」

しかし、香里奈は、首を横に振った。

「もう…喉が限界…」

「でも、いかなきゃならないの。それが、歌手」

志乃は、ステージの方を見つめた。

少し寂しげな瞳。

そんな志乃を見た香里奈は、

志乃の手をつかんだ。

「いこう！志乃ちゃん」

「え！？」

驚く志乃を、

香里奈は無理やり、引っ張っていく。

「あたし…もう歌えない…」

抵抗する志乃に、香里奈は言った。

「大丈夫！志乃ちゃんなら、歌える」

香里奈は、真剣な眼差しで志乃を見、

つかむ手に力を込めた。

「歌えなくても、歌える！志乃ちゃんなら」

「香里奈…」

「いけよ」

その様子を見ていたサミーは、志乃に向かって言った。

「サミー…」

志乃は、英語が話せる。

「今行かなきゃ、一生いけないぞ」

「でも…」

「お前は、シンガーだろ？」

サミーは、志乃の肩を叩いた。

香里奈は、何を話してるのかわからないが、

理解はできていた。

「その辺の…歌が上手いだけのやつと、真のシンガーの違いはな…
ただ一つだ」

サミーは、志乃の目を見つめ、

「待ってる奴…ファンがいるかだ。今、歌えなくても、待ってるフ
ァンがいる奴だ」

サミーは、にっと笑った。

「でも…コンサートはあたしの…」

「行きゃわかるさ。わからんかったら、やめちまえ」

サミーは、志乃の背中を押した。

「志乃ちゃん！」

香里奈は、志乃の手を引いて、再びステージに戻った。

「香里奈…」

香里奈と志乃が、ステージに上がった瞬間、

いや、

志乃の姿を見た瞬間、

会場に、今日一番の大歓声がわき起こった。

「志乃だ！」
「志乃ちゃんだ！」
「志乃！」
「志乃ちゃん！大丈夫！」
「志乃！」

大声援が、会場にわき起こる。

「みんな…」

志乃は、手で口をおおい、
嬉しさから、涙を流した。

「ありがとう」

香里奈は、マイクを志乃に渡すと、

静かにステージを降りた。

志乃は、マイクを握りしめ、

「みんな、ありがとう…」

かすれた声が、さらに声にならない。

「志乃！」

「志乃！頑張れ！」

「大丈夫だ！」

志乃は涙を拭うと、

マイクをしっかりとにぎり、

「今は歌えないけど…絶対、次に、みんなと会うときは、歌います！」

志乃は、会場のすべての人を見回す。

「例え、声が出なくても…絶対！歌います！」

志乃は叫んだ。

そして、誓った。

歌い続けると。

観客の全員が、拍手する。

気づけば、向こうのステージのバンドも拍手していた。

志乃は初めて…

歌手であることを、自覚した。

才能に溺れた…今までの自分…。

今までは、本当の歌手ではなかったと。

「いい歌手…いい女になるな…あいつは」

サミーは、志乃の様子を袖から眺めていた。

「志乃…」

後ろから声がして、サミーが振り返ると、

大輔たちがいた。

ステージから、香里奈が降りてきた。

「？」

香里奈は、大輔の顔は知っていた。

頭を下げた。

「香里奈…」

大輔は、香里奈の姿を認めた。

そのまま、通路へと向かおうとする香里奈に、

大輔は声をかけた。

「さっき、明日香さんに会ったよ。啓介さんの様子がおかしかったから、伝えておいた」

「パパの？」

香里奈は、大輔に振り返った。

大輔は頷き、

「急いだ方がいい」

「明日香と啓介に何かあったのか！」

単語だけで、サミーにはわかったらしい。

大輔は、サミーにも頷いた。

「香里奈！いくぞ」

香里奈を追い越し、

香里奈よりも慌てて走る。

「あっ、はい！」

訳がわからないまま、香里奈も走った。

「パパ…ママ…」

ステージを降りた志乃の前に、

大輔たち…バンドメンバーがいた。

「みんな…」

志乃は、少し驚いていた。

「どうしてここに…」

大輔は、バツが悪いそうに、頭をかき、

「お、俺たち…職にあぶれたんだけど…」

大輔は、恥ずかしそうに、

「誰か…雇ってくれないかな…いいボーカリストに」

ちらっと、志乃を見た。

志乃は苦笑し、

「歌えない歌手なら…一人知ってるけど?」

志乃は腕を組み、

そして、

また苦笑する。

「まあ…何とかなるだろ」

大輔は肩をすくめ、

「俺の作曲能力があれば」

「な！」

志乃は絶句し、

「もう雇ってあげない！」

フンと、そっぽを向いた。

大輔は慌てて、

「冗談だよ。冗談！」

「こんなときに言う冗談じゃないわ」

「ごめん！許してくれ！」

その様子を見ながら、

他のメンバーは思った。

何とかやっていける。

いや、

昔以上のバンドになると、確信した。

「…で、どうするの？」

「まだわかんない」

直樹の質問に、

香里奈は、鞄を振り回しながら、こたえた。

学校の帰り道。

もう日が沈むのが、早い。

真っ赤な夕焼けの中、

前を歩く…香里奈の後ろ姿を見つめながら、

直樹は、ため息をついた。

突然、

香里奈は、足を止めた。

勢いよく、振り返り、

「ねえ。ナオくん」

「な、何？」

直樹は、目をパチパチさせてた。

香里奈は、直樹に近づき、
顔を、

直樹に、近づけてくる。

「な…」

びっくりする直樹の視線は、近付く香里奈の唇に、吸い寄せられる。

思わず、唾を飲み込んだ直樹に、

香里奈は、

にっと微笑んだ。

「今日、あたし…店で歌うんだ！見に来ない？」

「ああ…」

直樹は、がくっと肩を落とした。

「はあ～」

また…ため息をついた直樹は、

先を歩いていく香里奈に追い付く為、走ろうとした。

「すいません」

いきなり横の道から、

誰かが飛び出してきた。

「ご、ごめん。大丈夫！」

直樹のぶつかったのは、

同じ学校の

知らない生徒だった。

ぶつかった生徒は、

さらさらした真っ黒な髪に、黒く大きな瞳を持った

女の子だった。

女の子はじっと、
直樹を見つめていた。
瞳の奥まで、見ようとするように。

「あ、あのお…」

あまりにも…長い時間見つめるから、
直樹は、知ってる子かと…思い出そうとした。
けど、見覚えがない。

「ナオくん！」

付いてきていない直樹に気づいて、香里奈は、遠くから叫んだ。

「あ！」

直樹は、女の子から視線を外した。

その瞬間、

女の子は、直樹が来た方向に走り出した。

学校の方へ。

「ナオくん！」

香里奈は叫んだ。

直樹は慌てて、香里奈のもとに走った。

「知ってる子？」

「知らない…と思う」

「ふ～ん」

香里奈はまた、歩き出した。

直樹は首を傾げ、歩き出した。

その様子を、

走り去ったはずの女の子は、見ていた。

遠くから、じっと、

二人が去っていくのを。

「いらっしゃい！飯田くん」

「こんばんは」

ダブルケイの扉を開けると、カウンターの中から、里美が声をかけてきた。

「おかえりー！お姉ちゃん！」

カウンターに座っていた和恵が、香里奈に走り寄った。

「ただいま。和恵」

香里奈は、和恵を抱きしめた。

「遅いぞ。二人とも」

奥のテーブルに座っていた祥子が、振り返り、香里奈たちを睨む。

「さては…寄り道してたなあ」

「まったく…自分のライブがあるからと、招待しておいて」

恵美は、ステージを眺めながら言った。

ステージ上では、

武田に、原田、

そして、阿部という…

かつてのダブルケイのメンバーが、揃っていた。

普段なら、まだ準備中だが……今日は、特別のシークレットライブがおこなわれる。

テーブル席は満席。

すべて、昔からの常連か、知り合いしかいない。

「着替えてきまーす」

慌てて、香里奈はステージ横の扉を開けて、二階へと向かった。

直樹は、安堵の息をつくと、みんながいる席へと、歩いた。

「ごめん…ていうか！みんな、知ってたんだ」

席には、祥子と恵美、

そして、和也と里緒菜がいた。

直樹が座ると、

「ああー！結局…明日香さんに、会えなかったなあ…会いたかったなあ」

祥子は、テーブルに頬杖をついて、ブーブー言った。

「仕方ないでしょ…忙しいんだから」

里緒菜が言った。

「でも、帰ったの～昨日でしょ～」

祥子はまだ、文句を言っている。

そんな話をしている間に、着替えた香里奈が、ステージに上がる。

暖かい拍手が、わき起こる。

香里奈は、頭を下げる。

衣装は、赤いドレスだ。

もちろん、和美の服。

カウンターで、ドリンクをつくっている里美は、

ちらっと、ステージ上の香里奈を見て、呟いた。

「まったく…衣装だけは、立派なんだから…」

香里奈は、ベースの阿部に近づき、曲名を告げた。

阿部が頷くと、

原田が、軽快なピアノを奏でる。

曲は、枯れ葉。

それも、晩年のサラ・ボーンのヴァージョンに近い…。

全体的に歌うというより、スキャットで叫ぶ。

まるで、声という楽器のように。

直樹は、ステージ上の香里奈を見つめていた。

それは、恋人を見守る…

やさしい瞳ではなく、

どこか悲しく…

寂しそうだった。

ライブが、行われる前日。
香里奈たちは、空港にいた。

あのロックフェスティバルから、
1ヶ月以上がたっていた。

「じゃあ、行ってくるからね」
明日香は香里奈と、
香里奈の手を握る和恵に、微笑んだ。

「今回は、できるだけ…早く帰ってくるから」
明日香はしゃがみ、和恵の頭を撫でた。
「お姉ちゃんの言うことをきいて、大人しく、いい子でいるのよ」
明日香の言葉に、頷く和恵。
明日香は立ち上がり、
「香里奈」

「ママ…」

明日香が、何か言おうとした時、

明日香の携帯が鳴った。

明日香は、画面を見て、

ため息をつきながらも、電話に出た。

「はい」

そっけない返事に、電話をかけてきた主は、文句を言う。

「何だ?その氷のような冷たい言い方は」

「別に、冷たくなんてないわ」

「こんな風じゃーかわいい女と、思われないぞ」

「大丈夫よ。サミーにだけだから」

「Ｏｈ　Ｍｙ　Ｇｏｄ!」

サミーは、大げさに嘆く。

「なんてこった…お前というおん…」

サミーが、まくし立ててる途中…明日香の携帯を、横から、取り上

げた。

「サミー…誰の携帯にかけてるんだ?」

「Ｗｈａｔ!?」

「まったく…よく電話をかけてくるとは、きいていたが…」

「け、啓介!べ、別にいいじゃないか…た、たまの電話だぞ」

啓介にかわったことに気付き、焦るサミーに、

啓介は呆れ、

明日香に携帯を返した。

明日香は、苦笑しながら、

「というわけで、電話切るわね」

「明日香!電話のことは、啓介に言うなと言っ」

「じゃあ、ニューヨークでね」

サミーの話の途中で、明日香は電話を切ると、

ため息をついてから、啓介を睨んだ。

「あなた!どこ行ってたの」

「ご、ごめん。ニューヨークにいくから…スタジオのみんなにお土産を買うの忘れてて…」

啓介は頭をかいた。

明日香は、ため息をついた。

「じゃあ、香里奈、和恵。ママ達行ってくるね」

明日香と啓介は……啓介が、ＫＫとしてやってしまったことの償いにいくのだ。

ＫＫというドラッグに、はまった人々を、もとに戻すために。

啓介いわく、

狂わすことができたなら、

癒やすことも、できるはずだと。

「まだ…すべてが、終わった訳ではない」

啓介は、脇腹の傷をおさえた。

突き刺さったナイフは、奇跡的に、致命傷にもならず…内臓も、傷つけてはなかった。

「でも、必ず終わらせてみせる」
啓介は誓った。

香里奈のライブが終わり、
里緒菜たちと別れ、
和也と直樹は、二人…家路を歩いていた。
ダブルケイから、家まで、時間にして、歩いて15分くらいかかる。

「どうした?直樹」
和也は、直樹の様子がおかしいのに、
気づいていた。
俯き加減で、どこか暗い表情の直樹。
返事がない。
「直樹!」

和也は、直樹の腕をつかんだ。

直樹は、顔を伏せたまま、

笑い出した。

大声で。

「直樹…」

和也を見ずに、顔を押さえながら、直樹は言った。

「輝いてた太陽が、大好きで…手を伸ばしてた」

直樹の笑いが…

変わっていく。

「それなのに…届きそうに思えた太陽は、あまりにも、眩しすぎて…」

直樹は、泣いていた。

「俺なんかとは、釣り合わない…」

「直樹！」

直樹は、和也の手を振り解くと、

「別れた方がいいのかもしれない…俺なんかとは…」

そう言うと、直樹は走り出した。

「直樹！待て！」

和也の言葉も無視して、

直樹は、

もう暗くなった夜の中に、消えていった。

もう一つ血筋

「失礼しました」

頭を下げ、去っていく少女を、

感心したように、光太郎は見ていた。

とある料亭で、

光太郎は、得意先の会長と会っていた。

「よくできたお孫さんで。しっかりなさってらっしゃる」

光太郎は、会長にお酌をしながら言った。

「自慢の孫です。まだ高校生なんですが」

会長は、ぐいっと一気にオチョコをあける。

「多分、私ではない…母方の血が強いんでしょ」

「母方？」

光太郎はまた、お酌をする。

「孫の母親のおばが、世界的に有名な人物でして…」

「有名な人物？」

「安藤理恵…。ご存知ですかな？結婚して、すぐに離婚し、アメリカで亡くなったらしいのですが…」

「安藤理恵」

「勝手に離婚して、家を飛び出したらしく…向こうの家では、勘当されてるらしいんですが」

動きが止まっている光太郎に気づき、

「私だけ、飲んでるじゃないですか！さあ、時祭会長も」

「頂きます」

光太郎は、オチョコを差し出した。

座敷を離れ、歩く少女は、長い黒髪をなびかせ、

店を後にした。

その向かう先は…

愛する男がいる…

大路学園高校。

黄昏に香る音色2　紡ぐ思い・・・

完。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9428i/

黄昏に香る音色2 紡ぐ思い

2010年10月9日20時10分発行